徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第57集

徳島城下町遺跡
中徳島町１丁目地点

徳島県立城東高等学校校舎改築事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書

《第１分冊　本文編》

２００４

徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

徳島県埋蔵文化財センター調査報告書　第57集

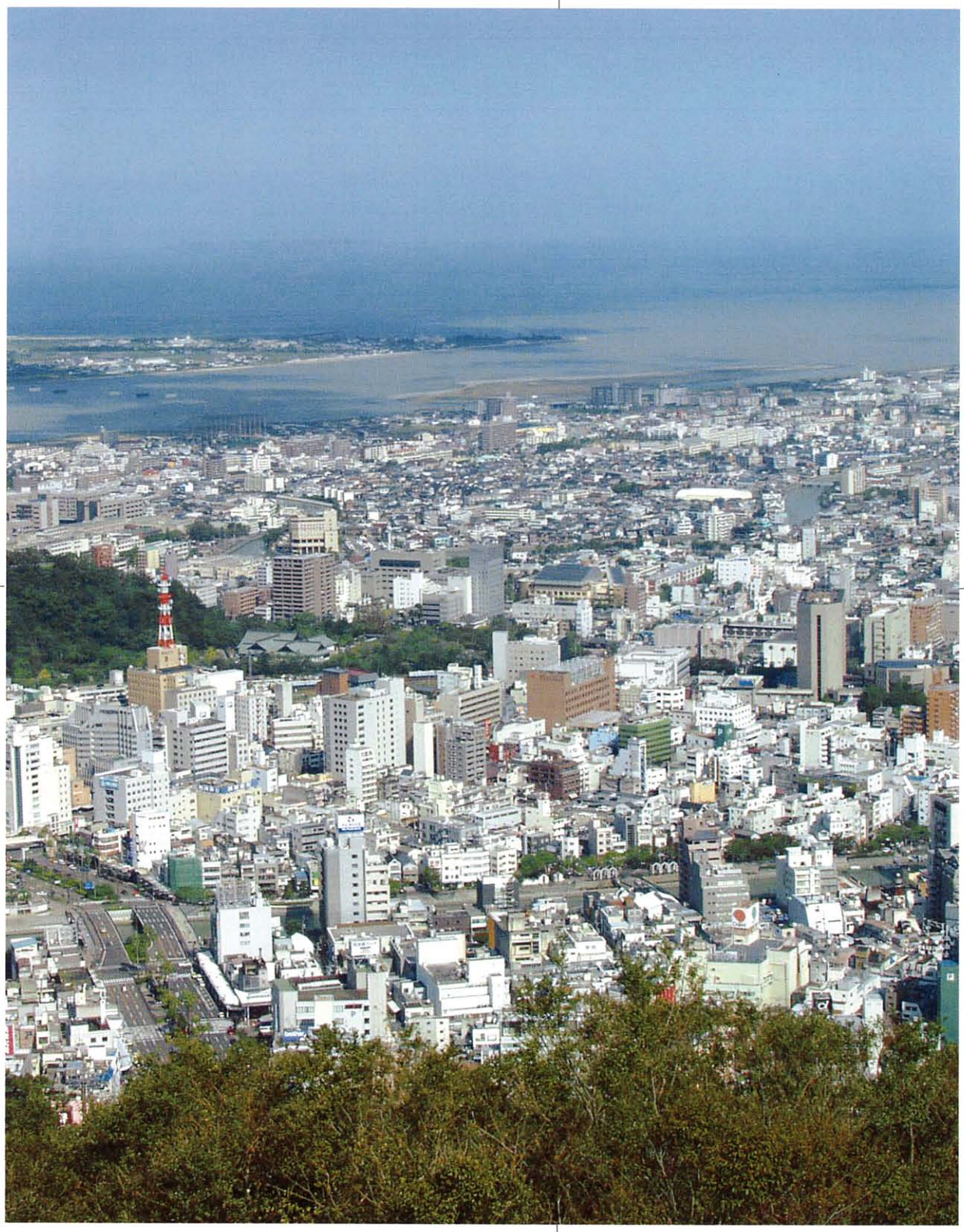
徳島城下町遺跡
中徳島町１丁目地点

徳島県立城東高等学校校舎改築事業関連
埋蔵文化財発掘調査報告書

《第１分冊　本文編》

２００４

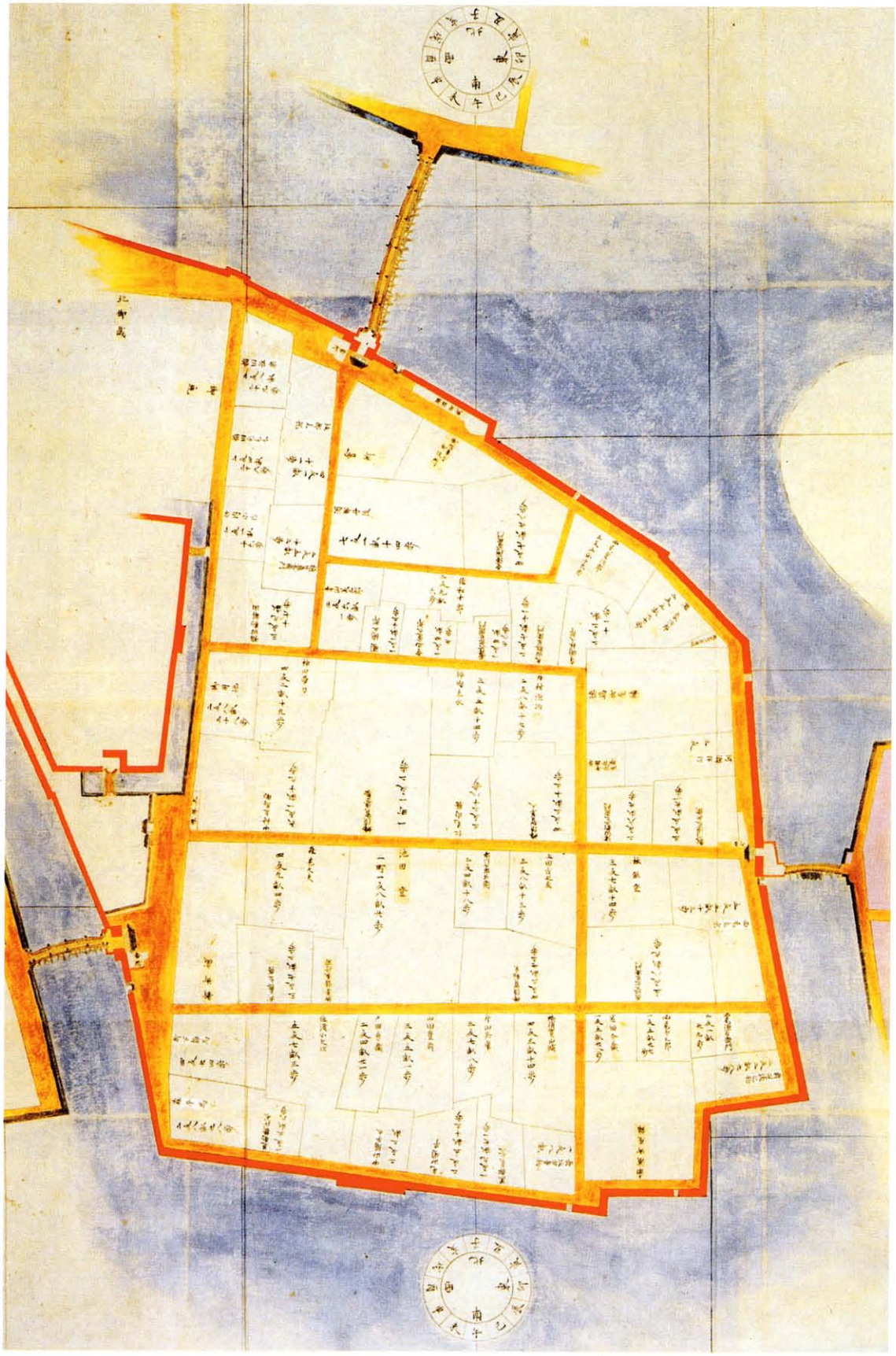
徳　島　県　教　育　委　員　会
財団法人　徳島県埋蔵文化財センター



徳島城下町遺跡遠影（中徳島町１丁目地点）

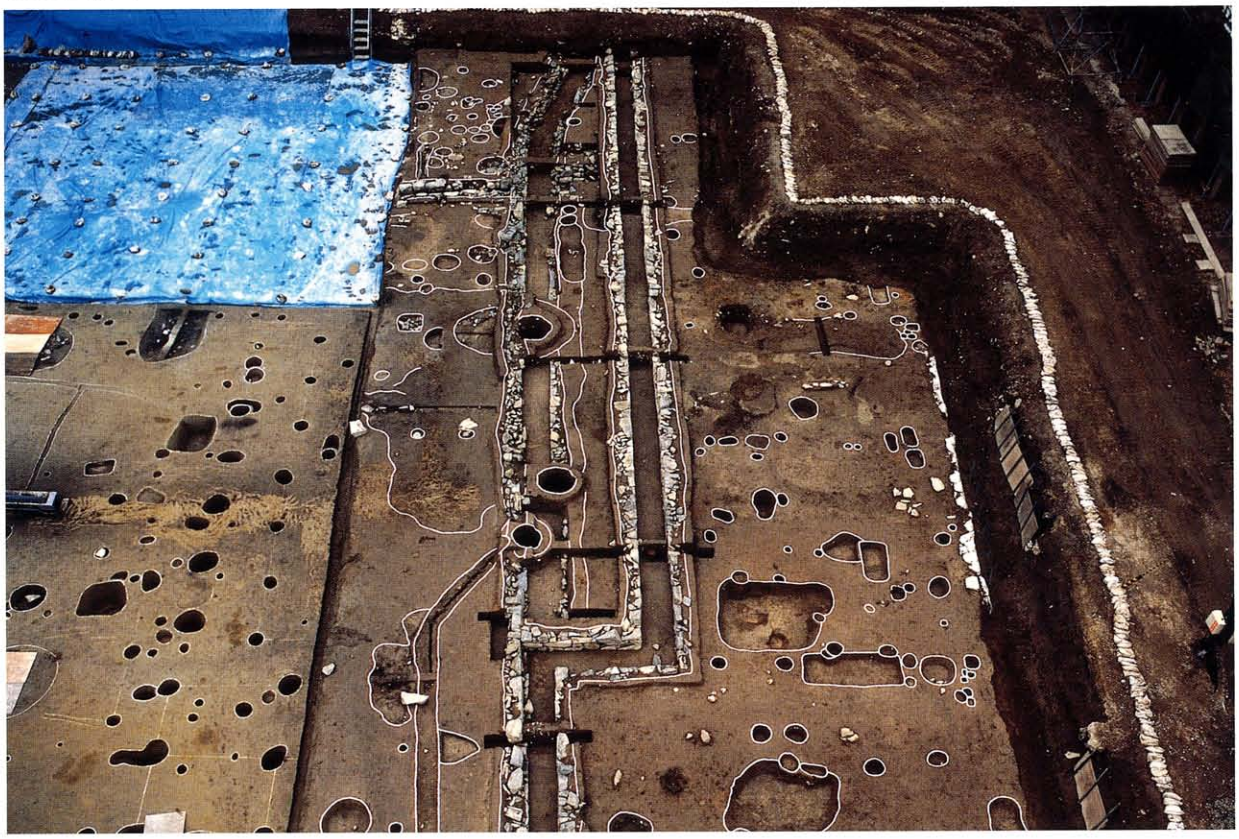
巻頭図版 2

阿波国渭津城下之絵図　天和 3 年（1683）国文学研究資料館蔵

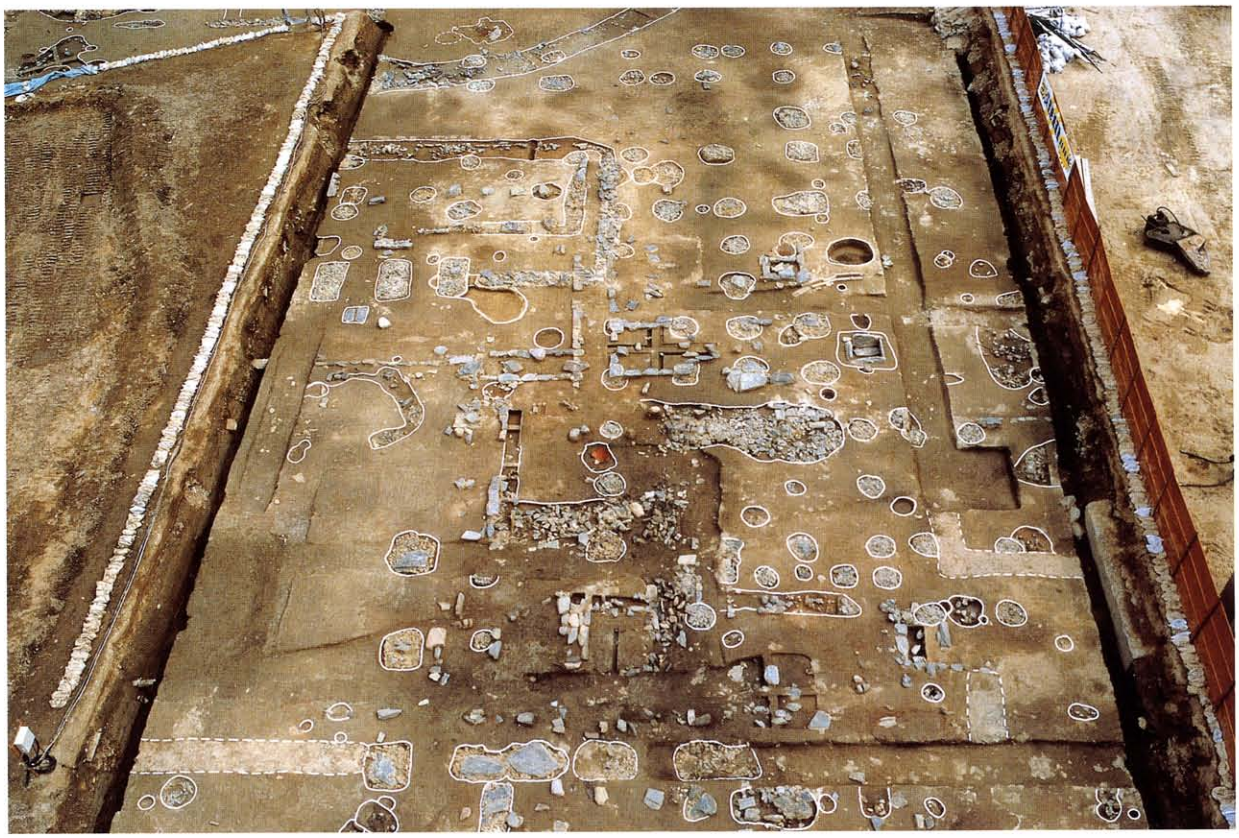


御山下島分絵図・徳島　安政 6 年（1859）個人蔵

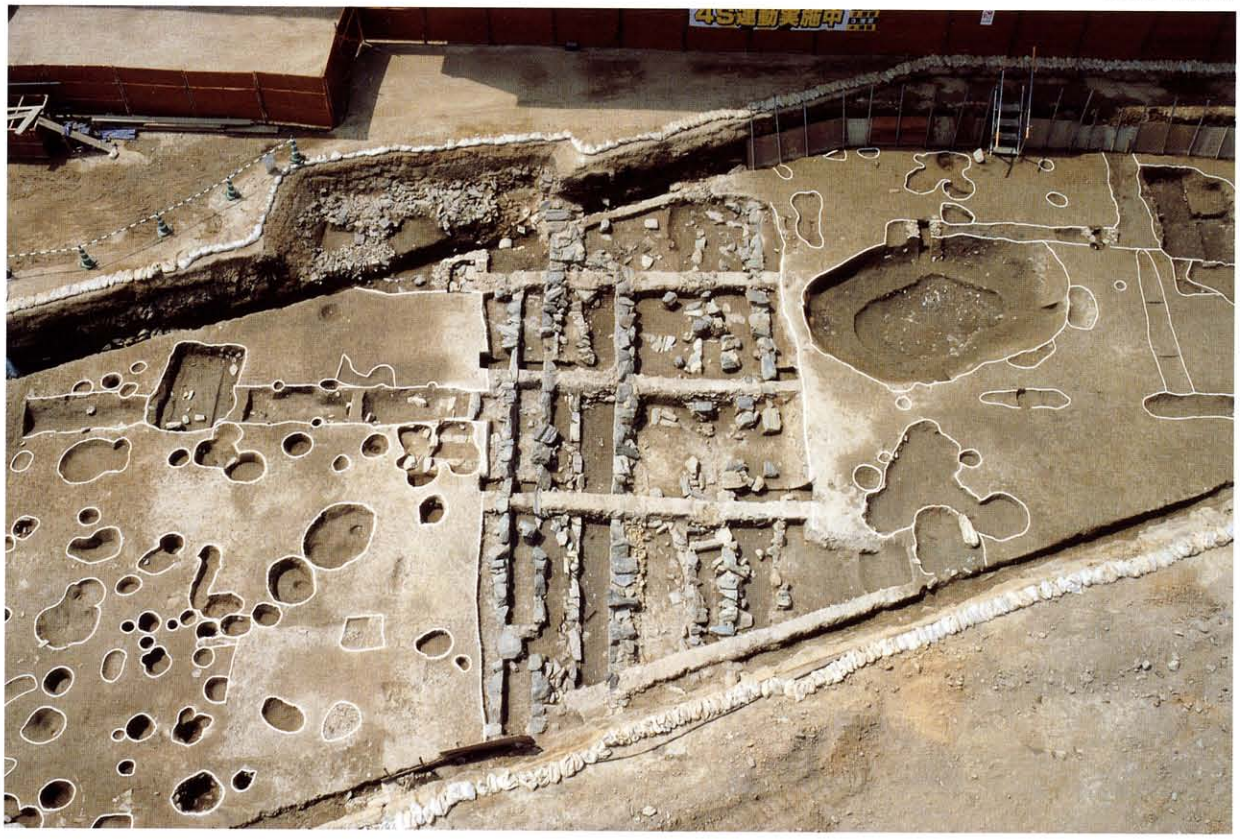
巻頭図版 4



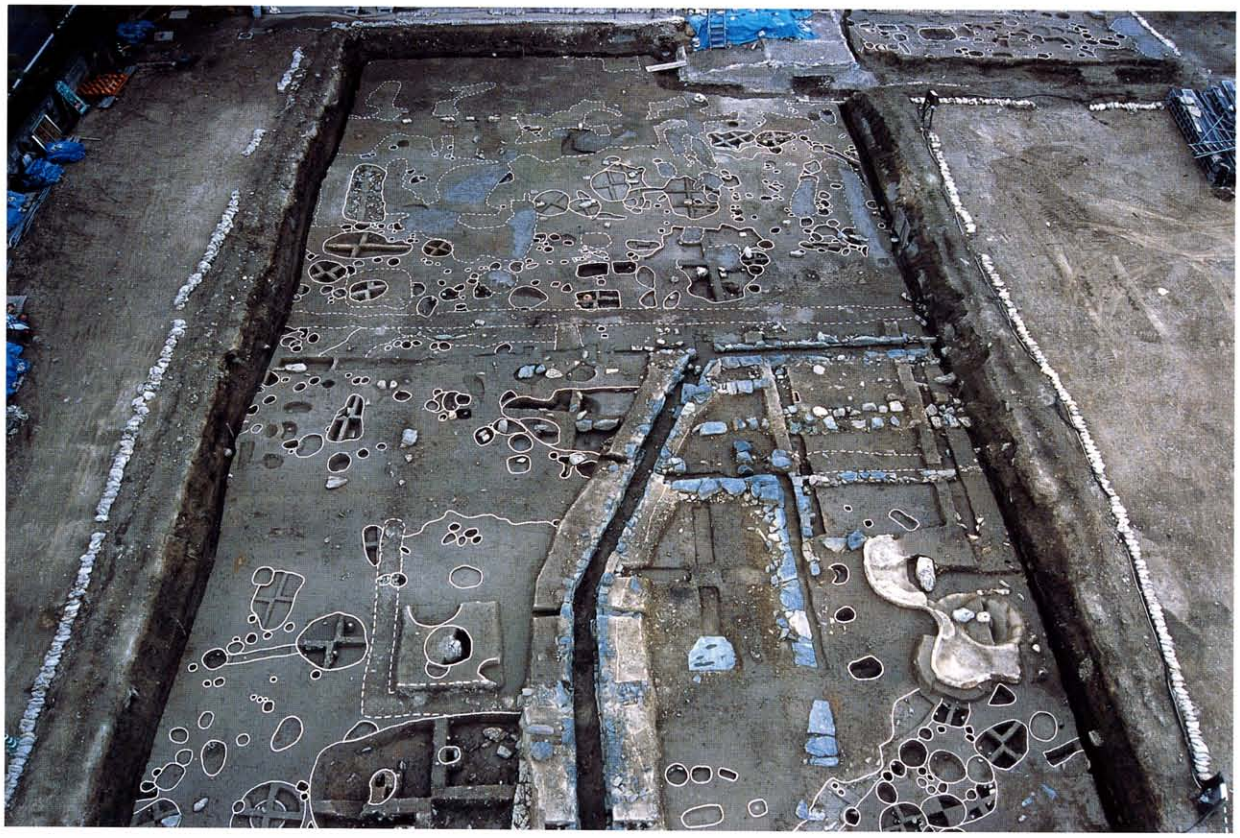
1 区北側　第 2 遺構面



1 区東側　第 1 遺構面

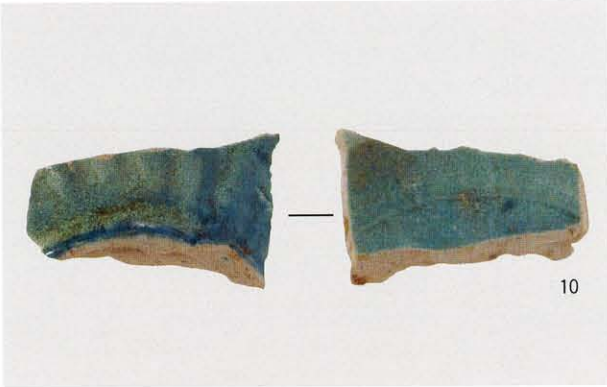


2 区全景　第 1 遺構面



3 区全景　第 2 遺構面

巻頭図版 6



1620・1622

1291・1292

1638

1634

665

巻頭図版 8

654

671

669

9

2112

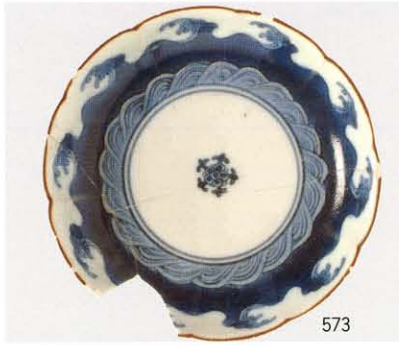
2043

663

648

699

673


573

66

2130

691

2084

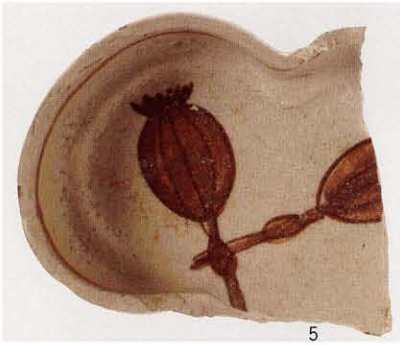
667

1770

1626

1975

788


5

1574

479

1001

1824

792

1805

323

巻頭図版10

2050

1595

115

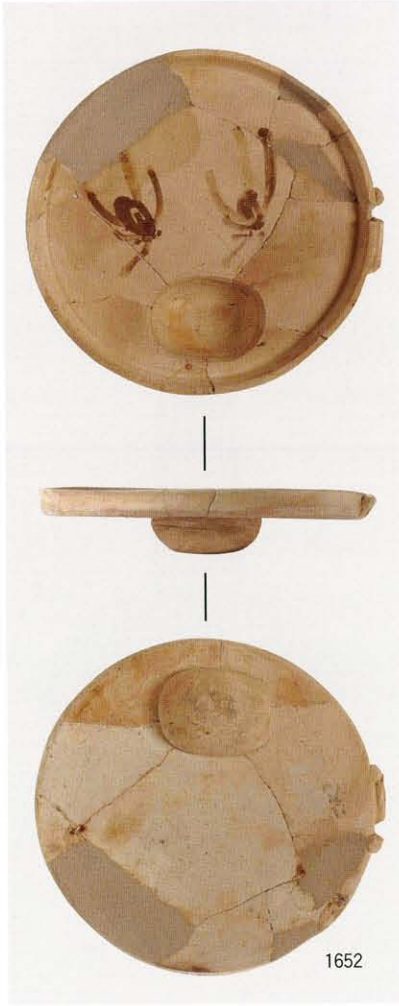
1572

2135

244

939

836


1652

1222

837

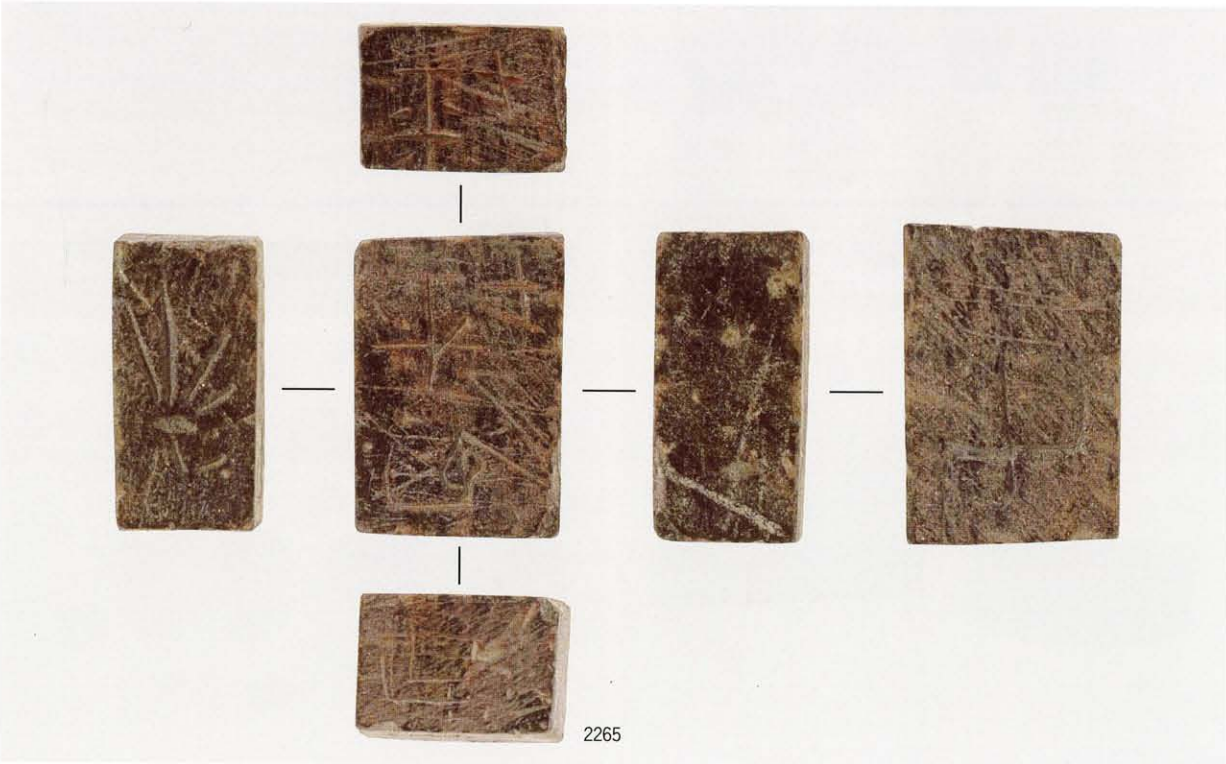
1159

2127

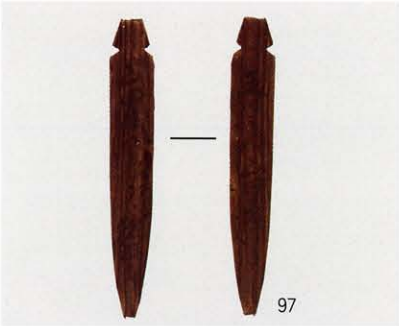
325

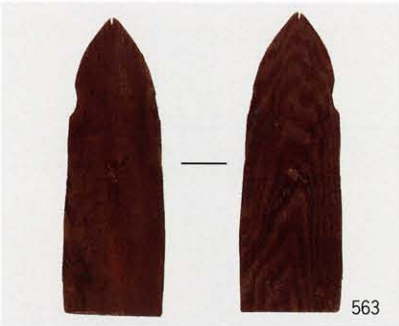
230

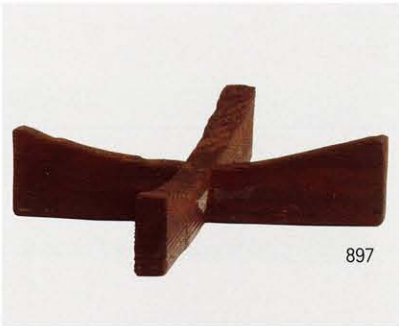
1244


2265

巻頭図版12


97


563


897

1867

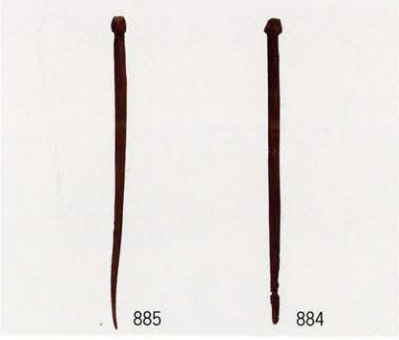
95 1458

2023

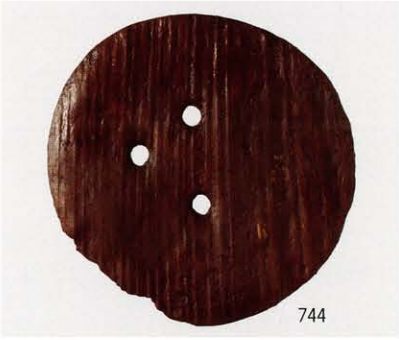
895

2212

848


885 884

736

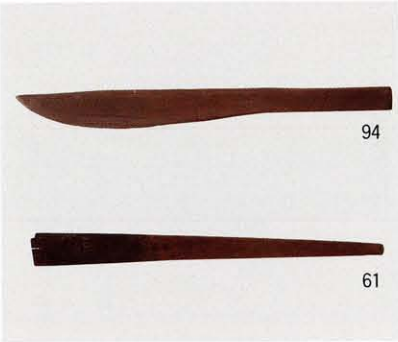

744

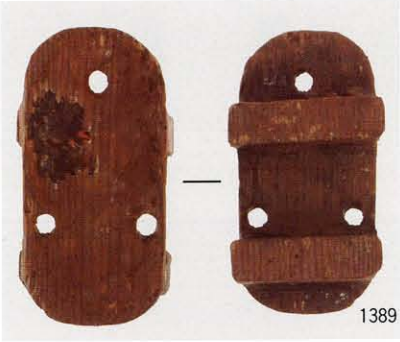
163

129

147

巻頭図版14





序　文

徳島市中徳島町１丁目５番地他に所在する「徳島城下町遺跡―中徳島町１丁目地点」は、吉野川により形成された徳島平野上にある徳島市の中心部に位置しています。

遺跡の調査は、徳島県教育委員会による徳島県立城東高等学校校舎改築が計画されたことによって、高校グラウンド部分の発掘を実施いたしました。

調査地点は、江戸時代には徳島藩の中・上級武士層の侍屋敷が立並んでいた場所であり、17世紀末には３～４軒の500石取り程度の藩士の屋敷跡、18世紀後半には蜂須賀駿河善儀（十代藩主　蜂須賀重喜公の四男で知行高4,000石）が屋敷を構え幕末まで主に蜂須賀氏の屋敷であったことが当時の絵図や検出した遺構、出土した遺物等から読みとれます。

今回の調査地点では、江戸時代全般にかけての遺構面が検出され、各種遺物が数多く出土しました。

特に瀬戸・美濃系や京・信楽系，肥前系，備前系，大谷焼等の陶磁器、土師質土器や土製品，木製品，石製品等、多くの産地のものが出土しました。また、伊万里，柿右衛門，古唐津，志野や織部の優品等も多数出土しています。江戸時代初期から幕末にかけての遺構面も確認され当該時期における上級武士層の豊かな生活状況や流通の一端を垣間見ることができます。

これらの成果をまとめた本報告書が地域の歴史解明の資料として活用され、埋蔵文化財に対する関心と理解を多くの人に深めていただくことが出来れば幸いです。

なお、発掘調査の実施・報告書の作成にあたり、多くの地元の皆様及び関係機関に多大の御援助・御協力並びにご教示をいただきましたことに深く感謝をいたします。

2005年３月

財団法人　徳島県埋蔵文化財センター
理事長　　松　村　通　治

例　言

1　本書は徳島県立城東高等学校校舎改築工事関連に伴って、平成13年度から平成14年度にかけ実施した徳島城下町遺跡－中徳島町１丁目地点の発掘調査報告書である。

2　発掘調査は徳島県教育委員会総務課より依頼を受けた徳島県教育委員会文化財課が平成12年度に試掘調査を行い、近世の遺構面等が存在することを確認したことから、平成13、14年度に文化財課から委託を受けた㈶徳島県埋蔵文化財センターが実施した。

3　発掘調査及び報告書作成についての実施期間は次の通りである。

・発掘調査期間　　平成13年４月１日～平成14年８月31日

・報告書作成期間　　平成15年４月１日～平成17年３月31日

4　遺構の表示は徳島県埋蔵文化財センターが定める発掘調査基準による略記号を用いた。

SA　掘立柱建物跡　　SD　溝　　SK　土坑　　SP　柱穴

SE　井戸　　SX　不明遺構

5　本書で用いた土層及び土器の色調は、小山正忠・竹原秀雄編『新版標準土色帖』2001年版によった。

6　遺構番号は通し番号とし、本文・挿図・表・図版と一致する。

7　第４図の「周辺の遺跡分布図」は、国土地理院発行の１／50,000の地形図「徳島」を80％に縮小し使用した。

8　観察表中の陶磁器等遺物成形方法において、轆轤成形法による遺物については表記を省略した。轆轤成形以外の成形法についてのみ、備考欄に表記している。

9　発掘調査，整理期間を通じて次の方々、機関の御協力，御教示を得た。

石尾　和仁　　石橋　峯幸　　大橋　康二　　日下　正剛　　重見　高博　　富岡　直人

中尾　賢一　　根津　寿夫　　橋本　寿夫　　蜂須賀弘行　　国文学資料館

徳島県立博物館　　徳島県立城東高等学校　　徳島市立徳島城博物館

（五十音順・敬称略）

10　自然科学分析（動物遺存体）は岡山理科大学　富岡　直人氏に依頼し遺物の分析と考察原稿執筆の御協力を得た。

11　本書の執筆・編集は、久保脇美朗、高橋栄子、田所賢治が行った。写真は、遺物のエックス線撮影を植地岳彦、遺物撮影を田所が、遺構は調査担当者が撮影した。

12　巻頭カラー図版２～３、写真１　掲載の絵図（「阿波国徳島城之図」「御山下島分絵図・徳島」「眉山絶頂より眺望」）については蜂須賀弘行氏および国文学研究資料館の御承諾を得て、徳島市立徳島城博物館の御協力により掲載した。

本　文　目　次

Ⅰ　調査の経緯……1
1　調査に至る経緯……3
2　調査の経過……5
3　調査日誌抄……7
Ⅱ　遺跡の立地と環境……9
1　地理的環境……11
2　歴史的環境……13
3　徳島城下町と調査区について……19
4　徳島城関係略年表……28
Ⅲ　調査成果……31
1　基本層序……33
(1)　第４遺構面……45
掘立柱建物跡……45
土坑……54
井戸……80
柱穴……83
不明遺構……83
(2)　第３遺構面……84
掘立柱建物跡……84
溝……84
土坑……104
井戸……168
柱穴……170
不明遺構……174
(3)　第２遺構面……212
掘立柱建物跡……212
溝……218
土坑……224
井戸……237
柱穴……237
不明遺構……241
(4)　第１遺構面……250
建物跡……250
溝……265
土坑……276

井戸 ……321
柱穴 ……324
不明遺構 ……331
(4) 包含層出土遺物 ……386
2 まとめ ……408
(1) 遺構全体について ……408
(2) 遺物について ……408
Ⅳ 自然化学分析 ……413
動物遺存体分析 ……415

巻頭図版目次

巻頭図版１　徳島城下町遺跡（中徳島町１丁目地点）
巻頭図版２　阿波国渭津城下之図
　　天和３年(1683)　国文学資料館資料
巻頭図版３　御山下島分絵図・徳島
　　安政６年(1859)　個人蔵
巻頭図版４　１区北側　第２遺構面
　　１区東側　第１遺構面
巻頭図版５　２区全景　第１遺構面
　　３区全景　第２遺構面
巻頭図版６　出土遺物(1)
巻頭図版７　出土遺物(2)
巻頭図版８　出土遺物(3)
巻頭図版９　出土遺物(4)
巻頭図版10　出土遺物(5)
巻頭図版11　出土遺物(6)
巻頭図版12　出土遺物(7)
巻頭図版13　出土遺物(8)
巻頭図版14　出土遺物(9)

挿 図 目 次

第１図　グリッド配置図 …… 6
第２図　徳島県の地形図 ……11
第３図　周辺の地形分類図 ……12
第４図　周辺の遺跡分布図 ……14
第５図　徳島城下町の町割 ……20
第６図　調査地点位置及び屋敷割図 ……22
第７図　調査区壁面土層検出位置図 ……33
第８図　調査区壁面土層断面図 ……34
第９図　第４遺構面遺構配置図 ……37
第10図　第３遺構面遺構配置図 ……39
第11図　第２遺構面遺構配置図 ……41
第12図　第１遺構面遺構配置図 ……43
第13図　SA4001実測図 ……45
第14図　SA4002実測図 ……46
第15図　SA4003実測図 ……47
第16図　SA4004実測図 ……48
第17図　SA4005実測図 ……49
第18図　SA4006実測図 ……50
第19図　SA4007実測図 ……51
第20図　SA4008実測図 ……52
第21図　SA4009実測図 ……53
第22図　SK4003実測図 ……55
第23図　SK4003出土遺物実測図 ……55
第24図　SK4015実測図 ……56
第25図　SK4015出土遺物実測図 ……56
第26図　SK4026実測図 ……57
第27図　SK4026出土遺物実測図 ……57
第28図　SK4027実測図 ……58
第29図　SK4027出土遺物実測図 ……58
第30図　SK4039実測図 ……59
第31図　SK4039出土遺物実測図 ……59
第32図　SK4043実測図 ……60
第33図　SK4043出土遺物実測図 (1) ……61
第34図　SK4043出土遺物実測図 (2) ……62
第35図　SK4044実測図 ……63
第36図　SK4044出土遺物実測図 ……63
第37図　SK4045実測図 ……64
第38図　SK4045出土遺物実測図 ……64
第39図　SK4052実測図 ……65
第40図　SK4052出土遺物実測図 ……66
第41図　SK4055実測図 ……67
第42図　SK4055出土遺物実測図 ……68

第 43 図　SK4063実測図……69
第 44 図　SK4063出土遺物実測図……69
第 45 図　SK4077実測図……69
第 46 図　SK4077出土遺物実測図……69
第 47 図　SK4082実測図……70
第 48 図　SK4082出土遺物実測図……70
第 49 図　SK4083実測図……70
第 50 図　SK4083出土遺物実測図……70
第 51 図　SK4093実測図……70
第 52 図　SK4093出土遺物実測図……70
第 53 図　SK4100実測図……71
第 54 図　SK4100出土遺物実測図……71
第 55 図　SK4110実測図……71
第 56 図　SK4110出土遺物実測図……71
第 57 図　SK4111実測図……71
第 58 図　SK4111出土遺物実測図……71
第 59 図　SK4113実測図……72
第 60 図　SK4113出土遺物実測図……72
第 61 図　SK4116実測図……72
第 62 図　SK4149実測図……72
第 63 図　SK4116出土遺物実測図……73
第 64 図　SK4149出土遺物実測図……74
第 65 図　SK4172実測図……75
第 66 図　SK4172出土遺物実測図……76
第 67 図　SK4186実測図……77
第 68 図　SK4186出土遺物実測図……77
第 69 図　SE4001実測図……78
第 70 図　SE4001出土遺物実測図……78
第 71 図　SE4003実測図……79
第 72 図　SE4003出土遺物実測図……79
第 73 図　SE4004実測図……80
第 74 図　SE4004出土遺物実測図……81
第 75 図　SP 出土遺物実測図……82
第 76 図　SX4030実測図……83
第 77 図　SX4030出土遺物実測図……83
第 78 図　SA3001実測図……85
第 79 図　SA3002実測図……85
第 80 図　SA3003実測図……87
第 81 図　第 3 遺構面溝断面実測図 (1)……89
第 82 図　第 3 遺構面溝断面実測図 (2)……90
第 83 図　SD3002出土遺物実測図……91
第 84 図　SD3003出土遺物実測図 (1) ……92
第 85 図　SD3003出土遺物実測図 (2) ……93
第 86 図　SD3005出土遺物実測図 (1) ……94
第 87 図　SD3005出土遺物実測図 (2) ……95
第 88 図　SD3005出土遺物実測図 (3) ……97
第 89 図　SD3005出土遺物実測図 (4) ……98
第 90 図　SD3005出土遺物実測図 (5) ……99
第 91 図　SD3006出土遺物実測図 ……102
第 92 図　SD3008出土遺物実測図 ……102
第 93 図　SD3009出土遺物実測図 ……102
第 94 図　SD3010出土遺物実測図 ……103
第 95 図　SK3001実測図 ……103
第 96 図　SK3001出土遺物実測図 ……104
第 97 図　SK3003実測図 ……105
第 98 図　SK3003出土遺物実測図 ……105
第 99 図　SK3006実測図 ……106
第100図　SK3007実測図 ……106
第101図　SK3008・SK3009実測図 ……106
第102図　SK3006出土遺物実測図 ……107
第103図　SK3007出土遺物実測図 ……107
第104図　SK3008出土遺物実測図 ……108
第105図　SK3009出土遺物実測図 ……108
第106図　SK3011実測図 ……109
第107図　SK3011出土遺物実測図 ……110
第108図　SK3012実測図 ……111
第109図　SK3012出土遺物実測図 ……111
第110図　SK3014実測図 ……112
第111図　SK3014出土遺物実測図 ……112
第112図　SK3015実測図 ……113
第113図　SK3015出土遺物実測図 (1)……115
第114図　SK3015出土遺物実測図 (2)……116

第115図　SK3015出土遺物実測図 (3)……117
第116図　SK3015出土遺物実測図 (4)……118
第117図　SK3015出土遺物実測図 (5)……119
第118図　SK3015出土遺物実測図 (6)……120
第119図　SK3016実測図 ……121
第120図　SK3016出土遺物実測図 ……121
第121図　SK3031実測図 ……123
第122図　SK3031出土遺物実測図 ……123
第123図　SK3033実測図 ……124
第124図　SK3033出土遺物実測図 ……124
第125図　SK3040実測図 ……126
第126図　SK3040出土遺物実測図 ……126
第127図　SK3041実測図 ……126
第128図　SK3041出土遺物実測図 ……127
第129図　SK3042実測図 ……128
第130図　SK3042出土遺物実測図 ……128
第131図　SK3043実測図 ……128
第132図　SK3043出土遺物実測図 ……128
第133図　SK3046実測図 ……130
第134図　SK3046出土遺物実測図 ……130
第135図　SK3048実測図 ……130
第136図　SK3048出土遺物実測図 ……130
第137図　SK3051実測図 ……130
第138図　SK3051出土遺物実測図 ……130
第139図　SK3052実測図 ……131
第140図　SK3052出土遺物実測図 ……131
第141図　SK3054実測図 ……131
第142図　SK3054出土遺物実測図 ……131
第143図　SK3059実測図 ……133
第144図　SK3059出土遺物実測図 ……133
第145図　SK3066実測図 ……133
第146図　SK3066出土遺物実測図 (1)……134
第147図　SK3066出土遺物実測図 (2)……135
第148図　SK3066出土遺物実測図 (3)……136
第149図　SK3078実測図 ……137
第150図　SK3078出土遺物実測図 ……137
第151図　SK3079実測図 ……137
第152図　SK3079出土遺物実測図 ……137
第153図　SK3094実測図 ……138
第154図　SK3094出土遺物実測図 ……139
第155図　SK3101実測図 ……140
第156図　SK3101出土遺物実測図 (1)……141
第157図　SK3101出土遺物実測図 (2)……142
第158図　SK3104実測図 ……143
第159図　SK3104出土遺物実測図 ……143
第160図　SK3126実測図 ……143
第161図　SK3126出土遺物実測図 ……144
第162図　SK3140実測図 ……146
第163図　SK3140出土遺物実測図 ……146
第164図　SK3141実測図 ……146
第165図　SK3141出土遺物実測図 ……146
第166図　SK3142実測図 ……147
第167図　SK3142出土遺物実測図 ……147
第168図　SK3144実測図 ……148
第169図　SK3144出土遺物実測図 ……148
第170図　SK3153実測図 ……150
第171図　SK3153出土遺物実測図 ……150
第172図　SK3162実測図 ……151
第173図　SK3162出土遺物実測図 ……151
第174図　SK3164実測図 ……152
第175図　SK3164出土遺物実測図 ……152
第176図　SK3184実測図 ……153
第177図　SK3184出土遺物実測図 ……153
第178図　SK3197実測図 ……155
第179図　SK3197出土遺物実測図 ……155
第180図　SK3229実測図 ……155
第181図　SK3229出土遺物実測図 ……156
第182図　SK3231実測図 ……157
第183図　SK3231出土遺物実測図 ……157
第184図　SK3237実測図 ……158
第185図　SK3237出土遺物実測図 ……158
第186図　SK3254実測図 ……159

第187図　SK3254出土遺物実測図 ……159
第188図　SK3267実測図 ……161
第189図　SK3267出土遺物実測図 ……161
第190図　SK3271実測図 ……161
第191図　SK3271出土遺物実測図 ……161
第192図　SK3275実測図 ……161
第193図　SK3275出土遺物実測図 (1)……162
第194図　SK3275出土遺物実測図 (2)……163
第195図　SK3282実測図 ……165
第196図　SK3282出土遺物実測図 ……165
第197図　SK3283実測図 ……166
第198図　SK3283出土遺物実測図 ……166
第199図　SK3286実測図 ……166
第200図　SK3286出土遺物実測図 ……166
第201図　SK3289実測図 ……167
第202図　SK3289出土遺物実測図 ……167
第203図　SK3297実測図 ……167
第204図　SK3297出土遺物実測図 ……167
第205図　SK3301実測図 ……167
第206図　SK3301出土遺物実測図 ……167
第207図　SE3002実測図 ……169
第208図　SE3002出土遺物実測図 ……169
第209図　SE3003実測図 ……170
第210図　SE3003出土遺物実測図 ……170
第211図　SE3004実測図 ……172
第212図　SE3004出土遺物実測図 ……172
第213図　SP 出土遺物実測図 ……173
第214図　SX3001実測図 ……175
第215図　SX3001出土遺物実測図 (1)……178
第216図　SX3001出土遺物実測図 (2)……179
第217図　SX3001出土遺物実測図 (3)……180
第218図　SX3001出土遺物実測図 (4)……182
第219図　SX3001出土遺物実測図 (5)……183
第220図　SX3001出土遺物実測図 (6)……185
第221図　SX3001出土遺物実測図 (7)……186
第222図　SX3001出土遺物実測図 (8)……187
第223図　SX3001出土遺物実測図 (9)……188
第224図　SX3001出土遺物実測図 (10)……189
第225図　SX3002実測図 ……191
第226図　SX3002出土遺物実測図 (1)……192
第227図　SX3002出土遺物実測図 (2)……193
第228図　SX3004実測図 ……194
第229図　SX3004出土遺物実測図 ……194
第230図　SX3007実測図 ……195
第231図　SX3007出土遺物実測図 ……195
第232図　SX3008実測図 ……196
第233図　SX3008出土遺物実測図 ……196
第234図　SX3010実測図 ……197
第235図　SX3010出土遺物実測図 ……197
第236図　SX3015実測図 ……197
第237図　SX3015出土遺物実測図 ……197
第238図　SX3016実測図 ……199
第239図　SX3016出土遺物実測図 (1)……201
第240図　SX3016出土遺物実測図 (2)……202
第241図　SX3016出土遺物実測図 (3)……203
第242図　SX3016出土遺物実測図 (4)……204
第243図　SX3016出土遺物実測図 (5)……205
第244図　SX3016出土遺物実測図 (6)……206
第245図　SX3016出土遺物実測図 (7)……207
第246図　SX3017実測図 ……208
第247図　SX3017出土遺物実測図 ……209
第248図　SX3019実測図 ……210
第249図　SX3019出土遺物実測図 ……211
第250図　SA2001実測図 ……213
第251図　SA2001出土遺物実測図 ……213
第252図　SA2002実測図 ……213
第253図　SA2002出土遺物実測図 ……213
第254図　SA2003実測図 ……215
第255図　SA2004実測図 ……215
第256図　第 2 遺構面溝断面実測図……216
第257図　SD2001出土遺物実測図 (1)……217
第258図　SD2001出土遺物実測図 (2)……218

第259図　SD2005出土遺物実測図 ……219
第260図　SD2006出土遺物実測図 ……219
第261図　SD2013出土遺物実測図 ……220
第262図　SD2016出土遺物実測図 ……220
第263図　SK2001実測図 ……223
第264図　SK2001出土遺物実測図 ……223
第265図　SK2002実測図 ……224
第266図　SK2002出土遺物実測図 ……224
第267図　SK2003実測図 ……225
第268図　SK2003出土遺物実測図 ……225
第269図　SK2004実測図 ……227
第270図　SK2004出土遺物実測図 ……227
第271図　SK2024実測図 ……227
第272図　SK2024出土遺物実測図 ……227
第273図　SK2028実測図 ……227
第274図　SK2028出土遺物実測図 ……227
第275図　SK2031実測図 ……228
第276図　SK2031出土遺物実測図 ……229
第277図　SK2032実測図 ……230
第278図　SK2032出土遺物実測図 ……230
第279図　SK2041実測図 ……231
第280図　SK2041出土遺物実測図 ……231
第281図　SK2068実測図 ……231
第282図　SK2068出土遺物実測図 ……232
第283図　SK2084実測図 ……233
第284図　SK2084出土遺物実測図 ……233
第285図　SK2085実測図 ……233
第286図　SK2085出土遺物実測図 ……233
第287図　SK2102実測図 ……233
第288図　SK2102出土遺物実測図 ……233
第289図　SK2106実測図 ……235
第290図　SK2106出土遺物実測図 ……235
第291図　SK2111実測図 ……235
第292図　SK2111出土遺物実測図 ……235
第293図　SK2113実測図 ……235
第294図　SK2113出土遺物実測図 ……235
第295図　SK2146実測図 ……236
第296図　SK2146出土遺物実測図 ……236
第297図　SK2154実測図 ……236
第298図　SK2154出土遺物実測図 ……236
第299図　SE2002実測図 ……238
第300図　SE2002出土遺物実測図 ……238
第301図　SP 出土遺物実測図 ……239
第302図　SX2001実測図 ……240
第303図　SX2001出土遺物実測図 ……241
第304図　SX2003実測図 ……242
第305図　SX2003出土遺物実測図 (1)……243
第306図　SX2003出土遺物実測図 (2)……244
第307図　SX2005実測図 ……246
第308図　SX2005出土遺物実測図 ……247
第309図　SX2010実測図 ……248
第310図　SX2010出土遺物実測図 ……248
第311図　SX2011実測図 ……249
第312図　SX2011出土遺物実測図 ……249
第313図　SX2017実測図 ……249
第314図　SX2017出土遺物実測図 ……249
第315図　SA1001実測図 ……251
第316図　SA1001出土遺物実測図 ……251
第317図　SA1002実測図 ……251
第318図　SA1003実測図 ……253
第319図　SA1003出土遺物実測図 ……253
第320図　SA1004実測図 ……255
第321図　SA1005実測図 ……255
第322図　SA1006実測図 ……257
第323図　SA1006出土遺物実測図 ……257
第324図　SA1007・SA1008実測図 ……259
第325図　SA1009実測図 ……259
第326図　SA1010実測図 ……261
第327図　SA1010出土遺物実測図 ……261
第328図　SA1011実測図 ……261
第329図　SA1012実測図 ……261
第330図　SA1013実測図 ……261

第331図　SA1013出土遺物実測図 ……261
第332図　第１遺構面溝断面実測図……264
第333図　SD1003出土遺物実測図 (1)……267
第334図　SD1003出土遺物実測図 (2)……268
第335図　SD1003出土遺物実測図 (3)……269
第336図　SD1003出土遺物実測図 (4)……270
第337図　SD1003出土遺物実測図 (5)……271
第338図　SD1004出土遺物実測図 ……272
第339図　SD1005出土遺物実測図 ……272
第340図　SD1008出土遺物実測図 ……273
第341図　SD1009出土遺物実測図 (1)……275
第342図　SD1009出土遺物実測図 (2)……276
第343図　SD1011出土遺物実測図 ……277
第344図　SK1002実測図 ……278
第345図　SK1002出土遺物実測図 ……278
第346図　SK1008実測図 ……278
第347図　SK1008出土遺物実測図 ……278
第348図　SK1009実測図 ……280
第349図　SK1009出土遺物実測図 ……280
第350図　SK1017実測図 ……280
第351図　SK1017出土遺物実測図 ……280
第352図　SK1019実測図 ……281
第353図　SK1019出土遺物実測図 ……281
第354図　SK1024実測図 ……282
第355図　SK1024出土遺物実測図 ……282
第356図　SK1027実測図 ……283
第357図　SK1027出土遺物実測図 (1)……285
第358図　SK1027出土遺物実測図 (2)……286
第359図　SK1027出土遺物実測図 (3)……288
第360図　SK1027出土遺物実測図 (4)……289
第361図　SK1027出土遺物実測図 (5)……291
第362図　SK1027出土遺物実測図 (6)……292
第363図　SK1027出土遺物実測図 (7)……293
第364図　SK1027出土遺物実測図 (8)……294
第365図　SK1027出土遺物実測図 (9)……295
第366図　SK1027出土遺物実測図 (10)……296
第367図　SK1036実測図 ……297
第368図　SK1036出土遺物実測図 ……297
第369図　SK1046実測図 ……297
第370図　SK1046出土遺物実測図 (1)……299
第371図　SK1046出土遺物実測図 (2)……300
第372図　SK1047実測図 ……302
第373図　SK1047出土遺物実測図 ……302
第374図　SK1052実測図 ……303
第375図　SK1052出土遺物実測図 ……303
第376図　SK1053実測図 ……304
第377図　SK1053出土遺物実測図 ……305
第378図　SK1055実測図 ……306
第379図　SK1055出土遺物実測図 ……306
第380図　SK1056実測図 ……306
第381図　SK1056出土遺物実測図 ……306
第382図　SK1057実測図 ……308
第383図　SK1058実測図 ……308
第384図　SK1057出土遺物実測図 ……309
第385図　SK1058出土遺物実測図 (1)……310
第386図　SK1058出土遺物実測図 (2)……311
第387図　SK1060実測図 ……312
第388図　SK1060出土遺物実測図 ……312
第389図　SK1067実測図 ……313
第390図　SK1067出土遺物実測図 ……313
第391図　SK1073実測図 ……314
第392図　SK1073出土遺物実測図 ……315
第393図　SK1088実測図 ……317
第394図　SK1088出土遺物実測図 ……317
第395図　SK1103実測図 ……317
第396図　SK1103出土遺物実測図 ……318
第397図　SK1108実測図 ……318
第398図　SK1108出土遺物実測図 ……319
第399図　SK1114実測図 ……320
第400図　SK1114出土遺物実測図 ……320
第401図　SK1140実測図 ……320
第402図　SK1140出土遺物実測図 ……320

第403図　SK1141実測図 ……322
第404図　SK1141出土遺物実測図 ……322
第405図　SE1001実測図 ……323
第406図　SE1001出土遺物実測図 ……323
第407図　SE1002実測図 ……325
第408図　SE1002出土遺物実測図 ……325
第409図　SE1004実測図 ……325
第410図　SE1004出土遺物実測図 ……325
第411図　SE1005実測図 ……326
第412図　SE1005出土遺物実測図 ……326
第413図　SP 出土遺物実測図 (1)……327
第414図　SP 出土遺物実測図 (2)……329
第415図　SX1003実測図 ……331
第416図　SX1003出土遺物実測図 ……331
第417図　SX1004実測図 ……333
第418図　SX1004出土遺物実測図 (1)……335
第419図　SX1004出土遺物実測図 (2)……336
第420図　SX1004出土遺物実測図 (3)……337
第421図　SX1004出土遺物実測図 (4)……338
第422図　SX1004出土遺物実測図 (5)……339
第423図　SX1004出土遺物実測図 (6)……340
第424図　SX1004出土遺物実測図 (7)……341
第425図　SX1006実測図 ……342
第426図　SX1006出土遺物実測図 ……342
第427図　SX1008実測図 ……343
第428図　SX1008出土遺物実測図 (1)……344
第429図　SX1008出土遺物実測図 (2)……345
第430図　SX1008出土遺物実測図 (3)……346
第431図　SX1009実測図 ……348
第432図　SX1009出土遺物実測図 ……348
第433図　SX1010実測図 ……349
第434図　SX1010出土遺物実測図 (1)……351
第435図　SX1010出土遺物実測図 (2)……352
第436図　SX1010出土遺物実測図 (3)……353
第437図　SX1010出土遺物実測図 (4)……354
第438図　SX1010出土遺物実測図 (5)……357
第439図　SX1010出土遺物実測図 (6)……358
第440図　SX1010出土遺物実測図 (7)……359
第441図　SX1010出土遺物実測図 (8)……360
第442図　SX1010出土遺物実測図 (9)……361
第443図　SX1010出土遺物実測図 (10)……362
第444図　SX1010出土遺物実測図 (11)……363
第445図　SX1010出土遺物実測図 (12)……364
第446図　SX1013実測図 ……366
第447図　SX1013出土遺物実測図 ……366
第448図　SX1014実測図 ……367
第449図　SX1014出土遺物実測図 (1)……368
第450図　SX1014出土遺物実測図 (2)……369
第451図　SX1014出土遺物実測図 (3)……370
第452図　SX1014出土遺物実測図 (4)……371
第453図　SX1015実測図 ……373
第454図　SX1015出土遺物実測図 ……373
第455図　SX1017実測図 ……373
第456図　SX1017出土遺物実測図 ……374
第457図　SX1018実測図 ……376
第458図　SX1018出土遺物実測図 ……376
第459図　SX1019実測図 ……377
第460図　SX1019出土遺物実測図 (1)……378
第461図　SX1019出土遺物実測図 (2)……380
第462図　SX1019出土遺物実測図 (3)……381
第463図　SX1019出土遺物実測図 (4)……382
第464図　SX1019出土遺物実測図 (5)……383
第465図　SX1019出土遺物実測図 (6)……384
第466図　SX1021実測図 ……385
第467図　SX1021出土遺物実測図 ……385
第468図　包含層出土遺物実測図 (1) ……387
第469図　包含層出土遺物実測図 (2) ……388
第470図　包含層出土遺物実測図 (3) ……390
第471図　包含層出土遺物実測図 (4) ……391
第472図　包含層出土遺物実測図 (5) ……392
第473図　包含層出土遺物実測図 (6) ……394
第474図　包含層出土遺物実測図 (7) ……395

第475図　包含層出土遺物実測図 (8) ……396
第476図　包含層出土遺物実測図 (9) ……398
第477図　包含層出土遺物実測図 (10) ……399
第478図　包含層出土遺物実測図 (11) ……400
第479図　包含層出土遺物実測図 (12) ……402
第480図　包含層出土遺物実測図 (13) ……403
第481図　包含層出土遺物実測図 (14) ……404
第482図　包含層出土遺物実測図 (15) ……405
第483図　包含層出土遺物実測図 (16) ……406

表　目　次

第１表　調査区の絵図・地図・文書の記述……24

写 真 目 次

写真１　眉山絶頂より眺望（部分）……23

付　　図

付図１　第４遺構面遺構配置図
付図２　第３遺構面遺構配置図
付図３　第２遺構面遺構配置図
付図４　第１遺構面遺構配置図

Ⅰ　調　査　の　経　緯

1　調査に至る経緯

徳島城下町は、徳島市街地の中心に位置する標高61.7mの城山（猪山）のある徳島を中心として、出来島、寺島、常三島、住吉島、福島などの三角州やその周辺に広がる富田、助任、前川、佐古の各地区から構成されている。

今回発掘調査の対象となった徳島県立城東高等学校（以下、城東高校という）は、徳島市中徳島町１丁目にあり、城山の東麓に位置する。当地一帯は、江戸時代を通じ上級武士層の屋敷地であり、特に江戸時代末期には家老・中老格の屋敷が軒を連ねていたことが絵図から読みとれる。徳島城下の枢要の地であったと言えよう。

城東高校の校舎老朽化に伴う改築工事は平成11年度に事業化された。同年、徳島県教育委員会教育総務課（以下、教育総務課という。）から文化財課に対し、城東高校校舎改築に係る埋蔵文化財の有無とその取り扱いについての照会があった。既に述べたように城東高校敷地は、江戸時代には徳島城下町の中心部である徳島地区にあたり、絵図等の資料からはその大部分が徳島藩家老蜂須賀安藝守の屋敷地と重なることがわかっていた。ただ、当該地は徳島市街地の中心部にあるため、近代以降の土地利用による破壊・改変を受けていることも予想された。そこで、教育総務課と文化財課は協議の上、遺構の残存状況を確認をするために事前の試掘調査を実施すること、遺構が残存する場合は、その部分について工事着手前に発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を図ることなどで合意した。

試掘調査は、文化財課が教育総務課の依頼（平成11.10.４付教総課第428号）を受け、平成12年１月４日と５日に実施した。新校舎建設予定地である現グラウンドで利用に支障のない範囲で２×４ｍの試掘トレンチを４箇所、計30㎡掘削した。試掘の結果、当初想定した後世の破壊は少なく、箇所により３～５面の遺構面（江戸時代初期から末期）が良好な状態で遺存していることを確認した。また、１箇所では屋敷境の溝と見られる南北方向に延びる結晶片岩積みの水路を検出した。

平成12年９月、試掘調査の結果を踏まえ、教育総務課と施工を担当する徳島県土木部（現県土整備部）営繕課（以下、営繕課という。）と文化財課の三者で発掘調査の実施時期と方法について協議を持った。発掘調査は校舎建設工事の開始時期と既存構築物の解体及び排土置き場等の確保を考慮し、２ヶ年に分けて実施することとした。

発掘調査は、徳島県が㈶徳島県埋蔵文化財センター（以下、センターという。）に委託し、平成13年度延べ28ヶ月、平成14年度延べ10ヶ月の計38ヶ月で終了し、平成14年10月工事着工となった。

なお、この発掘調査の終了に伴い調査報告書を発刊する運びとなり、当埋蔵文化財センターが平成15年４月１日～平成17年３月31日に遺物整理及び報告書作成にあたることとなった。

調査体制及び整理体制は以下のとおりである。

＜総括、総務担当＞

◯財団法人　徳島県埋蔵文化財センター

理　事　長	松村　通治（平成13・14・15・16年度）
専務理事兼所長	本淨　敏之（平成13・14・15年度）
	浦上　純二（平成16年度）

常務理事兼事務局長	伊丹　康裕（平成13年度）
	西村　和博（平成14・15年度）
	河野　幸一（平成16年度）
次長兼総務課長	高野　　明（平成13年度）
	山本　高史（平成14・15年度）
	古田　哲朗（平成16年度）
調査課長	菅原　康夫（平成13・14年度）
整理普及課長	島巡　賢二（平成15・16年度）
調査係長	光山　忠幸（平成13年度）
	新居　文和（平成14年度）
設計係長	原田　敏夫（平成14年度）
整理係長	貞野　雅巳（平成15・16年度）
普及係長	関本　秋夫（平成15・16年度）
総務係長	福本　紀美子（平成13・14年度）
	坂尾　俊一（平成15・16年度）
事務主任	鈴木　智栄（平成15・16年度）

＜発掘調査担当＞

○徳島県埋蔵文化財センター

研究員	原　芳伸	樋谷　久代	高橋　栄子（平成13年度）
	前田　綾博	岩佐　正人（平成14年度）	
	近藤　佳人	喜多　啓二（平成13・14年度）	

＜整理担当＞

○徳島県埋蔵文化財センター

研究主査	久保脇　美朗（15年度）	
研究員	高橋　栄子（14年度）	田所　賢治（14・15年度）

2　調査の経過

(1)　調査の経過

今回の調査は、徳島県立城東高等学校校舎改築工事関連に伴う埋蔵文化財調査で、建物が建つ部分に限って調査区を設定し、平成13年４月１日～平成14年８月31日に調査を実施した。総面積は4,422㎡である。（第１図）調査区は、100年余り高等学校として利用されてきた敷地で、グラウンドとして長年使用されていた場所である。

(2)　調査区割

調査区グリッドの説定に際しては、第Ⅳ系国土座標を基準とした。５ｍ間隔のメッシュを１グリッドとして調査対象地区を包み込む形で設定した。

南西隅を基準として、全調査区をＸ軸・Ｙ軸線上に北にＡ Ｂ Ｃ・・・、東に１２３・・・の順に記号を振り、それらの組み合わせによって南西方向からＡ－１，Ａ－２，Ａ－３・・・Ｏ－20のようにグリッド名を表すこととした。（第１図）

調査区は４区に分割して平成13年度に１区～２区、及び４区南の一部、14年度に３区～４区（うち４区南部の一部を除く）の調査を実施した。

遺構面は４面確認され、調査区全体の土層は第４遺構面（自然堆積層）から現地表面（グラウンド）までは近世以降の約２ｍの盛土整地層である。第１遺構面は標高１ｍ前後であり、第２遺構面の標高は約0.80m前後と近接しており、遺物は18世紀後半～19世紀（幕末）のものが多く出土した。

第２遺構面では18世紀前半のものを中心に出土した。

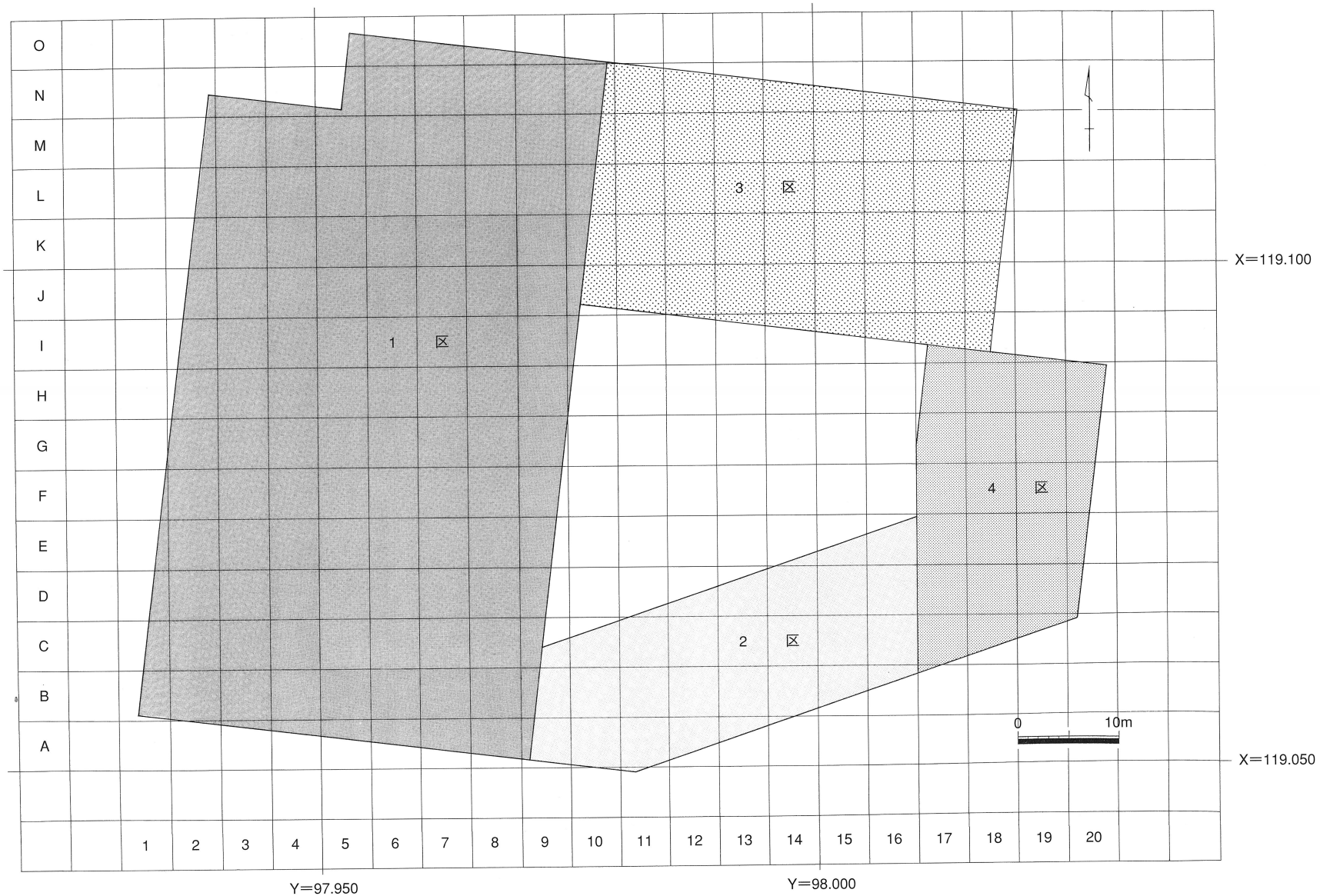
第３遺構面は第２遺構面より10～30cm程度下がった標高0.5m前後のレベルを基準としている。17世紀後半のものを中心に出土した。

第４遺構面は、標高で0.2m前後を測り、最終遺構面として検出した。第４遺構面の遺物は、16世紀末～17世紀初頭頃のものが中心に出土している。

第４遺構面以下の堆積では、土質は砂質が強い灰・青灰色シルト層あるいは砂層の堆積が確認され、遺物の包含は認められなかった。

試掘調査の結果をもとに全面発掘を実施し、４時期の遺構面（中世末期～幕末）を確認した。調査区内は旧校舎（徳島女学校）など旧構造物解体に際して部分的に攪乱を受けており、最終面まで達するものも少なくない。

この周辺は、江戸時代以前は吉野川河口域の低湿地で、水はけの悪い軟弱な基盤であったため、盛り土などにより土地を改良してきたことがわかる。人為的に土砂を入れている様子が断面で観察できるが、面の整合性を調査区全体に確定することは困難な状況である。特に調査区南側（現校舎側）は土層の堆積および全面的な土の色調も異なる。


O
N
M
L
K
J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15 16 17 18 19 20
1 区
2 区
3 区
4 区
X=119.100
X=119.050
Y=97.950
Y=98.000
0
10m

第１図　グリッド配置図

(3) 調査日誌抄

2001年度

4月2日　調査準備開始
4月24日　1区東側機械掘削開始
5月11日　2区機械掘削開始
5月16日　1区東側第一包含層人力掘削開始
5月28日　1区東側第一遺構面遺構検出
5月29日　2区第一包含層人力掘削開始並びに1区東側第一遺構面（半面）遺構内掘削開始
6月1日　2区第一遺構面遺構検出
6月7日　2区第一遺構面（半面）遺構内掘削開始
7月12日　1区東側、2区第一遺構面写真撮影
7月13日　1区東側第二包含層人力掘削開始並びに2区第一遺構面遺構内（残り）及び石列掘削開始
7月25日　1区東側第二遺構面（半面）遺構検出並びに1区北、西側機械掘削開始
7月30日　1区東側第2遺構面遺構内掘削開始
8月7日　1区東側第2遺構面（残り）遺構検出
8月9日　1区東側第二遺構面・2区第一遺構面空撮
8月16日　1区北、西側第一包含層人力掘削開始並びに1区東側第2遺構面遺構内掘削開始
8月24日　1区北、西側第一遺構面遺構検出
8月27日　1区北、西側第1遺構面遺構内掘削開始並びに2区第2包含層人力掘削及び遺構検出
9月4日　2区第2遺構面（半面）遺構内掘削開始
9月18日　1区東側第3包含層人力掘削開始
9月19日　2区第2遺構面空撮
9月21日　1区東側第3遺構面遺構検出開始
9月27日　1区東側第3遺構面遺構内掘削開始
10月5日　1区西側第2遺構面遺構検出
10月9日　1区西側第2遺構面遺構内掘削開始
10月27日　1区東側第3遺構面・1区北、西側第2遺構面空撮並びに2区第3包含層機械掘削開始
10月28日　2区第3包含層人力掘削開始
11月2日　2区第3遺構面遺構検出
11月4日　2区第3遺構面遺構内掘削開始
11月6日　1区西側第3包含層機械掘削開始
11月8日　2区南側第3遺構面空撮並びに1区西側第3遺構面遺構検出
11月13日　1区西側第3遺構面遺構内掘削開始
11月18日　1区西側第3遺構面空撮
12月1日　現地説明会並びに1区東側第4包含層人力掘削開始
12月8日　1区東側第4遺構面遺構検出
12月9日　1区東側第4遺構面遺構内掘削開始並びに2区第4包含層人力掘削開始
12月14日　2区第4遺構面遺構検出
12月15日　2区第4遺構面遺構内掘削開始（半面）
12月22日　1区東側、2区第4遺構面空撮
12月24日　2区第4遺構面遺構内掘削開始（残り）
12月27日　1区西側第4遺構面遺構検出
1月7日　1区西側第4遺構面遺構内掘削並びに1区北側第2包含層人力掘削開始
1月8日　1区北側第2遺構面遺構検出
1月9日　1区北側第2遺構面遺構内掘削開始
1月17日　1区北側第2遺構面空撮
1月22日　1区北側第3包含層機械掘削開始
1月23日　1区北側第3遺構面遺構検出
1月24日　1区北側第3遺構面遺構内掘削開始
2月11日　1区北側第3遺構面空撮
2月14日　1区北側第4包含層人力掘削開始
2月15日　1区西側第4遺構面空撮
2月19日　1区北側第4遺構面遺構検出
2月20日　1区北側第4遺構面遺構内掘削開始
3月4日　1区北側第4遺構面空撮並びに1・2区壁面調査開始
3月5日　3・4区機械掘削開始
3月11日　1・2区全調査終了
3月12日　遺物・図画面等整理作業開始
3月26日　遺物収納コンテナ搬出作業

2002年度

4月3日　整理作業並びに3・4区機械掘削開始
4月9日　4区第1遺構面遺構検出

4月10日　3区第1包含層人力掘削開始
4月19日　3区第1遺構面遺構内掘削開始
5月20日　3区第1遺構面空撮
5月21日　4区第2包含層人力掘削
5月22日　4区第2包含層遺構検出
5月23日　3区第2包含層人力掘削開始
6月3日　3区第2包含層遺構面遺構検出
6月4日　4区第2遺構面遺構内掘削並びに3区第2遺構面遺構内掘削開始
6月10日　4区第2遺構面空撮
6月15日　3区第3包含層人力掘削開始
6月17日　4区第3遺構面遺構検出
6月18日　3区第3遺構面遺構検出
6月21日　3区第3遺構面遺構内掘削開始
7月17日　3区第3遺構面空撮
7月18日　3区第4包含層人力掘削開始
7月23日　3区第4遺構面遺構検出
7月24日　3区第4遺構面遺構内掘削開始
8月6日　3区第4遺構面空撮
8月7日　3・4区壁面調査開始
8月12日　3・4区全調査終了
8月19日　遺物・図面等整理作業開始
8月30日　作業終了

整理作業

2003年
4月2日　整理作業開始
2005年
3月31日　整理作業終了

Ⅱ　遺跡の立地と環境

1　地理的環境

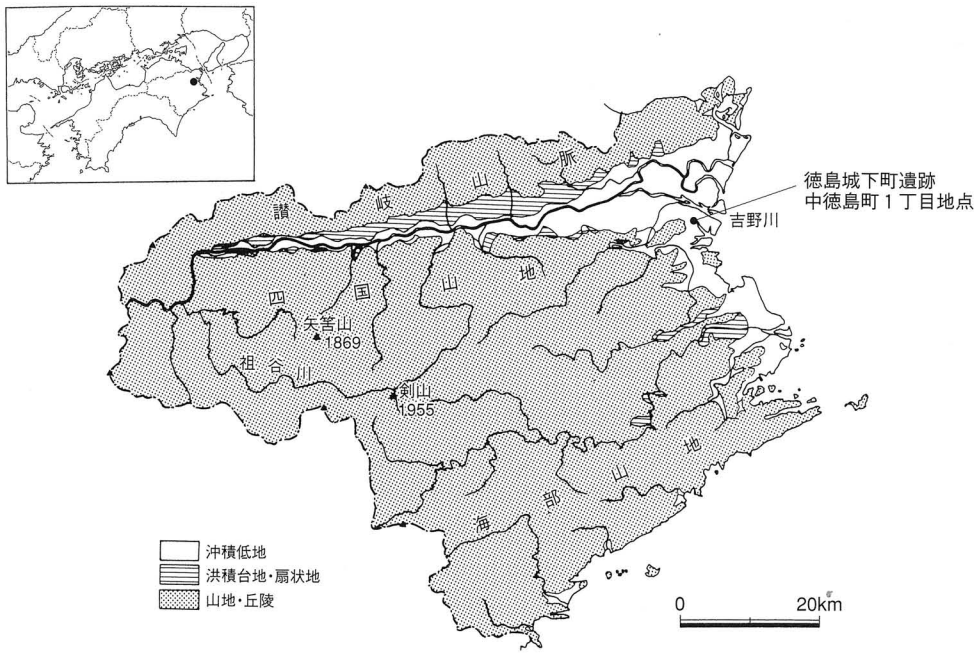
本遺跡は、徳島県の最東部、徳島市中徳島町１丁目に所在する。（第２図参照）
当地は四国最大の河川、別名「四国三郎」と称される吉野川によって形成された沖積平野である、徳島平野上に位置する。

吉野川は水源を高知県瓶ヶ森山南方に発し、四国山地から中央構造線に沿って東流し、紀伊水道に注いでおり、総延長は194km，流域面積は3,750㎢に及ぶ。その吉野川下流域に楔形に細長く広がる沖積平野が徳島平野であり、河口付近は網目状に発達した三角州と自然堤防からなる。徳島市は、この吉野川河口付近の右岸に市街地を形成してきた。

吉野川河口部の汀線は、海面変動により歴史的に大きく変動してきた。ヴュルム氷河期最末期にあたる約28,000～18,000年前には、海面の高さは現在よりも100m前後低かったと想定され、当時四国は本州と陸続きであったばかりでなく、日本列島自体が大陸と陸続きであったと考えられる。その後の温暖化により海面が次第に上昇し、縄文海進のピークにあたる約6,000年前には、吉野川河口部の汀線は現地標高５m付近の内陸部まで進入していたと推定されている。

その後、弥生時代以降の寒冷化により、海面の低下と吉野川により運ばれる土砂の堆積によって、デルタが発達した。吉野川河口部には近世初頭までラグーン状の入り江がみられたが、以後の新田開発によって次第に陸地化され、今日の徳島平野が形成された。

吉野川の流路の安定は、元禄期以降における新川掘抜による直流化と、明治になってオランダ人技師ヨハネス・デ・レーケらによる近代技術の導入によって、ようやく達成されるのである。吉野川中流から下流域にかけて、島・洲・須・須賀・塚などのつく地名が数多く残るが、こうした場所に旧来は集落が形成されてきた。これは自然堤防が発達隆起したもので、集落は自然堤防の形にそって東西方向のものが多い。

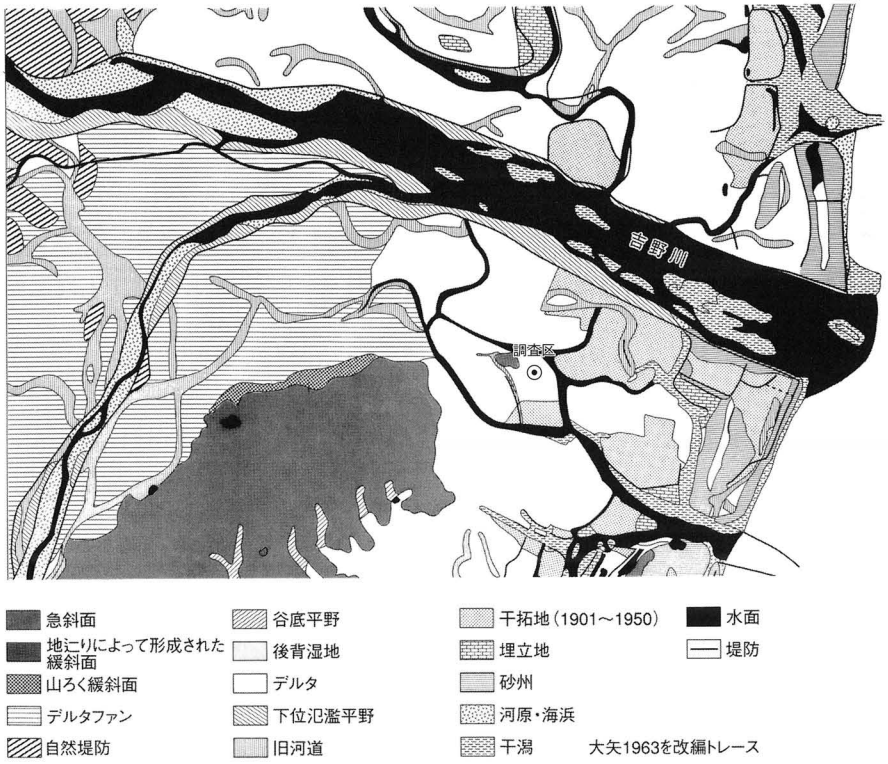


第２図　徳島県の地形図

徳島は面積の約80％が山地であり、北から讃岐山脈，四国山地，海部山地等が東西方向に連なっている。吉野川北岸に沿って東西に延びる中央構造線により、北側の西南日本内帯と南側の西南日本外帯とに分けられる。北側（内帯）は中生代の和泉層群を主体とする讃岐山脈が、南側（外帯）は北から順に三波川変成帯，御荷鉾変成帯，古生代の砂岩泥岩互層の秩父帯，中生代から古第三紀にかけて堆積した砂岩泥岩互層の四万十帯が配列し、四国山地，海部山地を形成している。このうち、三波川帯は緑色片岩（慣用名「青石」），黒色片岩等の結晶片岩で占められている。

本遺跡は、江戸時代には徳島城がおかれた城山の東側に位置する徳島地区にある。この地区は吉野川河口南岸のデルタのひとつに位置し、地質学上は北側を助任川，南側を新町川と寺島川（現在 JR 線路），東は福島川に囲まれた三角州状に立地する地域にあたる徳島（渭津）は、渭山（城山）を中心に出来島，福島，寺島，常三島，住吉島の各島や新町，富田，助任・前川，佐古の各地区とともに御山下と呼ばれた。当該地は「物構」と呼ばれる徳島城の外郭に位置している。

調査区の現状は、城東高校グラウンドであった。周辺はすぐ西に徳島城がおかれた城山を望み、徳島駅に近い官公庁の点在する中心地になっている。調査区内の標高は約２ｍを測る。江戸時代には、徳島城下町の中でこの地区には上級武士層の侍屋敷が並んでいたことが、江戸時代の絵図等から窺える。



第３図　周辺の地形分類図

（参考文献）

福井好行「吉野川下流域に於ける流路の変遷」『阿波の歴史地理　第一』 1964
寺戸恒夫「徳島県の地形」『阿波の絵図』　徳島建設文化研究会　1994
平井正午「城下町起源の都市徳島」　寺戸恒夫著『徳島の地理』　徳島地理学会　1995
古田　昇「徳島県吉野川・鮎喰川下流域平野の沖積層の形成過程」『立命館地理学』８号　1996

2　歴史的環境

ここでは、本遺跡が所在する吉野川とその支流鮎喰川、さらに剣山系の雲早山と高丸山を水源とし、徳島市南東部で紀伊水道に注ぐ勝浦川が形成する沖積平野と、その周辺部に立地する遺跡を取り上げ、歴史的環境を概観する。

縄文時代

縄文時代の遺跡として知られるものに、城山貝塚，三谷遺跡，庄遺跡，名東遺跡などがある。城山貝塚は、城ノ内の城山のふもとの洞窟や岩陰に残る貝塚であり、縄文時代後期の土器の他、３体の屈葬人骨も出土している[1)]。また、眉山北麓の旧河道の後背湿地上にあたる佐古六番町の三谷遺跡からは、貝塚より出土した７体の犬の埋葬遺体が注目されるほか、晩期の突帯文土器が出土している。さらに北陸系の注口土器に類似する形態文様をもつ鉢や三叉文をもつ椀形土器，舟形土器など広範囲にわたる交流を示す遺物が出土している[2)]。ほかに、鮎喰川右岸の微高地に位置する庄遺跡（日赤血液センター）からは晩期前半の貝殻条痕文をもつ深鉢が、同じく庄遺跡（蔵本団地）の自然流路からは晩期の浅鉢や石鏃が[3)]、鮎喰右岸の名東遺跡（天理教会地点）からは晩期の浅鉢・深鉢，石器類がそれぞれ出土している[4)]。

一方、鮎喰川左岸の矢野遺跡からは、縄文時代後期から晩期にかけての土器・石器が多量に出土している。ことに赤彩土器や土製仮面は祭祀の様相をうかがわせ、水銀朱の精製に使用された石杵・石臼の出土とともに注目される[5)]。

弥生時代

弥生時代には鮎喰川が形成する沖積地、すなわち東は庄町から西は国府町にかけての広い範囲内で遺跡が確認される。右岸の眉山北西麓に展開する庄遺跡・南庄遺跡・鮎喰遺跡・名東遺跡、左岸の矢野遺跡がそれである。庄遺跡・南庄遺跡は眉山裾に展開した県内最大級の弥生時代の集落遺跡であるが、地形的には小規模の自然流路が錯綜しており、微高地上を中心に大規模な集落が営まれた。まず、南庄遺跡では中期後半から後期前半にかけての竪穴住居跡群が検出されたほか、微高地縁辺部では環濠も確認されている[6)]。

遺物として注目されるものに、弥生時代後半の土器を含む流路内より出土した鉄剣がある。切先から茎までほぼ完全に遺存しており、長さ28cm を測る。また、庄遺跡（徳島大学医学部構内）からは、総数20基以上の土壙墓をはじめ箱式石棺・配石墓・甕棺墓が検出されているのをはじめ[7)]、朱塗りのミニチュア砧・平鍬・臼・梯子・人物像を刻んだ板状木製品などの、祭祀具から農耕具にわたる木製品が出土している[8)]。隣接する庄遺跡（兵営西内線地区）からも平鍬・二又鍬・横槌・匙・装飾付把手状木製品・長柄鋤・田舟などの木製品が出土している[9)]。また、近年の医学部構内の調査では弥生段階の大規模な本格的潅漑用水路が発見されている[10)]。また、鮎喰遺跡からは弥生後期から古墳前期にかけての住居跡[11)]が、名東遺跡からも住居跡や方形周溝墓などが検出されている[12)]。

鮎喰川左岸の矢野遺跡は、丁寧に埋納された銅鐸が集落内から出土したことで注目される、大規模な弥生時代の集落遺跡である[13)]。銅鐸のほか、朱の付着した土器や石杵，蛇紋岩製勾玉の工房の発見でも重要である[14)]。この庄遺跡や矢野遺跡が所在する鮎喰川沿岸は、多くの銅鐸が出土していることでも注目される。前述の矢野銅鐸や、同じく発掘調査によって出土した名東銅鐸[15)]のほか、安都真銅鐸[16)]や源田銅鐸[17)]が知られる。なお、源田遺跡からは銅鐸とならんで銅剣も伴出している。

1　徳島城下町遺跡
　中徳島町１丁目地点（本調査区）
2　新蔵町１丁目遺跡
3　新蔵町３丁目遺跡
4　中徳島町２丁目遺跡
5　徳島城下町遺跡
　（中前川町２丁目地点）
6　南前川１丁目遺跡
7　徳島城下町遺跡
　（出来島本町１丁目地点）
8　城ノ内遺跡徳島城跡
9　寺島本町東３丁目遺跡
10　寺島本町西２丁目遺跡
11　常三島遺跡
12　北常三島町１丁目遺跡
13　福島２丁目遺跡
14　弓町１丁目遺跡
15　富田橋遺跡
16　勢見山古墳群
17　恵解山古墳群
18　天神山古墳
19　向寺山古墳
20　向寺山遺跡・延生軒跡
21　巽山古墳
22　星河内美田銅鐸出土地
23　樋口古墳
24　樋口遺跡
25　八人塚古墳
26　穴不動古墳
27　節句山古墳群
28　名東遺跡
29　鮎喰遺跡
30　南庄遺跡
31　庄遺跡
32　三谷遺跡
33　中島田遺跡
34　南島田遺跡
35　田宮遺跡
36　城山貝塚

第４図　周辺の遺跡分布図

古墳時代

古墳時代になると、国府町を取り囲む山塊に古墳が数多く築かれる。南東部にあたる眉山山塊の北西麓には、県内最大級の巨石を用いた横穴式石室をもつ穴不動古墳，節句山古墳群，積石による前方後円墳の八人塚古墳などがある。一方、西の気延山山塊には県内最大の古墳群が形成されている。奥谷古墳群[18]・宮谷古墳[19]・矢野古墳・尼寺古墳群[20]・ひびき岩古墳群[21]・利包古墳・山ノ神古墳群・高良古墳・清成古墳[22]・曽我氏神社古墳群[23]・長谷古墳など、約100基の古墳が確認されている。ことに、ひびき岩古墳群は17基の古墳から構成されるが、そのうちの16号墳が平安時代末期から鎌倉時代にかけて火葬墓として再利用されていたことがわかる。

矢野古墳は結晶片岩の巨石を用いた両袖式の横穴式石室をもつ長方形の玄室平面プランを示しており、吉野川中流域の横穴式石室とは異なった畿内的な様相が想定されている。宮谷古墳は、県内で初めて三角縁神獣鏡が出土している。また、奥谷古墳群１号墳は、県内で唯一の盛土による前方後円墳である。

また、眉山山塊の東南麓や園瀬川南岸地域にも古墳群が広がる。眉山東南麓には勢見山古墳・恵解山古墳群、園瀬川南岸の丘陵部にも天神山古墳・向寺山古墳・樋口古墳群・巽山古墳・鶴島山古墳群[24]などが知られている。なお、この時期の集落跡が徳島大学蔵本キャンパス内の庄・蔵本遺跡で発見されている[25]。

古　　代

律令制時代に推移すると、矢野遺跡の所在する現国府町域に国府が営まれる。政庁跡の確認は現段階では明確でないものの、徳島市教育委員会の数次にわたる調査によって、観音寺付近が有力となってきている[26]。そのほか、この時期に該当する遺跡として阿波国分寺跡[27]・阿波国分尼寺跡[28]・石井廃寺[29]・高畑遺跡や、国分寺等に瓦を供給していたと考えられる内ノ御田瓦窯跡[31]、さらには名東郡衙跡に関わると考えられる大規模な掘立柱建物跡や墨書土器，斉串・刀形・鳥形・舟形などの木製祭祀具が認められた庄遺跡（徳島大学蔵本団地）[32]などが知られる。また、庄遺跡（加茂名中学校体育館）においても奈良時代の赤色顔料塗彩土器が出土している[33]。なお、鮎喰川が眉山山塊西側を通り抜け、沖積平野に流れ出ようとする名東町３丁目の眉山西麓に位置する大浦遺跡から、平安時代末期の密教法具・僧具・梵音具の梵鐘等の仏具の土製鋳型や鞴羽口・坩堝などが出土していることも注目してよい[34]。

文献史料からは、律令時代には東大寺の初期荘園である新島荘が名方郡内に成立している。東大寺に伝えられた絵図類を通してその所在地が検討されるとともに、吉野川河口付近での低湿地の開発のあり様をうかがわせる、総面積80余町の荘園である[35]。

中　　世

中世になると、安楽寿院領名東荘・春日神社領富田荘・石清水八幡宮領萱島荘などの所領が文献史料より確認できる[36]。遺構・遺物で注目されるのが、中島田町２丁目に所在する中島田遺跡の成果である。中島田遺跡は、旧河川の「中州」に立地した都市的様相をもった鎌倉時代後期の遺跡で、青磁・白磁や東播系須恵質土器・備前焼・吉備系土師質椀などの国内外からの搬入土器が多量に出土し、広範な海上交易を具体的に示している[37]。

また、中島田遺跡の西に位置する南島田遺跡では14～15世紀の遺構・遺物が発見されている[38]。しかしながら、中島田遺跡も中世後期にかけては存続せず、近世にかけては水田として土地利用された模様である。ほかに、名東遺跡（天神地区）でも中世段階の溝などが検出されている[39]。

最近の中徳島町２丁目旧徳島動物園跡の調査では、蜂須賀氏の城下町建設以前と想定できる大溝等の遺構が検出された。これまでの常三島，新蔵町１丁目，同３丁目，福島２丁目，南前川１丁目，出来島本町１丁目地点各遺跡等城下町の調査からは、近世以前の遺構面が確認されていなかった。このことから、中徳島町２丁目遺跡が城山東麓に位置し吉野川支流の沖積低地に位置しながらも、局部的に安定した土砂の堆積が進行していた例外的な地域であったと考えられる。

近　　世

1585年、豊臣秀吉は四国討伐に従い功績のあった蜂須賀氏に、阿波国17万５千石を与えた。父正勝に変わり蜂須賀家政が領有することになり、当初は長宗我部氏の旧城である一宮城を居城に据えていたが、すぐに徳島城に移転した。徳島城は現在の城山付近に位置し、その前身である猪山城の起源及び蜂須賀氏入城の正確な時期は不明であるが、蜂須賀氏阿波入部の数年前には徳島城に移転していたと考えられる。

蜂須賀氏の徳島入部に伴い、城下町の建設も平行して進められた。城下町は吉野川分流の新町川，寺島川，助任川，福島川，沖洲川等の網状河川を利用した「島普請」により建設され、これらの河川により形成された三角州上に、城郭の置かれた徳島をはじめ、出来島，寺島，福島，常三島，住吉島の６つの島と、それらの島を取り囲むように配置された新町地区，富田地区，佐古地区，前川・助任地区が建設された。中心部の徳島，寺島地区には上級藩士屋敷、城下の入口にあたる周辺の富田，佐古，助任地区には、町屋を並存した下級武士屋敷が配置されて、城下町の防御線とされた。その中で徳島に位置する新蔵町は、藩の新御蔵（米倉）があったので、御新蔵丁と呼ばれた。1640年代にはおおむね城下建設が完成し、急速に人口も増加した。急速な城下町建設を促進させた背景には、蜂須賀氏による大規模な土木建設資本注入のほかに、近世初頭の海退も多分に影響したものと考えられる。その後、徳島藩は国替えもなく幕末まで蜂須賀氏25万石による支配が連綿と続いた。

徳島城内及び城下町の調査は、徳島県，徳島市，徳島大学埋蔵文化財調査室，徳島県埋蔵文化財センターによって行われており、近年は特に活発化している。しかし、現在までの調査は城内のほか、徳島地区を中心とした高級武家屋敷，あるいは常三島の中下級武家屋敷地区に集中しており、富田，新町，佐古等の町屋，寺社地区の調査はほとんど行われていないことから、城下町全体の景観を捉えるには至っていない。しかも個々の調査は小規模なものがほとんどであり、遺跡，特に屋敷地内の全容を掴みきれないことが多いという問題点がある。

（注）

1）鳥居龍蔵「徳島城山の岩窟」『考古学雑誌』12巻９号　1922，同「徳島城山の岩窟と貝塚」『教育画報』16巻５号　1923

2）森敬介「徳島市水道三谷濾過池に於ける原始独木舟発見の顛末（上）（下）」『歴史と地理』18巻１号・18巻５号　1926，勝浦康守「徳島市三谷遺跡－徳島の縄文晩期突帯文土器の終焉」『文化財学論集』　文化財学論集刊行会　1994，『第15回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』　徳島市教育委員会　1995，勝浦康守『三谷遺跡－徳島市佐古配水場施設増設工事に伴う発掘調査－』　徳島市埋蔵文化財発掘調査委員会　1997

3）『埋蔵文化財速報展　縄文の彩り』　徳島県埋蔵文化財センター　1996

4）『第９回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』　徳島市教育委員会　1988，『名東遺跡発掘調査概要－名東町２丁目・天理教国名大教会神殿建設工事に伴う発掘調査－』　名東遺跡発掘調査委員会　1990

5）前掲注３）
6）滝山雄一「徳島県庄遺跡」『日本考古学年報37（1984年度版）』　日本考古学協会　1985，『第７回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』　徳島市教育委員会　1986
7）岡内三真・河野雄次「徳島県庄遺跡－徳島大学医学部同窓会館建設に伴う調査－」『日本考古学年報39（1986年度版）』　日本考古学協会　1988
8）菅原康夫『日本の古代遺跡37　徳島』　保育社　1988
9）『第６回埋蔵文化財資料展　庄遺跡の人々のくらしと文化』　徳島市教育委員会　1985，一山典・滝山雄一「徳島庄遺跡出土の弥生時代木製品」『考古学ジャーナル』252号　1985，滝山雄一「徳島県庄遺跡」『日本考古学年報37(1984年度版)』　日本考古学協会　1986
10）北條芳隆「吉野川下流域における初期潅漑施設と条里地割」『デルタにおける古代の開発に関する地図的情報の収集と解析』　科研費報告書（代表　丸山幸彦）　1998
11）『庄・鮎喰遺跡－一般国道192号拡幅工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』　徳島市教育委員会　1985
12）前掲注４）『名東遺跡発掘調査概要』，『名東遺跡（天神地区）－県営名東町団地建て替え工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』　徳島市教育委員会　1990，藤川智之・氏家敏之他『名東遺跡』　徳島市教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター他　1995
13）藤川智之他「矢野遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』４号　1993，『矢野銅鐸』　徳島県埋蔵文化財センター　1993
14）栗林誠治「矢野遺跡」『徳島県埋蔵文化財センター年報』５号　1994，北條芳隆「徳島県における弥生の朱」『考古学ジャーナル』394号　1995
15）前掲注４）『名東遺跡発掘調査概要』
16）三木文雄「阿波国安都真出土の銅鐸とその遺跡」『考古学雑誌』50巻４号　1965，魚島純一「銅鐸の自然科学的調査　－徳島市出土安都真銅鐸に見られる鋳掛けについて－」『文化財学論集』　奈良大学文化財学論集刊行会　1994
17）三木文雄「阿波国源田出土の銅剣銅鐸とその遺蹟」『考古学雑誌』36巻２号　1950
18）『埋蔵文化財資料展　古墳時代の徳島市』　徳島市教育委員会　1981
19）『徳島市文化財だより』No.23・24　徳島市教育委員会　1990，『第12回埋蔵文化財資料展　阿波を掘る』徳島市教育委員会　1991，一山典・三宅良明「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報（1989年度版）』日本考古学協会　1991，同「徳島県徳島市宮谷古墳」『日本考古学年報（1990年度版）』　日本考古学協会　1992
20）『清成・尼寺古墳発掘調査概報』　石井町教育委員会　1969
21）結城孝典『ひびき岩16号墳発掘調査報告書』　石井町教育委員会　1986
22）天羽利夫「石井町清成一号墳の調査」『徳島県博物館報』８号　1968，前掲注20）『清成・尼寺古墳発掘調査概報』
23）徳島県博物館「曽我氏神社古墳群発掘調査報告」『徳島県博物館紀要』13集　1982，岡山真知子「曽我氏神社古墳群」『考古学ジャーナル』225号　1983
24）『徳島市鶴島山古墳群の調査－発掘調査報告書』　元興寺文化財研究所　1979
25）徳島大学埋蔵文化財調査室編『庄・蔵本遺蹟１－徳島大学蔵本キャンパスにおける発掘調査－』　徳島大学　1998
26）『阿波国府跡第１次調査概報』～『同　第10次調査概報』　徳島市教育委員会　1983～1992，『第16回埋蔵文化財資料展「阿波を掘る」　企画展示「阿波国府とその周辺」と最近の発掘調査』　徳島市教育委員会　1996
27）『阿波国分寺跡第１次調査概報』～『同　第３次調査概報』　徳島市教育委員会　1979～1981
28）『阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報』・『同　第２次緊急発掘調査概報』　徳島県教育委員会・石井町教育委員会　1971・1972

29) 斎藤忠・三木文雄『石井廃寺址第一次調査概報－徳島県文化財報告書二』 徳島県　1958，斎藤忠他『石井廃寺址第二次調査概報－徳島県文化財報告書三』 徳島県　1959

30)『高畑遺跡－県立国府養護学校プール建設工事に伴う発掘調査概要報告書－』 徳島県教育委員会　1990

31) 立花博・天羽利夫『徳島市入田町内ノ御田瓦窯跡調査概報・徳島県那賀郡古屋岩陰遺跡調査概報』 徳島県博物館建設記念学術奨励基金運用委員会　1970，『内ノ御田須恵窯跡発掘調査中間報告』 徳島市教育委員会　1981

32) 福家清司「庄遺跡出土の墨書土器銘『賀専当』について」『高校地歴』20号　徳島県高校地理学会　1984，福家清司・久保脇美朗「徳島県庄遺跡－徳島大学蔵本団地地区体育館地点の調査－」『日本考古学年報36（1983年度版）』 日本考古学協会　1986，なお、庄遺跡（兵営西内線）からも斉串・人形等の木製祭祀具が出土している。（前掲注６）

33) 勝浦康守「庄遺跡(学校施設建設工事)」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要６』 徳島市教育委員会　1996

34) 一山典・滝山雄一「徳島県大浦遺跡」『日本考古学年報38（1985年度版）』 日本考古学協会　1987

35) 丸山幸彦「古代の大河川下流域における開発と交易の進展－阿波国新島庄をめぐって－」『徳島大学総合科学部紀要（人文・芸術研究篇）』２巻　1989，同「瀬戸内型の庄園」『新版古代の日本４　中国・四国』 角川書店　1992，同「低湿地開発の進展と庄園返還運動－九世紀の阿波国新島庄－」『徳島大学総合科学部　人間社会文化研究』２巻　1995，同「南海道支道と庄園－新島庄勝浦地の位置づけをめぐって－」『徳島大学総合科学部　人間社会文化研究』３巻　1996，福家清司「阿波国新島荘の所在地と条里の復原」『新版古代の日本10　古代資料研究の方法』 角川書店　1993，同「阿波国名方郡新島荘図・大豆処図」金田章裕他編『日本古代荘園図』 東京大学出版会　1996，金田章裕「阿波国東大寺領荘園図の成立とその機能」虎尾俊哉編『律令国家の地方支配』 吉川弘文館　1995。特に、丸山氏は東大寺による低湿地の開発には、摂津国（難波）で低湿地の開発に関わっていた日下部忌寸氏を中心に視点を据え、金田氏は絵図に描かれた堤が海水の進入による塩害を防ぐためのものであったと指摘されており、注目される。

36) 福家清司「阿波国中世所領研究ノート」『四国中世史研究』１号　1990　また、富田荘については福家清司「阿波国富田荘の成立と開発」『徳島地方史研究会創立10周年記念論集　阿波・歴史と民衆』 南海ブックス　1981，同「阿波富田荘の成立と変遷」『史窓』21号　徳島地方史研究会　1990，阿部猛「悪党大江泰兼－阿波国富田荘史断片－」『日本社会史研究』35号　1994　などがある。萱島荘については、福家清司「吉野川水運と荘園の成立」『学会誌吉野川』創刊号　1997　がある。

37) 福家清司編『中島田遺跡・南島田遺跡－県道徳島鴨島線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 徳島県教育委員会　1989，山下知之・小林一枝・石尾和仁『中島田遺跡Ⅱ－都市計画道路常三島中島田線改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－』 徳島県教育委員会・徳島県埋蔵文化財センター　1996，福家清司「中世土器の流通をめぐって－徳島市中島田遺跡出土遺物を通して－」『中世土器の基礎研究』Ⅸ　1993，同「阿波中世水運史小考」『三好昭一郎先生還暦記念論集　歴史と文化・阿波からの視点』 同論集刊行会　1989，同「遺跡が語る阿波中世の流通」『鳴門史学』７集　1993，同「徳島市中島田遺跡の歴史的位置－特に『名東庄倉本下市』との関係をめぐって－」『社会と信仰・阿波からの視点』 三好昭一郎先生古希記念論集刊行会　1999

38) 前掲注37)『中島田遺跡・南島田遺跡』

39) 前掲注11)『名東遺跡（天神地区）』，勝浦康守「名東遺跡発掘調査概要－老保健施設建設工事に伴う発掘調査－」『徳島市埋蔵文化財発掘調査概要２』　徳島市教育委員会　1992

（参考文献）
『角川日本地名大辞典36　徳島県』　角川書店　1986
菅原康夫『日本の古代遺跡37　徳島』　保育社　1988
「徳島城」編集委員会編『徳島城』　徳島市立図書館　1994
『日本歴史地名大系37　徳島県の地名』　平凡社　2000

3　徳島城下町と調査区について

城下町の建設と家臣団の屋敷地

天正13年（1585）豊臣秀吉により蜂須賀家政が阿波国17万国を与えられた。いったん一宮城に入城するものの、同年、当時渭津と呼ばれた地に徳島城の建設が着手される。同時に城下町建設を急いだ蜂須賀氏は町屋については、「御城下市中の町割りにつき屋敷望ものこれあれば申し出に任せ相応の地面を下さるべし」との御触書を出し、町人を優遇するとともに、蜂須賀氏の旧領であった尾張や龍野からも町人を誘致し町割りが進められる。

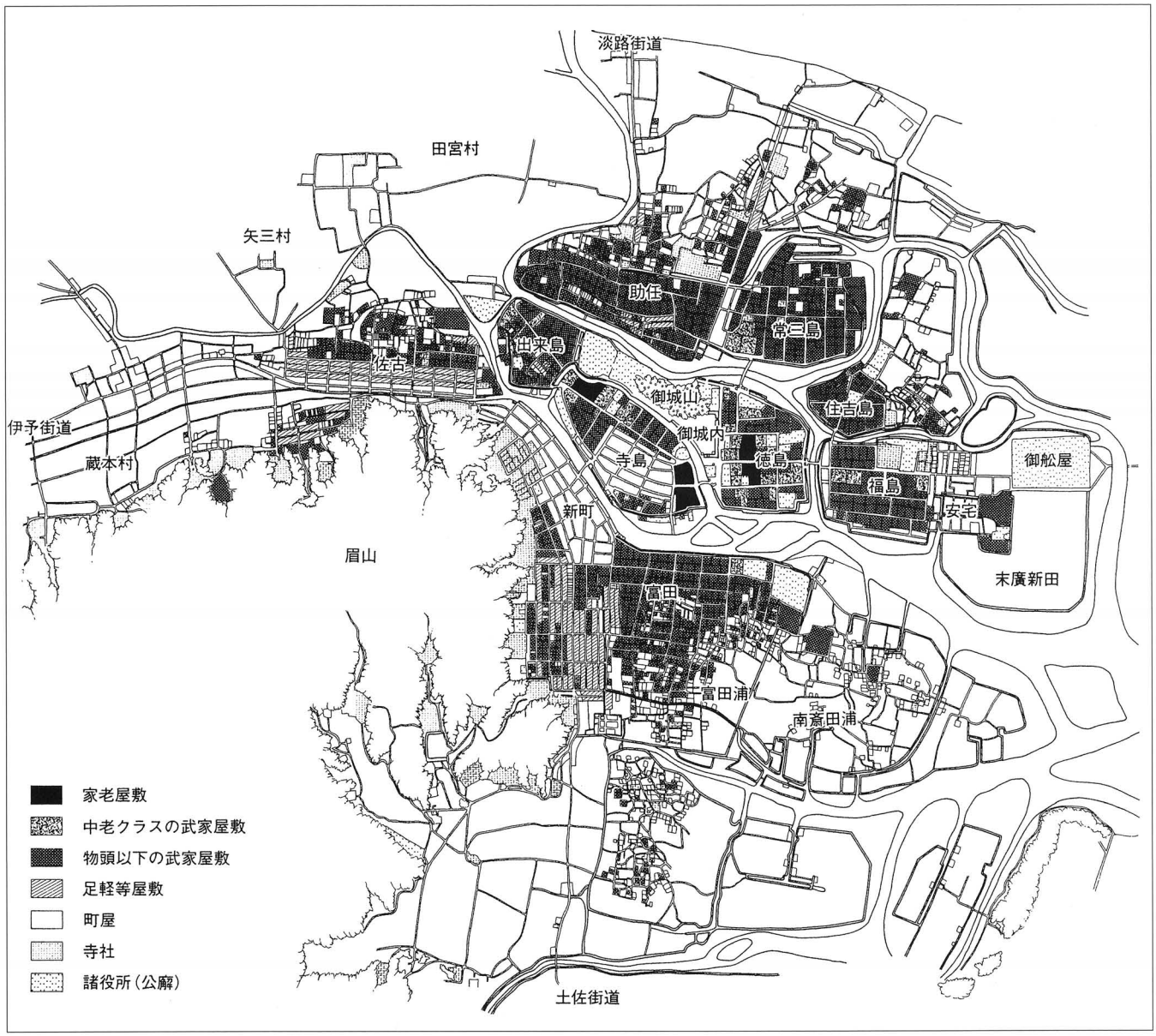
蜂須賀氏が徳島に居城を構えた理由として、次のことが挙げられる。第一に、徳島は吉野川流域の「北方」と、勝浦，那賀，海部郡を中心とした「南方」の交会点にあたる交通の要衝であり、領国支配の中心として最適の地理的条件を備えていた。山地が多い阿波の中で、平地は吉野川下流域の徳島平野と、鳴門海峡から那賀川流域まで南北海岸線に沿って延びる地域に限られる。当然、陸上交通路もこれら平地部を中心として発達した。

すなわち、吉野川両岸の県北部を東西方向に走る伊予街道，川北街道，海岸線に沿って県東部を南北方向に延びる土佐街道，淡路街道，讃岐街道の５街道であり、川北街道を除く４街道の起点が徳島で、その中でも徳島地区であった。

第二に、眉山から紀伊水道を見渡せる徳島は、海上防備に好都合であっただけでなく、島国阿波に不可欠な海上交通の便に恵まれた土地であった。徳島城下町に網目のように広がる吉野川の支流がそのまま紀伊水道に流れ込み、もちろん県西部にも吉野川を通じての水運が開けるわけである。

第三に、徳島は吉野川の分流に囲まれた要塞の地であった。しかし洪水のたびに「河成地」となるような低湿地に城下町を建設できた理由のひとつとして、近世初頭の小氷期に海退現象により吉野川河口付近の三角州が発達したことも有力である。

徳島城築城（改築）と同時に城下町の建設も平行して始められた。蜂須賀家政は、旧領である播磨国龍野や尾張から豪商を誘致して城下町の建設を進めた。当初、太閤検地の実施の妨げとなった山間部の土豪勢力に対処するため、阿波国内の９ヶ城に重臣と兵士300人を駐屯させた領国支配体制（阿波九城制）がとられていた。この支城駐屯制は土豪一揆への備えの他に、周辺地域の郡代的役割も担っていた。また、主要街道に位置した真言宗８ヶ寺を駅路寺に指定し、旅行者用宿泊施設としての性格の他に、周辺農民に対する警備も義務付けた。



第５図　徳島城下町の町割　徳島御城下絵図（明治２，３年）を元に作成（徳島城博物館を改編トレース）

1615年の一国一城令により徳島城以外の所持は禁止され、1638年までの間に阿波九城制は順次廃棄されていった。それにともない諸城へ出向していた重臣・兵士が徳島城下町へ集中し、武士の城下集住が貫徹し侍屋敷の整備が進展する。

城下の建設は、吉野川下流域で吉野川の支流である新町川，助任川，寺島川，福島川等の大小河川が形成するデルタ地帯である徳島，寺島，福島，住吉島，常三島，出来島の６島とその周囲に隣接する助任，大岡，富田，内町，新町，佐古の６地区を中心として行われた。天然の区画を利用した、いわゆる「島普請」である。町人・寺社・下級武士が比較的地盤面の高い隣接６地区を中心として住まわされたのに対し、中上級武家屋敷は天然の要塞ともいえる６島の中州低湿地、特に徳島・寺島地区に集中する軍事的配置をとった。

その中で徳島地区は城郭・御殿と西側に接する中心地区であることから、家老・中老邸宅の集中する最上級藩士地区である。中老と物頭が約半数を占め、それ以外も全て200石以上である。また周囲を石

垣で囲まれたことは、他の島が土塁であるのとは異なり、城の三の丸的機能も果たしている。徳島地区に架かる橋は徳島橋，福島橋，助任橋の３橋のみであり、その内側には番所（門台）が置かれ厳重に警備されるとともに、前後には重臣の屋敷が配置された。

寛永年間（1624～1644）後半には、船頭と水主・船大工等の屋敷は水軍の船置所のある安宅福島の臨海地区に集められ、また佐古には町屋が建設された。

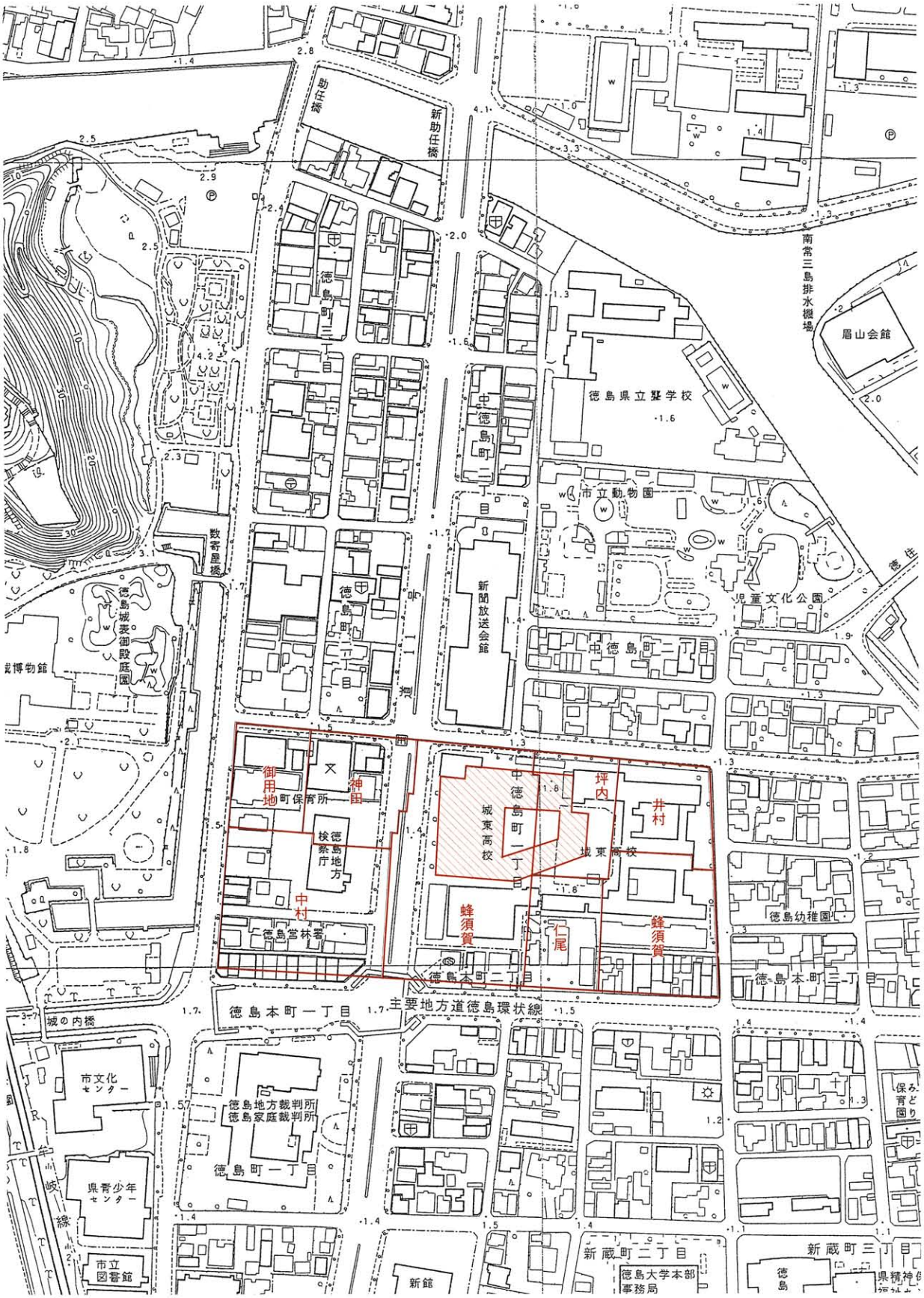
正保３年（1646）に幕府に提出するためにつくられた「阿波国徳島城之図」によれば、徳島城を中心として侍屋敷・足軽町・町屋・寺町が揃い、整然とした町割が確認できる。寛永期に大規模な城下町建設が進められたが、ここに町割の完成をみたものであり、徳島地区を中心に福島・住吉島・常三島・助任・出来島・寺島・新町・富田に武家屋敷を、佐古・富田・助任に足軽屋敷を配置し、町屋は寺島内部に形成された内町と新町・福島・助任・佐古に置かれた。また、以前は寺島にあった寺を眉山山麓に移転集中させ、寺町を編成した。城下町の四至（範囲）は東が福島安宅，西が佐古五丁目二本松，南が富田金毘羅大岩鼻，北が助任万福寺であり、この範囲が「御山下」と呼称された。

屋敷は、藩士の禄高や家格を基準として与えられた。侍屋敷の下賜の基準は以下のようであった。

「新屋敷ニ被下候節中老　無格迄反数書」

一	五百石取	弐反半	(750坪)
一	四百石取	弐反	(600坪)
一	三百石取	壱反六畝廿歩	(500坪)
一	弐百五拾石取	壱反半	(450坪)
一	弐百石取	壱反三畝拾歩	(400坪)
一	百五拾石取・百石取・無足御小姓迄	壱反弐畝拾歩	(380坪)
一	中小姓・御日帳・御歩行・小奉行并諸手代	壱反	(300坪)
一	御弓之者并小頭格之者	五畝	(150坪)
一	御持筒之者	百坪	
一	御鉄炮者・御番人・御掃除坊主・中間・小者迄	七拾五坪	

以上のような経過をたどり、順次城下町の整備が進められたが、本遺跡の所在する中徳島町界隈は上級家臣の屋敷が建ち並ぶ徳島の一角にあたる。その屋敷割りを示しているのが、巻頭図版３の「御山下島分絵図　徳島」である。



第６図　調査地点位置及び屋敷割図

調査区屋敷地の変遷

絵地図，記録からみた調査区地点の変遷をみていく。

文政８年（1825）の「眉山絶頂より眺望」[1]（写真１）は、眉山山頂から徳島城下を見下ろした風景画である。細密に町並みが描写され、徳島城天守下（絵図では右側）に広がる徳島城大手筋には３階建ての太鼓櫓や月見櫓が見える。西側の出来島地区には屋敷が密集しているように見える。調査区付近の徳島地区は周囲が石垣とその上の並木によって囲まれており、他地区との違いが明瞭である。

第６図は明治２，３年（1869，1870）「徳島藩御城下絵図」における調査区付近の屋敷割りを現代の徳島市全図に重ねたものである。これによると調査区は２軒の屋敷境界付近に位置することがわかる。以下は同様に当時の絵図から調査区を割り出したものである。

まず寛永４年（1627）の「讃岐伊予土佐阿波探索書添付阿波国徳島城図」は幕府隠密が密かに阿波に潜入して作成した図であり限られた期限に作成されたもので、簡略で歪みも大きいが、徳島城及び城下を客観的に描いた最も古い絵図である。徳島地区の調査区付近には「侍町」との記載がある。

寛永年間（1632～1636）と推定される「御山下絵図」[2]（忠英様御代御山下画図）には、徳島地区は「侍屋敷」と記載されている。次いで、元禄４年（1691）の「御山下絵図」[3]（綱矩様御代御山下絵図）によれば、中徳島の調査区付近の区画は「太田亀之丞」「立木伝左エ門」「山田八左衛門」、享保年間（1727頃）「御城下絵図」には「太田新五兵衛」「立木関之丞」「山田」の記載がみられ、500石取り程度の藩士の屋敷が構えられていた。続く安永２年（1773）に蜂須賀駿河喜儀（阿波の十代藩主　蜂須賀重喜公（大谷公）の四男）が屋敷を構え、安政年間（1854～1860）の「御山下島分絵図　徳島」[4]には「蜂須賀安藝」・「坪内主水」・「仁尾内膳」と記載されており、調査地は幕末（明治２年　藩政改正）まで主に蜂須賀氏（最終は蜂須賀安藝喜永）と坪内氏（同　坪内主水）の屋敷であったことが読みとれる。（第１表参照）

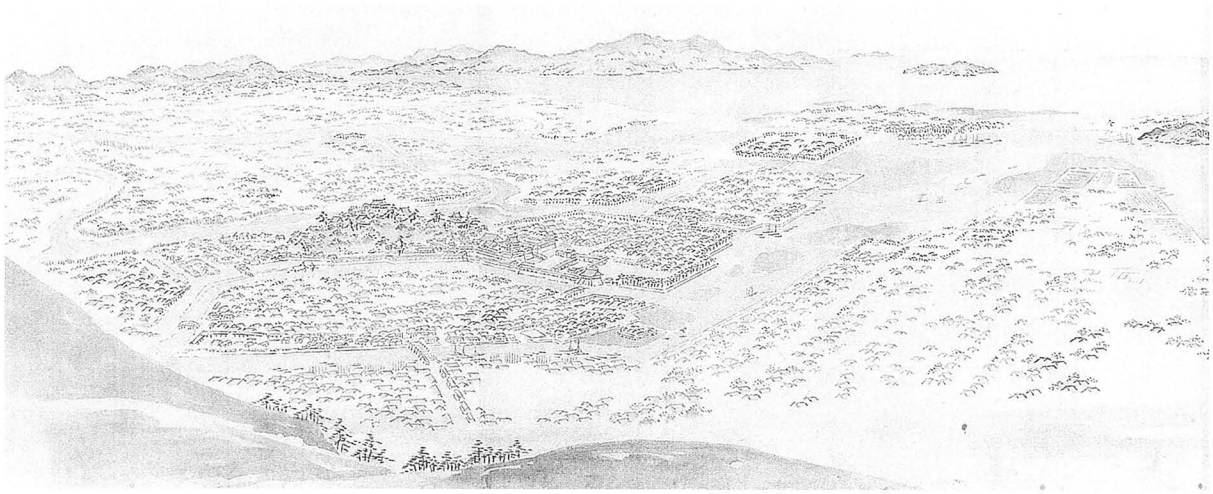


写真１　眉山絶頂より眺望（部分）　文政８年（1825）個人蔵

第１表　調査区の絵図・地図・文書の記述

元　号	西　暦	絵図・文書・地図等資料名	調査地表記
寛永４	1627	讃岐伊予土佐阿波探索書添付 阿波国徳島城図	侍町
寛永年間	1632～1636	忠英様御代御山下画図	侍屋敷
正保３	1646	阿波国徳島城之図	侍屋敷
寛文５	1665	阿波国渭津城之図	侍屋敷
天和３	1683	阿波国渭津城下之絵図	侍屋敷
元禄４	1691	綱矩様御代御山下絵図	立木伝左ェ門　・山田八左衛門 坪内(前野喜六)　・太田亀之丞
元禄５	1692	御山下屋敷略図	立木関之丞　・山田八左衛門 坪内(前野喜六)　・太田新五兵衛
宝永３	1706	阿波国徳島城下之図	立木関之丞　・山田八左衛門 坪内源右衛門　・太田新五兵衛
享保年間	1727頃	御城下絵図	立木関之丞　・山田清太左衛門 坪内源右衛門　・太田新五兵衛
享保17	1732	阿波藩士屋敷録	立木関之丞　・山田此右衛門 坪内杢　・太田新五兵衛
天明年間	1781～1789頃	御山下画図	蜂須賀利之助　・坪内平太左衛門
文政７・８	1824・1825	阿州徳島藩御家中録	蜂須賀　・坪内
安政年間	1854～1860	御山下島分絵図　徳島	蜂須賀安藝　・坪内主水
明治２・３	1869・1870	徳島藩御城下絵図	蜂須賀安藝　・坪内主水

最後に、宮本武史氏の「徳島藩士譜」(1972) により、坪内家、山田家、立木家、太田家、蜂須賀家それぞれの石高等の変遷を確認しておく。

《坪内家》　　敷地　1,141坪

	名　前	知行高等	役　職	召出年　他
初代	前野紀六	1500石	不　詳	寛文８年（1668年）
２代	坪内杢	召出250石	御近習役	宝永３年（1706年）
		1000石相続	裁許御奉行	
３代	坪内源蔵	1000石	宗門改御奉行	元文５年（1741年）相続
４代	坪内平太左衛門	1000石	宗門改御奉行	明和２年（1765年）召仕
			御小姓組番頭	
５代	坪内織之丞	1000石	宗門改御奉行	寛政２年（1790年）相続
６代	坪内主税	1000石	裁許御奉行	文化12年（1815年）相続
７代	坪内主水	1000石	町御奉行	峻陵院様代　相続

《山田家》　　敷地　771坪

	名　前	知行高等	役　職	召出年　他
初代	山田八左衛門 宗直	600石	大坂御陣出陣 鉄砲組頭	瑞雲院様代　召出
2代	山田八左衛門 宗高	500石	鉄砲組頭	寛永2年（1625年）相続
3代	山田三太左衛門	400石	不　詳	寛永4年（1627年）相続
4代	山田八左衛門 宗常	400石	不　詳	明暦4年（1658年）相続
5代	山田比右衛門	召出5人御扶 持方御支配 15石400石相続	御児小姓役 樋口内蔵助組	貞享3年（1685年）召出
6代	山田平八郎	400石	樋口内慶助組	元文2年（1738年）相続
7代	山田八左衛門 武雅	400石 後山田織部 断絶に付苗字 相続のため600石加増の上中老被仰付	佐渡大衛組 山田織部後室併子四人御預	元文5年（1741年）相続
8代	山田左京	250石	蜂須賀一学組 大谷屋敷御番	明和5年（1768年）相続
9代	山田庄五郎	250石	御作事奉行 三田屋敷御目付 甲州川々御普請 御手伝御用	文化5年（1808年）相続
10代	山田貢	250石 後250石加増 其後500石加増 （中老席）	蜂須賀伊豆組 宗門改御奉行 裁許御奉行 町御奉行 洲本御仕置御用 御年寄役	天保10年（1839年）相続

《立木家》　　敷地　700坪

	名　前	知行高等	役　職	召出年　他
初代	立木伝左衛門 某	350石余	名西郡代官役	慶長18年（1613年）召出
2代	立木伝左衛門 宗次	350石余	御使番役　横目役 郡御奉行　安宅御目付	寛文2年（1662年）相続
3代	立木関之丞	350石余	仁良院様御用 蜂須賀一学組	元禄6年（1693年）相続
4代	立木永次郎	350石余	蜂須賀一学組	元文元年（1737年）相続
5代	立木甚蔵	350石余	不詳	宝暦13年（1764年）相続
6代	立木嘉兵衛 法育	350石余	御城山番	明和元年（1764年）相続
7代	立木武八郎	350石余	御蔵奉行勘定方共	文化7年（1810年）相続
8代	立木嘉兵衛 法方	350石余	御城山番 御使番役	文政7年（1824年）相続

《太田家》　　敷地　886坪

	名　前	知行高等	役　職	召出年　他
初代	太田彦六	307石 後100石加増	朝鮮御陣御共出陣	福聚院様播州にて召出
2代	太田武部	407石 後100石加増	三保姫様附人	慶長19年（1614年）相続
3代	太田弥次右衛門	507石	淡州手長所御勘定役 鉄砲組頭	寛永初年（1624年）相続
4代	太田九朗右衛門	200石 507石相続	鉄砲組頭　島原出陣	興源院様召出 寛永10年（1633年）相続
5代	太田源八	507石	御使番頭　鉄砲組頭	寛文8年（1668年）相続
6代	太田新五兵衛	507石	御使番役　御奏者役 持筒組頭　裁許御目付	貞享2年（1685年）相続
7代	太田平学	408石	浅草御火之御番 水見役　御城山番	延享4年（1747年）相続
8代	太田総右衛門	408石	不詳	明和2年（1765年）相続
9代	太田牛之助	召出200石 408石相続	御側小姓役 奥小姓役生駒主膳組	明和6年（1769年）召出
10代	太田丹蔵	408石	裁許目付	享和元年（1801年）相続

			林貫太郎組	
11代	太田勝左衛門	408石	御使番役　御勤役	文化13年（1816年）相続
			岩屋御番手　鉄砲組頭	
12代	太田丈之助	408石	西洋流砲術教授	文久元年（1861年）相続

《蜂須賀家》　阿波藩十代藩主　蜂須賀重喜公（大谷公）四男
敷地　3,302坪（1町1反2歩）

	名　前	知行高等	役　職	召出年　他
初代	蜂須賀駿河	4,000石	家老職　御仕置御用	安永2年（1773年）
	喜儀		郷鉄砲二組御預	家老職被仰付
2代	蜂須賀駿河	4,000石	家老職　御仕置御用	享和2年（1802年）召出
	喜脩		宗門改御用	
3代	蜂須賀駿河	4,000石	家老職　御仕置御用	文政11年（1821年）相続
	喜熙			
4代	蜂須賀安藝	4,000石	家老職　御仕置御用	嘉永年間相続
	喜永		銃士隊司令	（1848～53年）

4　徳島城関係略年表

1585年（天正13）６月　蜂須賀家政、阿波国を拝領し一宮城に入城。すぐに猪山に城地を定めて、渭津を徳島と改める。

12月　名東郡矢野村百姓中に「検地条々」を出し検地に着手。領内枢要の九城に重臣層を配置し、支城駐屯制による領国経営を開始。

1586年（天正14）12月　呉服又五郎に紺屋司を任じ、紺屋役銭の徴収を命じる。またこの年、城下市中の町割を定めて、町屋敷を望む者に地面を下付する旨を通達。

1600年（慶長５）７月　家政、豊臣方からの参戦要請を拒否し、大坂方との「手切れ」を決意。

８月　家政、阿波国を豊臣秀頼に返上。剃髪して蓬庵と号し高野山に隠居。至鎮は家康方に参戦。

９月　至鎮、家康から阿波国を拝領。

1603年（慶長８）８月　至鎮、板野郡内の赤松則房の旧領・置塩領（１万石）及び毛利兵橘の旧領・兵橘領（１万石）を夫人化粧領として拝領。ここに阿波国一円支配がなる。

1614年（慶長19）11月　至鎮、大坂冬の陣に参戦。

1615年（元和１）５月　至鎮、大坂夏の陣に参戦。戦功により淡路国を加増される。

1616年（元和２）11月　徳島城下紙屋町以外での紙商売の禁止。

1625年（寛永２）７月　城下寺島に藍方役所を置く。

1638年（寛永15）　幕府の一国一城令により、領内には徳島・須本の２城となる。

1641年（寛永18）７月　公儀御用につき国絵図・御山下絵図を提出。

1646年（正保３）　幕命により阿波両国絵図・城下絵図・郷村絵図・家中分限帳を提出。

1657年（明暦３）５月　徳島城石垣破損につき修復普請を幕府に申請。

1667年（寛文７）７月　城下内町紀伊国町から出火、内町家数420軒・武家屋敷25軒焼失。

1675年（延宝３）１月　市中在々の担ぎ商を規制するために担ぎ商に鑑札を発行。

３月　城下内町より出火。新シ町から魚ノ店まで154軒焼失。

1678年（延宝６）10月　城下渭津を再び徳島と改称。

1680年（延宝８）　徳島城下の豪商・魚屋（ととや）と寺沢を座元として銀札を発行。

1685年（貞享２）１月　城下・在々において飼犬を禁止。

３月　城下新町免許町から出火、家数467軒焼失。

1686年（貞享３）11月　城下商人保護のため佐古・富田・助任口など郷分での商売禁止。

1688年（元禄１）１月　城下大工町から出火、西船場全焼。家数216軒焼失。

1690年（元禄３）４月　幕府、徳島城石垣修復普請を許可。

1700年（元禄13）２月　幕府、徳島城外曲輪その他の石垣修復工事を許可。

1721年（享保６）７月　城下瓢箪島より出火、御花畑御殿・長屋など焼失。

1722年（享保７）３月　富田御屋敷焼失。

12月　城下徳島会所より出火。

1724年（享保９）４月　城下内町３丁目より出火、左右へ片側１丁焼失。

1727年（享保12）10月　城下内町より出火、新シ町から魚ノ店まで焼失。

	12月	城下福島会所焼失。
1767年（明和４）	２月	城下藍場町において藍大市が始まる。
1782年（天明２）	１月	徳島城下紙屋町から出火、内町地区も類焼。
1785年（天明５）	２月	徳島城下新町橋筋から出火、籠屋町まで類焼。
1811年（文化８）		『阿波名所図絵』刊行される。
1824年（文政７）	12月	城下東新町より出火、富田町・新魚町・桶屋町・籠屋町・古物町・大工町二丁目・西大工町・西新町一丁目・南大工町まで類焼。家数932軒焼失。
1835年（天保６）	５月	徳島城下富田浦に社蔵が設置される。
1869年（明治２）	６月	版籍奉還。蜂須賀茂韶、知藩事に任命。
1871年（明治４）	７月	徳島藩を廃し、徳島県設置。
	11月	徳島県を名東県と改称。
1876年（明治９）	８月	名東県が廃止され、阿波は高知県に、淡路は兵庫県に合併。
1880年（明治13）	３月	徳島県再設置。
1945年（昭和20）	７月	空襲により徳島城跡公園内の建物焼失。

1　個人蔵。
2　町立水口美術館蔵。
3　個人蔵。
4　国文学研究史料館蔵。

（参考文献）

石尾　和仁「徳島城下町の考古学的研究」『史窓』29号　徳島地方史研究会　1999
根津　寿夫「城下町徳島の再編について－下屋敷を中心に－」『史窓』24号　徳島地方史研究会　1994
服部　昌之「城下町徳島における都市構造の変容過程」『地理科学』５号　のち、三好昭一郎編『徳島藩の史的構造』（名著出版　1975）所収
平井　松午「城下町起源の都市徳島」寺戸恒夫編著『徳島の地理』　徳島地理学会　1995
三好昭一郎「徳島城下町の成立について」『総合学術調査報告　徳島』　阿波学会・徳島県立図書館　1970
三好昭一郎・高橋　啓監修『図説　徳島県の歴史』　1994
「徳島城」編集委員会編『徳島城』徳島市立図書館　1994

Ⅲ　調　査　成　果

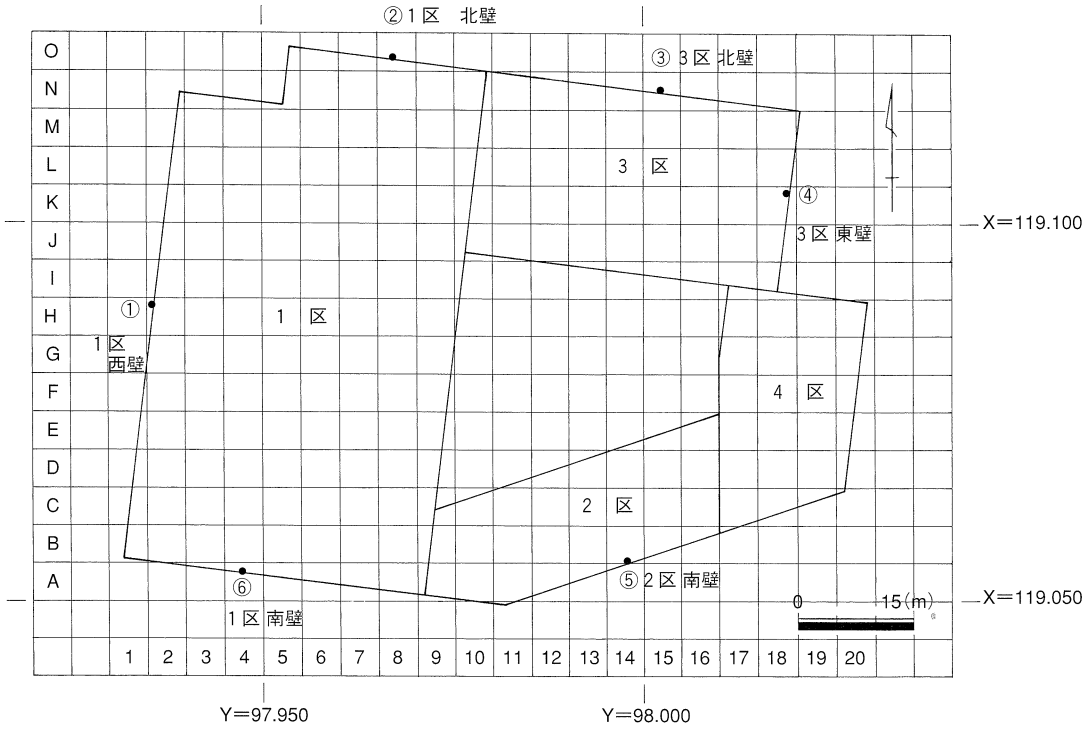
1　基本層序

本遺跡全体の土層は、試掘調査の結果をもとに全面発掘を実施し4時期の遺構面（中世～幕末）を確認した。調査区内は、南西側に当たる1・2区においては比較的大きな攪乱は少ないが、3・4区に至っては旧校舎（徳島女学校）など以前の旧構造物解体に際し部分的な攪乱を受け最終面（第4遺構面）まで達するものも少なくない。

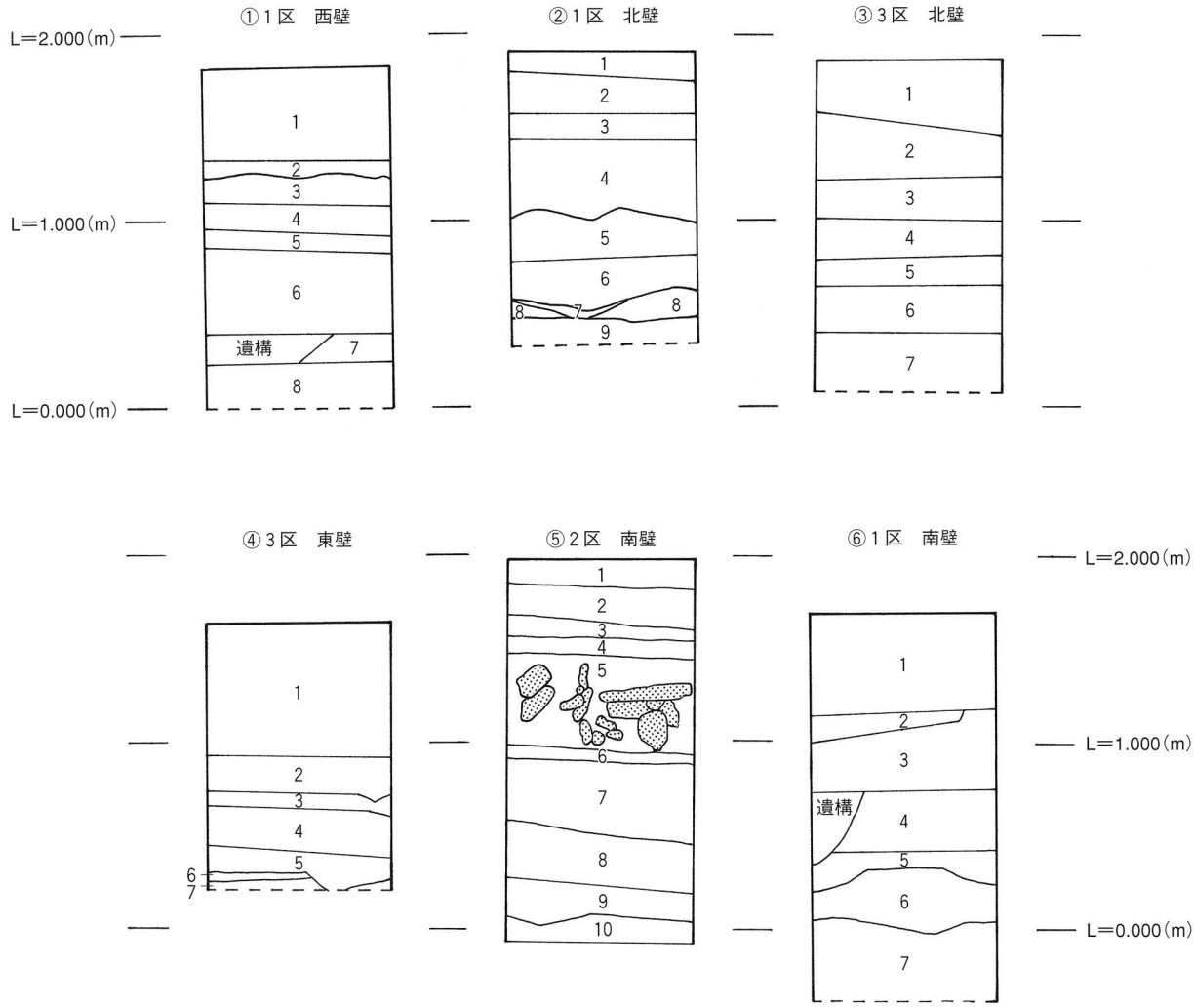
第4遺構面（自然堆積面）から現地表面（グラウンド）までは近世以降の約2mの盛土・整地層である。この周辺は、江戸時代以前は吉野川河口域の低湿地で、水はけの悪い軟弱な地盤であったため、盛土などにより土地を改良してきたことがいえる。人為的に土砂を入れている様子が断面で観察できるが、面の整合性を調査区全体にわたって確定することは困難な状況である。特に調査区東側と南側（現校舎側）は旧体育館やプールの基礎だったと思われるコンクリート片が多く残り、土層の堆積及び全体的な土の色調も異なる。遺構検出レベルは第1遺構面で標高1m前後、第2遺構面では標高0.8m前後と近接しており18世紀第4四半期～幕末期を中心としている。第3遺構面は標高0.5m前後、第4遺構面は標高0.2m前後に形成されている。

第4遺構面以下の堆積では、灰・青灰色シルト層あるいは砂層が堆積しており、いずれにも遺物の包含は認められなかった。

次の第7図に調査区壁面土層検出位置図を、第8図に調査区壁面土層断面図を示す。



第7図　調査区壁面土層検出位置図



第8図　調査区壁面土層断面図（1/40）

① 1区西壁

1．撹乱

2．灰オリーブ　7.5Y5/2　砂質土（鉄分・マンガン粒をやや多く含む）

3．灰　7.5Y5/1　砂質土（鉄分・マンガン粒をやや多く含む）

4．暗灰黄　2.5Y5/2　砂質土（焼土・炭化物・瓦片・礫を多く含む）

5．黒褐　2.5Y3/2　砂質土（直径5mm前後の炭化物を多く含む）

6．灰オリーブ　5Y5/2　砂質土（直径3mm前後の炭化物・焼土・鉄分・マンガン粒をやや多く含む）

7．灰　5Y5/1　シルト質土（直径2mm前後の炭化物を若干含む）

8．灰オリーブ　5Y5/2　シルト質土（炭化物や鉄分・マンガン粒をやや多く含む）

② 1区北壁

1．褐　10YR4/4　砂質土（グラウンドの真砂土）

2．暗灰黄　2.5Y4/2　砂質土（グラウンドの整地層）

3．灰オリーブ　7.5Y5/2　砂質土（鉄分・マンガン粒をやや多く含む、粘性弱い）

4．灰オリーブ　5Y5/2　砂質土（直径5cm前後の瓦片・礫を多く含む）
5．暗灰黄　2.5Y5/2　砂質土（鉄分・マンガン粒をやや多く含む、粘性弱い）
6．灰オリーブ　5Y5/2　砂質土（焼土・炭化物を若干含み、鉄分・マンガン粒をやや多く含む）
7．暗灰黄　2.5Y5/2　砂質土（マンガン粒を少し含む、粘性強い）
8．灰オリーブ　5Y5/2　砂質土（炭化物・焼土・鉄分・マンガン粒を含む）
9．灰オリーブ　5Y5/2　シルト質土（鉄分・マンガン粒をやや多く含む）

③　3区北壁

1．グラウンド真砂土・下層（整地層）
2．撹乱
3．オリーブ黒色　5Y3/2　砂質土
4．暗オリーブ色　5Y4/3　砂質土
5．暗オリーブ色　5Y4/3　シルト質土
6．灰オリーブ色　5Y4/2　シルト質土
7．灰オリーブ色　7.5Y5/2　砂質土

④　3区東壁

1．グラウンド真砂土・下層（整地層）
2．オリーブ褐色　2.5Y4/3　砂質土
3．黄褐色　2.5Y5/4　砂質土
4．灰オリーブ色　5Y5/2　シルト質土
5．黄褐色　2.5Y5/6　粘質土
6．灰オリーブ色　5Y4/3　砂質土
7．灰オリーブ色　5Y5/3　シルト質土

⑤　2区南壁

1．褐　10YR4/4　砂質土（グラウンドの真砂土）
2．灰黄褐　10YR4/2　砂質土（グラウンドの整地層）
3．オリーブ黒　5Y3/2　砂質土（直径5cm前後の砂利を多く含む）
4．オリーブ褐　2.5Y4/3　砂質土（レンガ片・炭化物を少し含む）
5．暗オリーブ褐　2.5Y3/3　砂質土（10～20cmの片岩角礫を多く含む）
6．灰オリーブ　5Y4/2　砂質土（直径3mm前後の礫を多く含む）
7．黒褐　2.5Y3/2　砂質土（直径5mm前後の礫・炭化物・焼土を少し含む）
8．オリーブ褐　2.5Y4/3　砂質土（炭化物・焼土を少し含む）
9．暗灰黄　2.5Y4/2　砂質土（炭化物・焼土をやや多く含む）
10．オリーブ黄　5Y6/3　シルト質土（鉄分中粒・マンガン小粒をやや多く含む）

⑥　1区南壁

1．褐　10YR4/4　砂質土（グラウンドの真砂土）
2．黒褐　10YR3/2　砂質土（グラウンドの整地層）
3．灰オリーブ　7.5Y5/2　砂質土（鉄分・マンガン粒をやや多く含む）
4．灰　7.5Y6/1　シルト質土（鉄分・マンガン・炭化物を含む）
5．灰　10Y5/1　砂質土（直径5～10mmの炭化物を若干、瓦片・木片を含む）
6．灰　7.5Y4/1　シルト質土（礫を多く、陶磁器片を含む）
7．灰　10Y5/1　シルト質土（木片・炭化物・礫を含む）

第９図　第４遺構面遺構配置図

第10図　第３遺構面遺構配置図

第11図　第２遺構面遺構配置図

第12図　第１遺構面遺構配置図

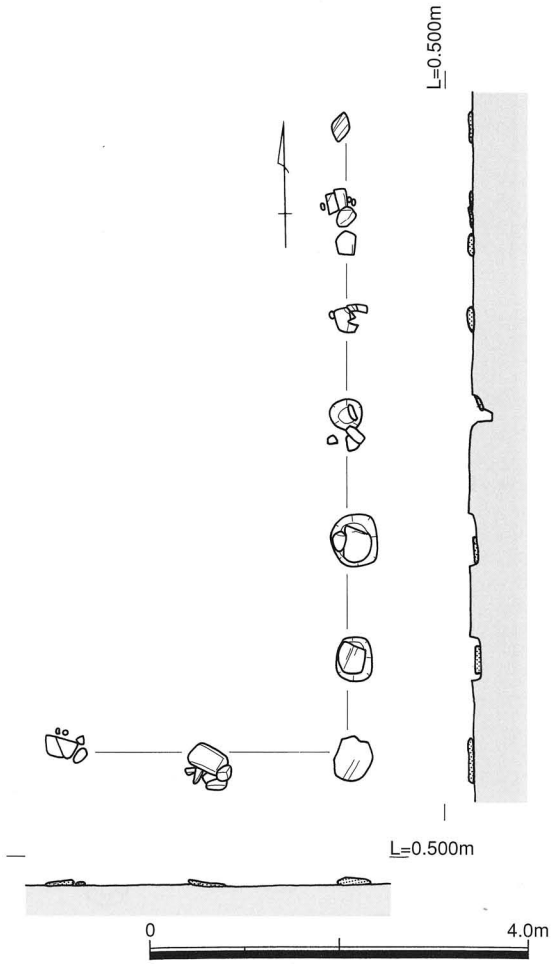
調査成果

(1) 第４遺構面

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡　1（SA4001）（第13図）

１区の西壁近くで検出された、梁間２間、桁行６間の建物跡である。柱穴のほとんどが削平を受けているため、検出できたのは最も南側の梁行１列分と東の桁行１列分だけである。柱間の間隔は梁間側で1.4m、桁行側で1.0～1.2m と狭い。柱には扁平な片岩を直接地面に置いて礎石としたものと、柱穴内に礎板石が置かれたものがある。



第13図　SA4001実測図

掘立柱建物跡　2（SA4002）（第14図）

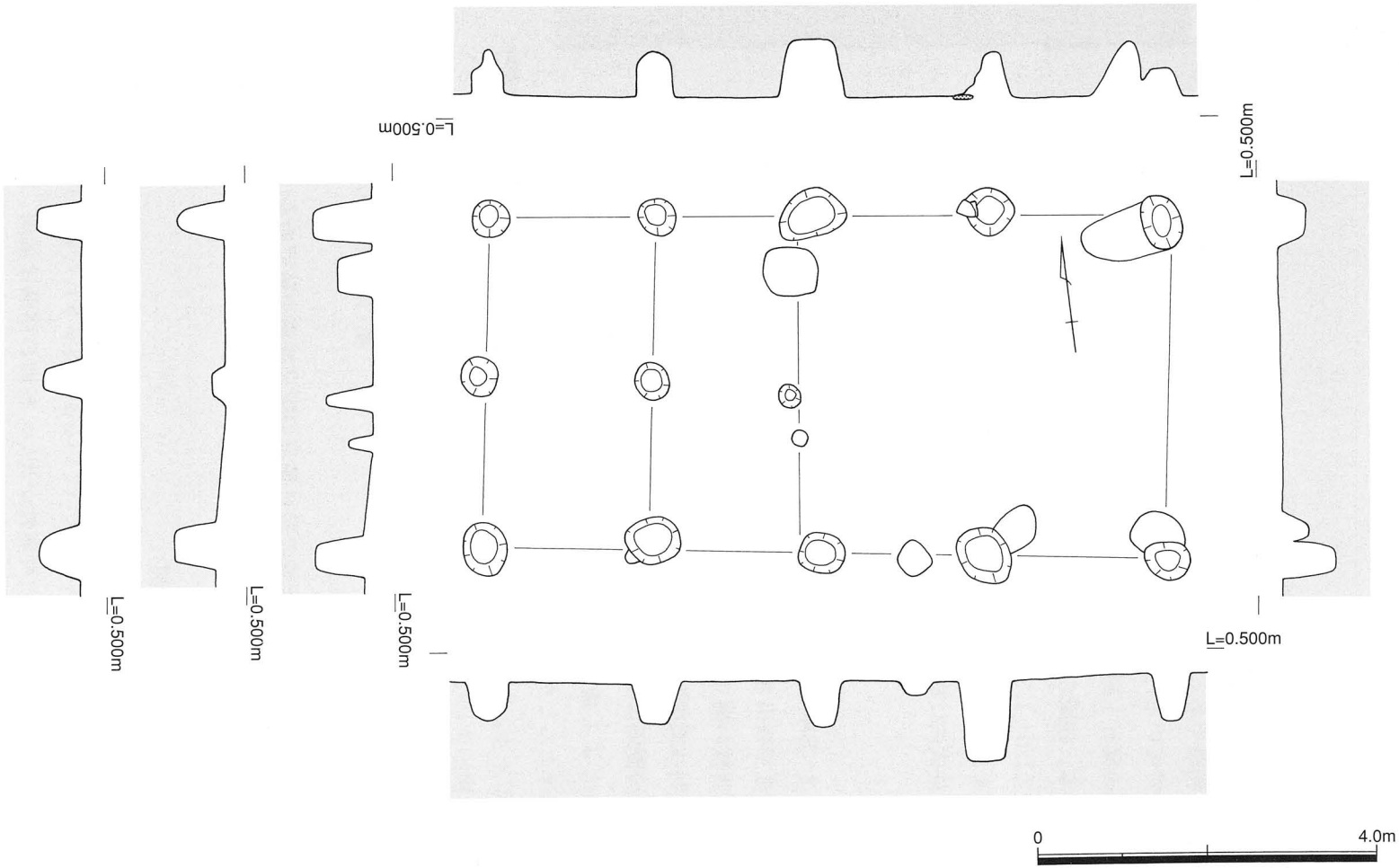
１区の中央部付近で検出された梁間２間、桁行４間の東西棟の掘立柱建物跡である。中央の桁行列は東側半分の柱穴を欠いている。柱間の間隔は梁間側、桁行側とも1.8～2.0m とよく揃っている。柱穴の掘り込みはほとんどが直径、深さとも0.4m を超えている。柱穴内には礎板石や根石などは検出されなかった。

掘立柱建物跡　3（SA4003）（第15図）

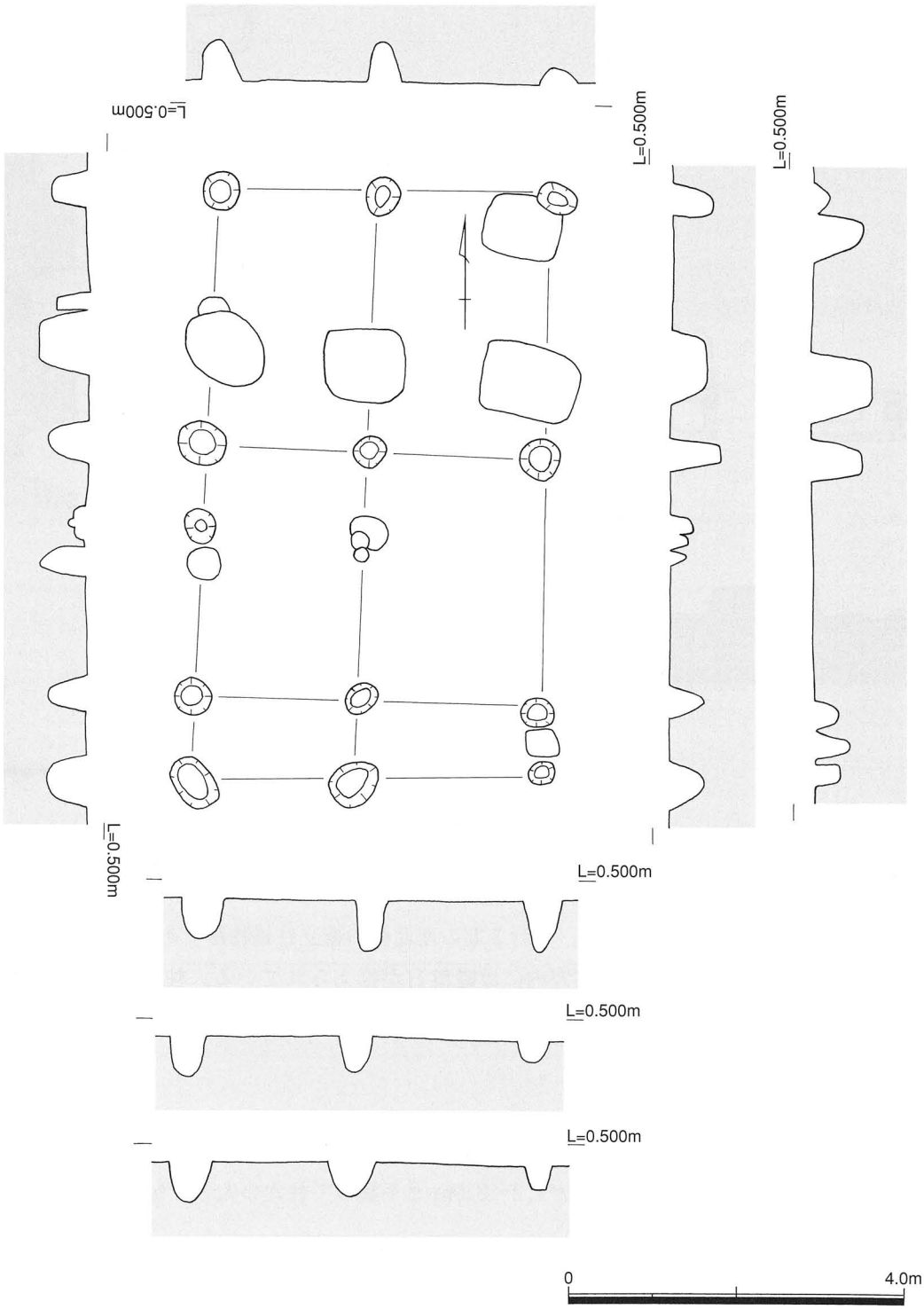
１区中央部付近でSA4002の北側から検出された梁間２間、桁行２間の南北棟の総柱構造の掘立柱建物跡である。柱間の間隔は梁間間で2.0～2.2m、桁行間で3.0m と桁行側が長くなっている。南端の梁行部分には庇が付けられている。

掘立柱建物跡　4（SA4004）（第16図）

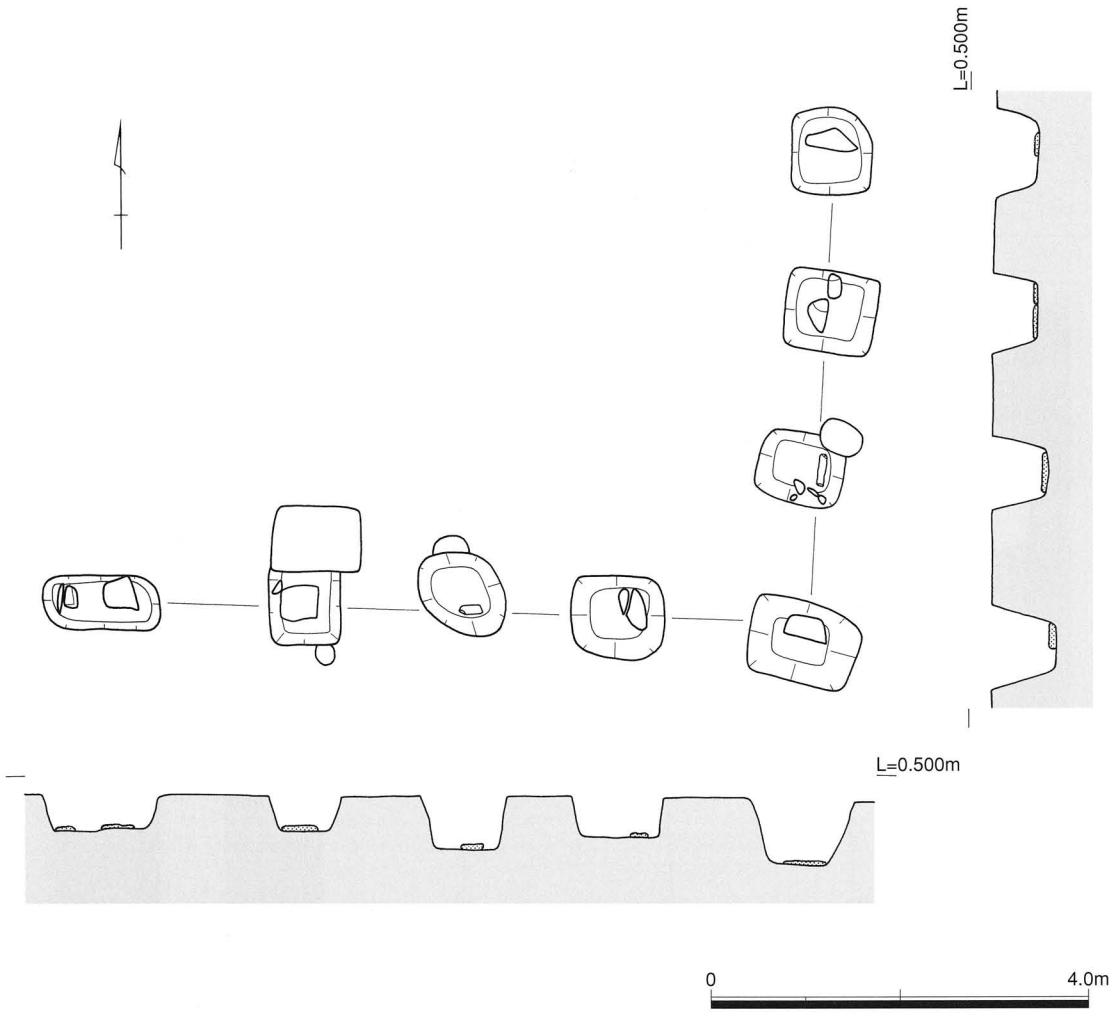
１区の中央付近から検出された梁間３間、桁行４間の東西棟の側柱建物跡と考えられる遺構である。北の桁行列と西の梁行列の柱穴をそれぞれ欠いているが、削平された痕跡がないことからこの部分には柱穴の代わりに礎石が据えられていた可能性が高い。柱間の間隔は梁間、桁行間とも1.6～1.8m で方形の柱穴の掘り込みの中には礎盤石が据えられている。



第14図　SA4002実測図



第15図　SA4003実測図



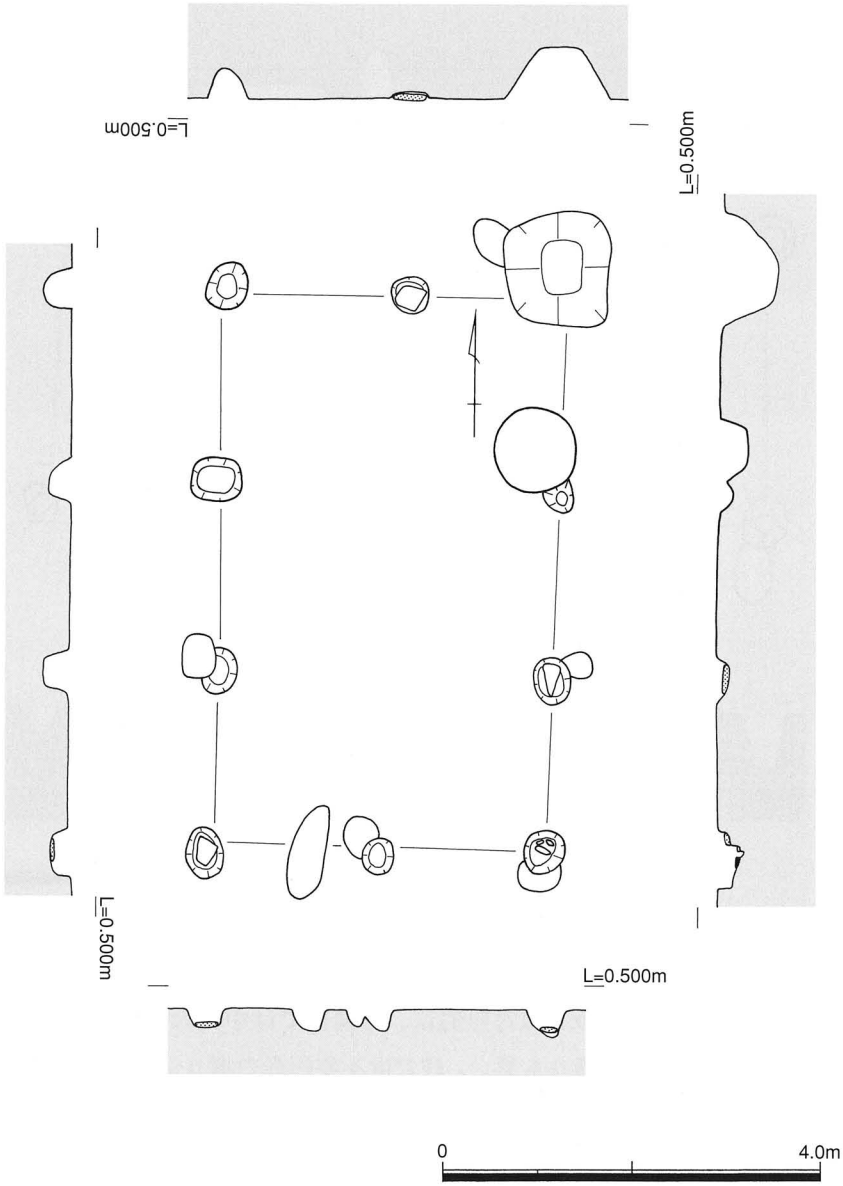
第16図　SA4004実測図

掘立柱建物跡　5（SA4005）（第17図）

1区の中央付近で検出された梁間2間、桁行3間の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間の間隔は梁間間、桁行間とも1.8～2.0mで、4基の柱穴内には礎盤石が据えられている。柱穴の規模は1基を除いて直径約0.4～0.5mと比較的小型である。

掘立柱建物跡　6（SA4006）（第18図）

掘立柱建物跡4（SA4004）の北側から検出された梁間1間、桁行4間の東西棟の掘立柱建物跡である。柱間の間隔は梁間間が3.0m、桁行間が1.2～2.0mと不揃いで柱穴の大きさもまちまちである。



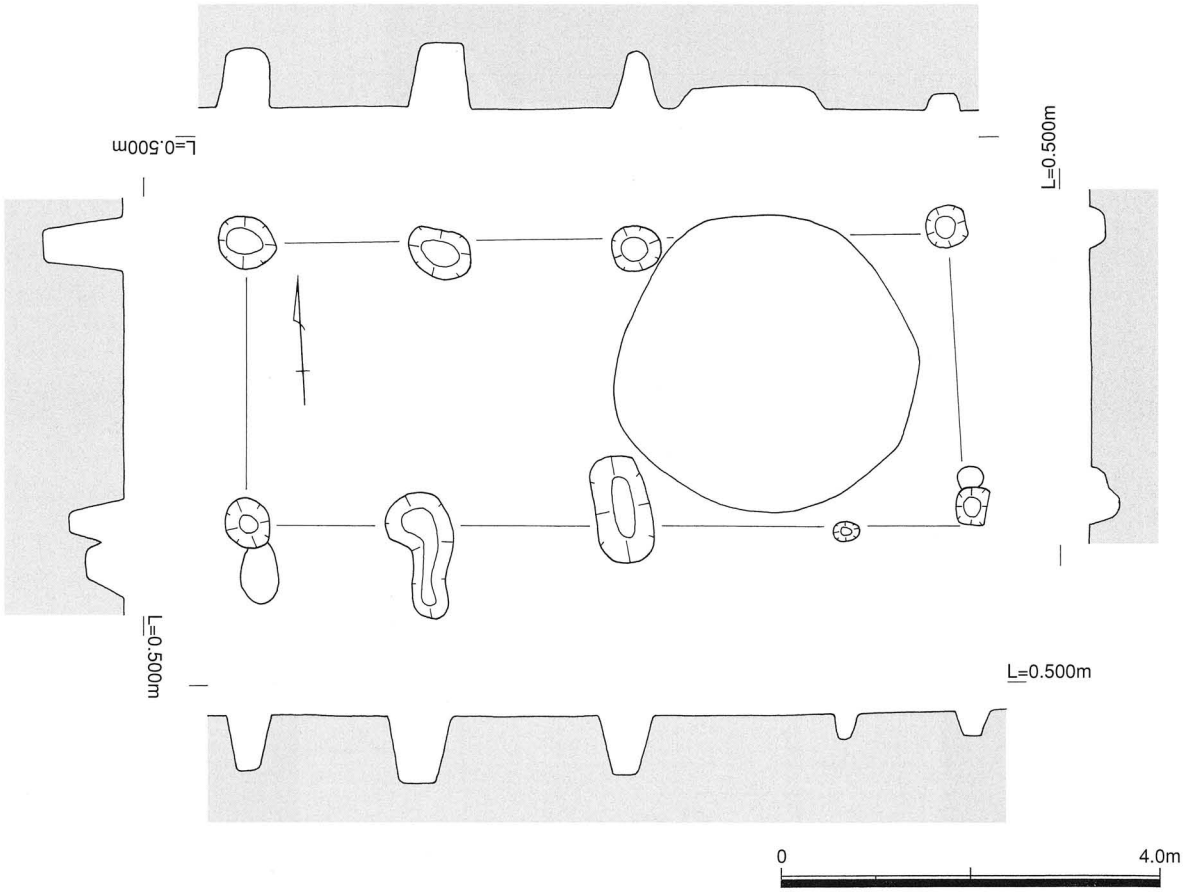
第17図　SA4005実測図

掘立柱建物跡　7（SA4007）（第19図）

掘立柱建物跡６（SA4006）の西側から検出された梁間２間、桁行７間の規模を持つ東西棟の側柱建物跡である。柱間の間隔は梁間間が2.0～2.4m、桁行間が1.8～2.0m と梁間、桁行とも比較的揃っているが、円形または不整楕円形の柱穴の大きさは直径約0.2m から0.6m、深さも0.1～0.8m とまちまちである。

掘立柱建物跡　8（SA4008）（第20図）

１区の北西で検出された梁間２間、桁行３間の東西棟の総柱建物跡である。柱間の間隔は桁行間が

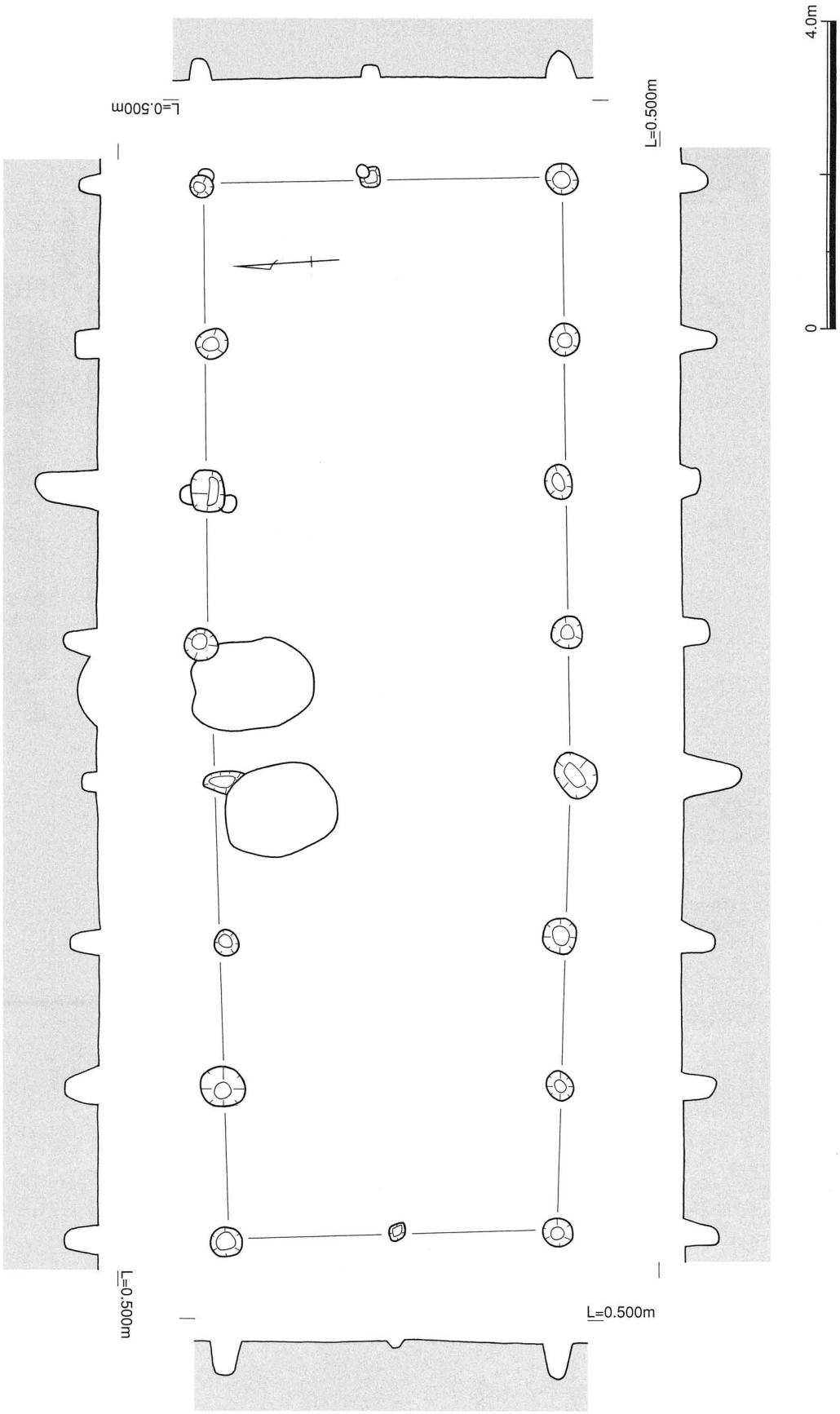


第18図　SA4006実測図

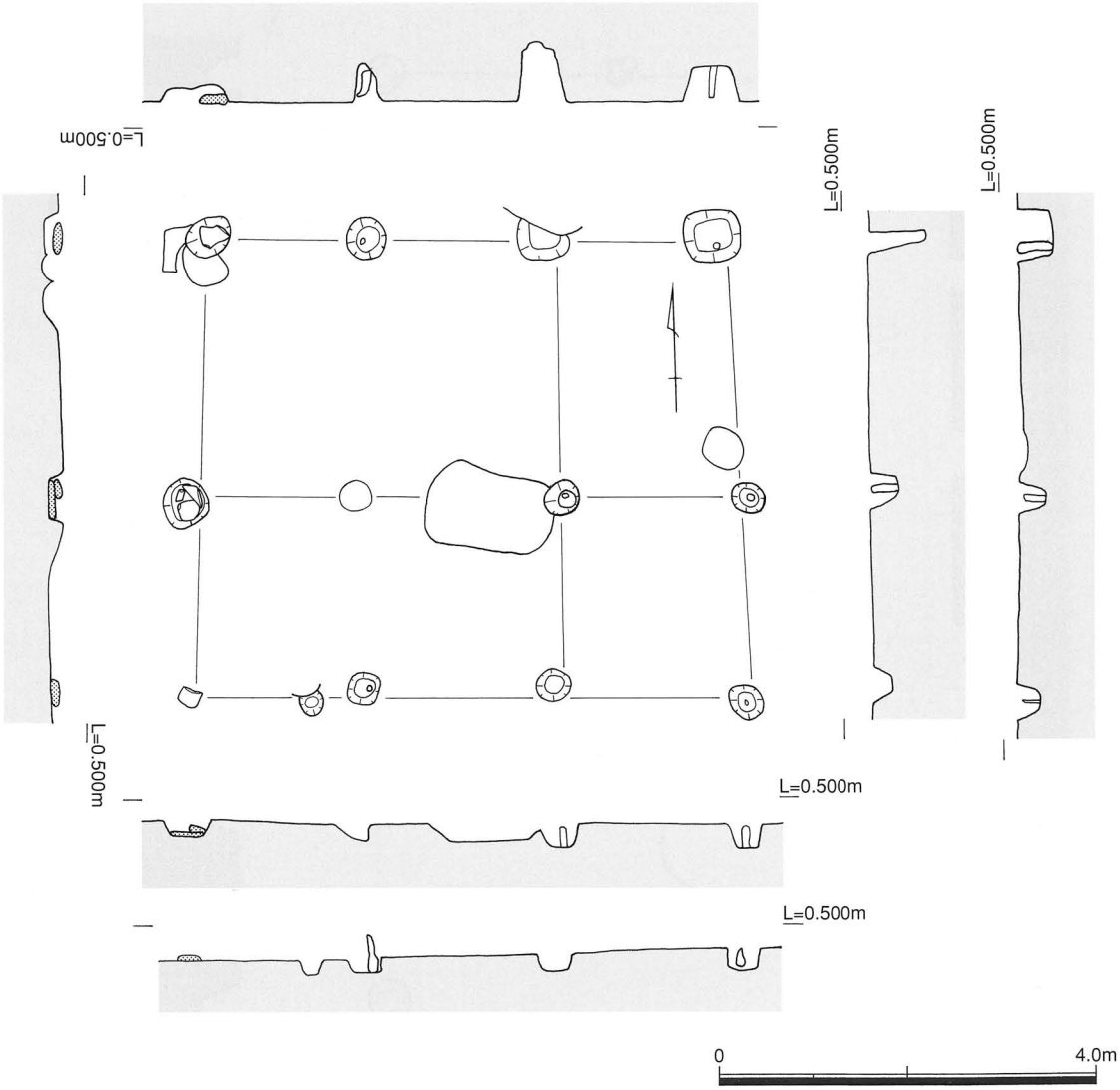
1.8～2.0m と比較的よく揃っているのとは対照的に、梁間間では中央の桁行列から南側が2.0m、北側では2.8m と約0.8m の差があり柱の通りも悪い。柱穴は不整円形の掘り込みで大きさも不揃いである。南西隅の１基は片岩の礎石が置かれているだけで柱穴の掘り込みはなかった。

掘立柱建物跡　9（SA4009）（第21図）

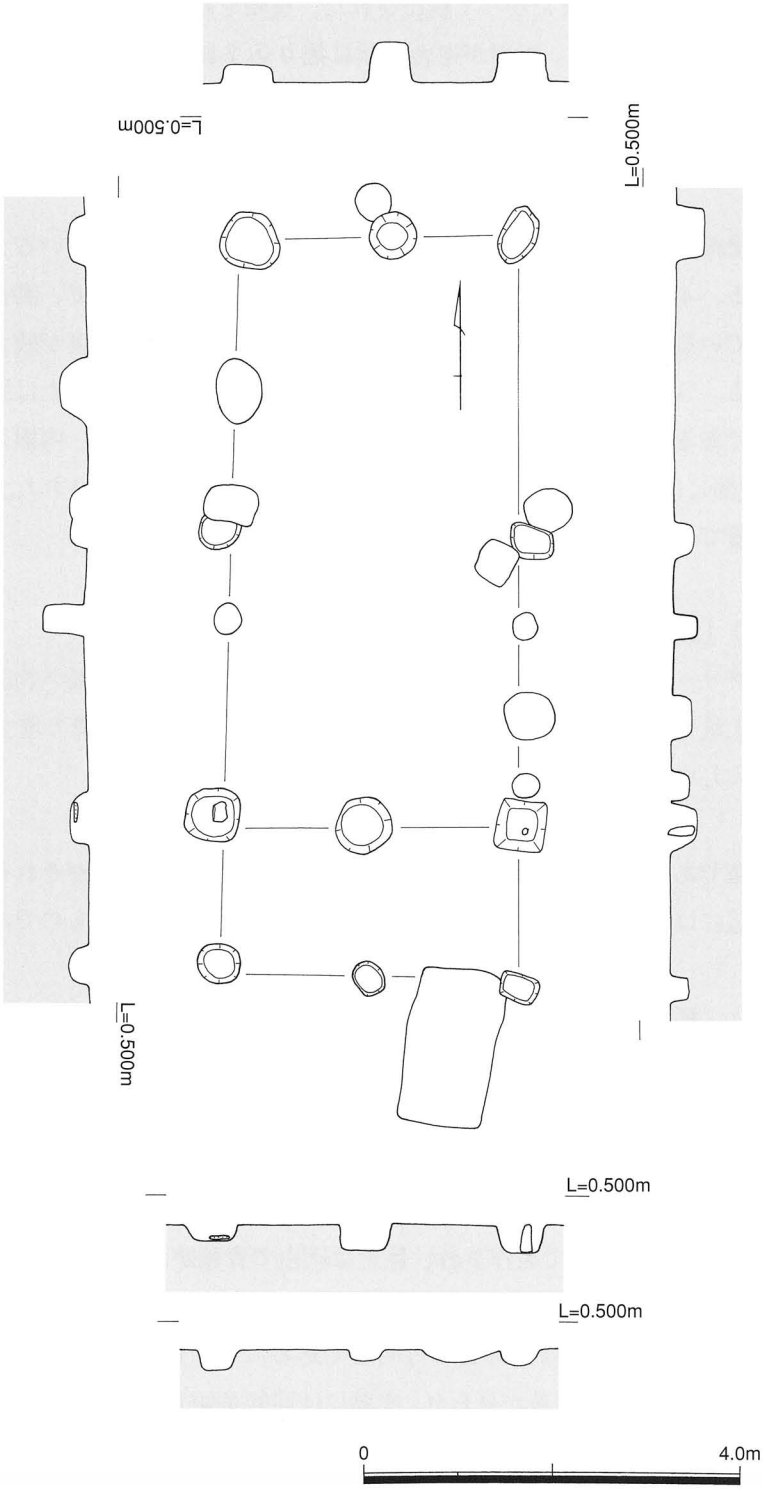
３区の中央部から西よりの地点で検出された梁間２間、桁行３間の南北棟の掘立柱建物である。柱間の間隔は梁間間が1.4～1.6m、桁行間が1.6～3.2m を測る。桁行間では最も南側の１間分の間隔が北側２間分の柱間の間隔の半分ほどしかない。柱穴は円形、不整円形、楕円形、方形と形がまちまちで、大きさも不揃いである。



第19図　SA4007実測図



第20図　SA4008実測図



第21図　SA4009実測図

土抗

土坑　3（SK4003）（第22図）

１区のＢ・Ｃ－３・４グリッドにまたがって検出された、長軸を南北方向にとる長さ約2.2m，幅1.7mの大きさの不整楕円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構内にはオリーブ黒色土を主体とする砂質土が堆積しているが、各層には焼土粒や炭化物、礫などの他製品を含む木片が混入している。

出土遺物（第23図）

３は肥前の陶器製溝縁皿である。内外面は高台周辺を除き灰釉がかけられている。内面見込部と高台部分には砂目痕がある。４は肥前系の陶器製の溝縁皿である。身がやや深めで、高台周辺を除き内外面には灰釉がかけられている。内面見込部と高台にはそれぞれ３カ所ずつ砂目痕が残され、口縁周辺には煤の付着も認められる。５は底部に半環足が貼付けられた瀬戸美濃系の志野または織部の向付である。６は土師質の灯明皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用され、内面にはナデの痕跡が残されている。口縁と底部には煤が付着している。７は底部に静止糸切り痕が残された土師質の皿である。８は銅製の摘み付の蓋である。

土抗　15（SK4015）（第24図）

１区のＤ－８・９グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約3.1m，幅1.7mの大きさの不整形な形の土坑である。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構の埋土中の砂質土の中には焼土や炭化物が混入している。

出土遺物（第25図）

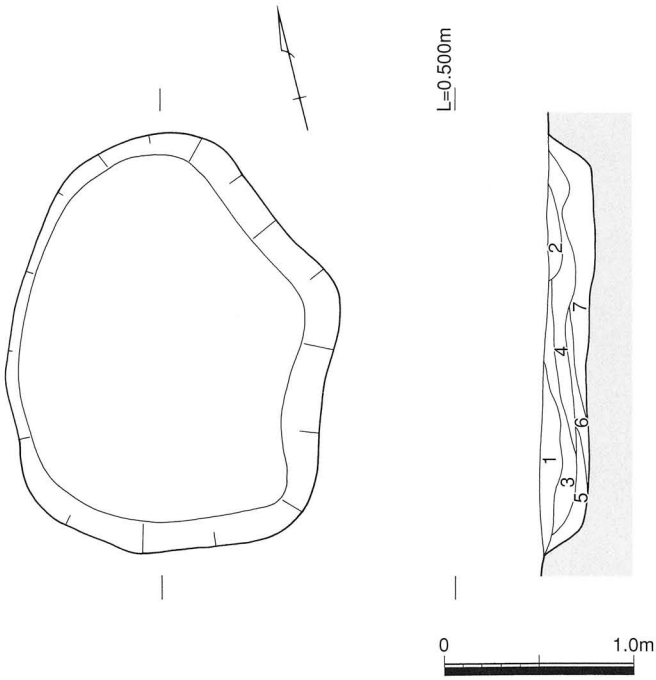
９は磁器製の青花皿である。体部外面には圏線、内面には植物と青海波紋がそれぞれ染付により描かれ、高台畳付部分周辺には砂が付着している。1590年から1630年の漳州窯のものである。

土抗　26（SK4026）（第26図）

１区のＥ－７・８グリッドにまたがって検出された、長軸を東西方向にとる長さ約1.6m，幅0.9mの大きさの隅丸方形の土坑である。逆台形状に掘り込まれた深さ約0.5mの遺構内には９層に分かれ、灰オリーブ色の砂質土を主体にした埋土が堆積している。

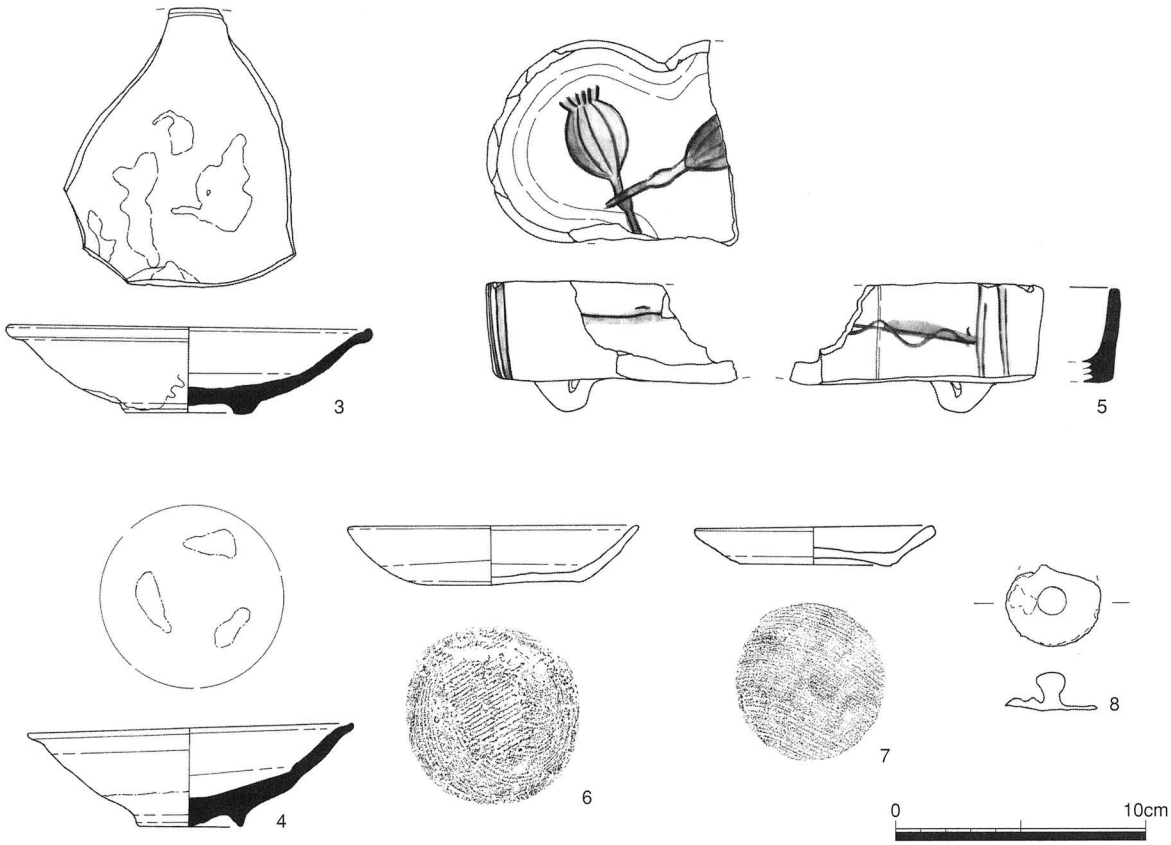
出土遺物（第27図）

10は磁器小皿である。型打ち成形で製作され、胎土は灰白で青釉がかけられている。16C後半の景徳鎮のものと思われる。11は口径102㎜を測る土師質の灯明皿である。底部には回転糸切り痕が残され、口縁部には灯心油痕が見られる。12は土師質の灯明皿である。口径105㎜、器高30㎜と身が深く器壁が厚い。内面見込み部には１カ所煤の付着が見られ、底部には回転糸切り痕が残されている。13は口径95㎜の土師質の小皿である。底部には回転糸切り痕が残されている。14は土師質の小皿である。口径102㎜、器高30㎜と身が深く器壁が厚い。底部には回転糸切り痕が残されている。15は土師質の灯明皿である。口径98㎜、器高27㎜と身が深く器壁が厚い。底部には静止糸切り痕が残され内面には煤が付着している。16は土師質の灯明皿である。内外面には指オサエ痕が残され、口縁部には灯心油痕が数カ所に認められる。17は土師質の杯である。無高台の平形椀に近い器形で、底部には回転糸切り痕が残されている。



1　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/1
2　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/2
3　オリーブ黒色　砂質土　7.5Y3/2
4　オリーブ黒色　砂質土　7.5Y3/1
5　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/1
6　黒褐色　　砂質土　2.5Y3/2
7　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/1

第22図　SK4003実測図



第23図　SK4003出土遺物実測図

土抗　27（SK4027）（第28図）

１区のＥ－８，Ｆ－９グリッドで検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.2m，幅0.7mの大きさの隅丸方形の土坑である。皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内に堆積した砂質土の中には炭化物と焼土粒が多く含まれている。

出土遺物（第29図）

18は肥前系の磁器皿である。折縁形で内面には藁灰釉がかけられているが外面は露胎である。内面見込み部には胎土目が４カ所認められる。16C後期のものである。19は備前の陶器壺である。器高は92㎜と小さく塗土が施され、堅く焼き締められている。底部には窯印が大きく認められる。

土坑　39（SK4039）（第30図）

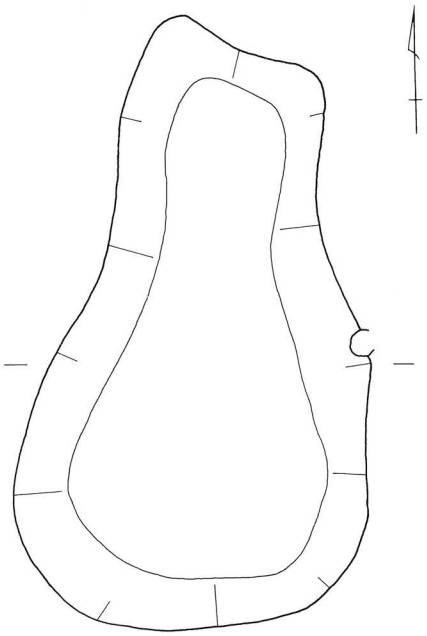
１区のＦ・Ｇ－３・４グリッドにまたがって検出された主軸を南北方向にとる長さ約2.5m，幅2.0mの大きさの楕円形の土坑である。深さ約0.5mの遺構は断面が逆台形状に掘り込まれ、灰または灰オリーブ色の砂質土が主体となる遺構内の埋土中には大型の礫が多く混入している。

出土遺物（第31図）

20は陶器製の擂鉢である。口径272㎜、擂目単位は６条を測る。在地製のものと思われる。

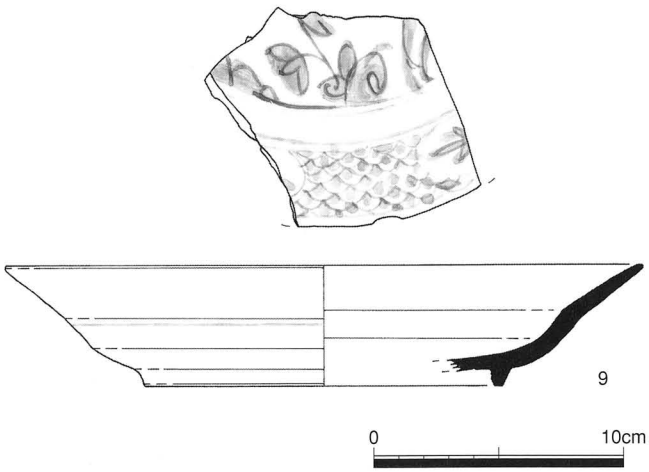
土坑　43（SK4043）（第32図）

１区のＨ－５グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約2.7m，幅2.0m、深さ0.6mの大きさの不整楕円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた遺構内部に堆積した３層に分かれる砂質土の中には陶器や土師器、木製品の他に礫や木片、貝殻片などが多く含まれていることから廃棄土坑と考えられる。



1　暗灰黄色　砂質土　2.5Y4/2
2　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/3

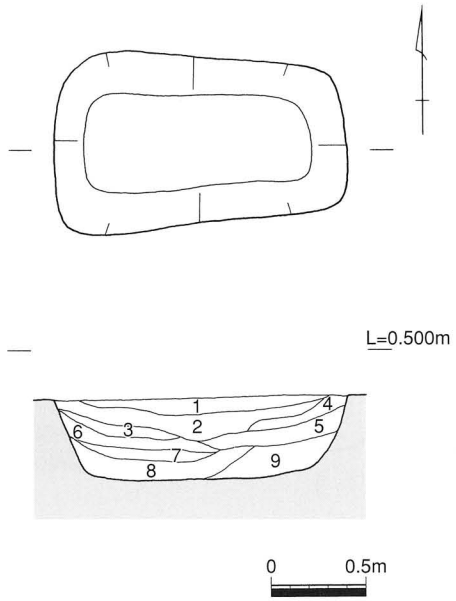
第24図　SK4015実測図



第25図　SK4015出土遺物実測図

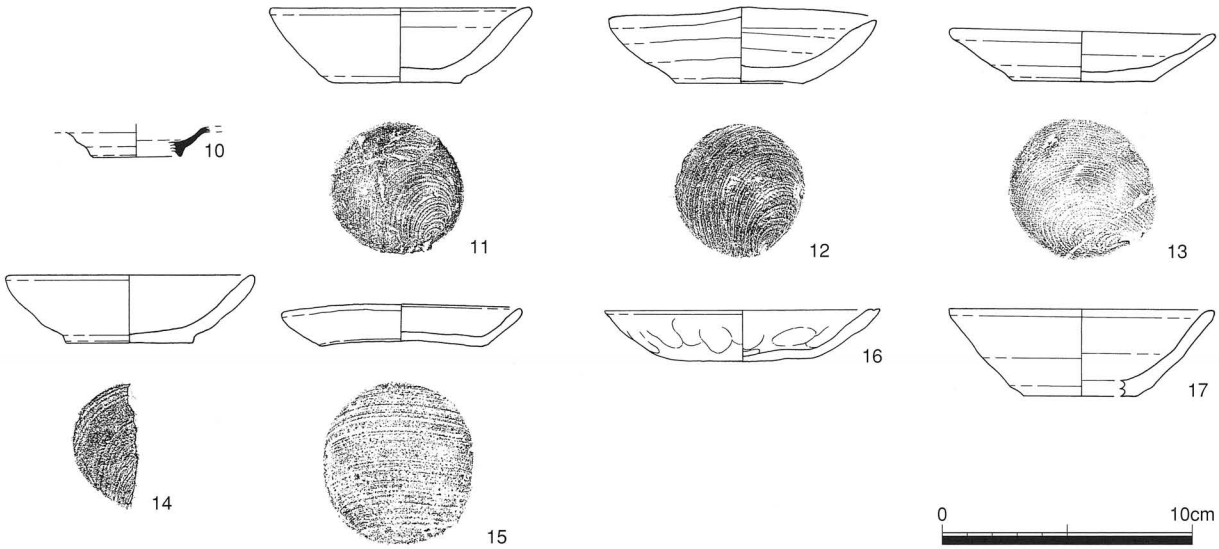
出土遺物（第33・34図）

21は瀬戸美濃系の天目茶碗である。体部は腰部からやや丸みを持って立ち上がり、口縁端部は外反している。全体に茶褐色の鉄釉がかけられているが、高台部分は露胎のまま残されている。22は肥前唐津の溝縁皿である。外面の口縁部周辺と内面全体に灰釉がかけられている。内面見込部と高台部分には砂目痕が残され、外面には煤が付着している。23は土師質の灯明皿である。底部の切り離しには回転糸切り技法が使用され、口縁部全体に煤が付着している。24は底部の切り離しに回転糸切り技法が使用された土師質の灯明皿である。口縁部に煤が付着している。25は底部に回転糸切り痕が残された土師質の小皿である。26は陶器碗の高台部分を利用した加工円盤である。高台は削り出しで無釉であるが、内面見込部には鉄釉がかけられている。27～45は土師質の管状土錘である。孔の直径はそれぞれ２㎜～４㎜である。46は木製の蓋で内外両面に漆が塗られている。47は木製の漆椀である。外面には黒漆、内面には赤漆が塗られている。48は木製の蓋である。長径124.5㎜を測る。49～59は木製の箸である。それぞれ長さは124.5㎜～269㎜を測る。60は用途不明の加工木片である。多数の穿孔が等間隔に並んでいる。61は加工木片である。長さ181㎜を測り、上部両面には黒漆が付着している。62はバイ貝を裁断加工して製作さ

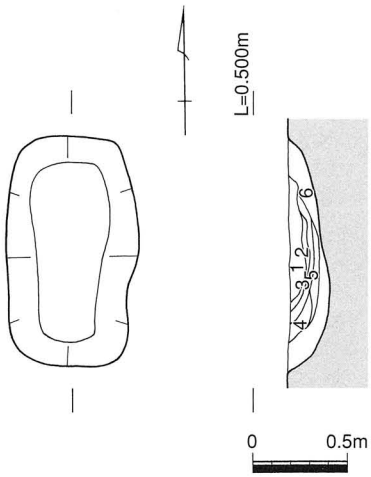


1	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3				
2	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3				
3	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3				
4	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3	7	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
5	黄褐色	砂質土	2.5Y5/6	8	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
6	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3	9	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3

第26図　SK4026実測図

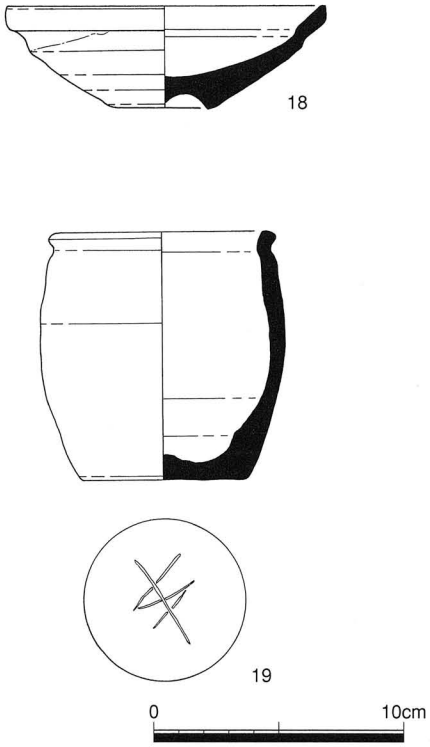


第27図　SK4026出土遺物実測図



1　暗褐色　砂質土　10YR3/3
2　黒褐色　砂質土　10YR3/2
3　暗褐色　砂質土　7.5YR3/2
4　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/2
5　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/2
6　灰オリーブ色　砂質土　7.5Y5/2

第28図　SK4027実測図



第29図　SK4027出土遺物実測図

れた貝独楽である。63は火箸と思われる鉄製品である。64は銅製の毛抜きである。65は断面が楕円形をした鉄製の釘である。

土坑　44（SK4044）（第35図）

1区のH－4・5グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約3.6m，幅2.0m，深さ0.8mの大きさの不整楕円形の土坑である。逆台形状の断面を持つ遺構内の堆積は複雑で14層に分かれるが、すべて砂質土である。各層に焼土や炭化物、礫を含み、一部には木片も検出されている。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第36図）

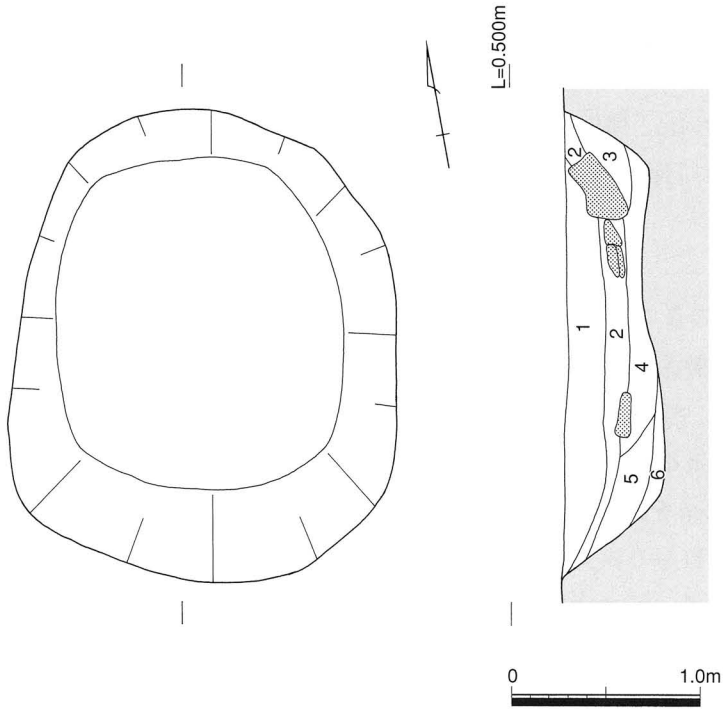
66は志野織部の向付である。体部は腰部で屈曲して立ち上がり、口縁部は大きく外上方に開いている。平滑に仕上げられた底部には半環足が貼り付けられている。長石釉が全面にかけられるが貫入が著しく、底部外面には円錐ピンの目痕が認められる。67は石製の加工円盤である。

土坑　45（SK4045）（第37図）

1区のI・J－4グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる楕円形の土坑である。西側が他の遺構によって切られているため正確な遺構の大きさは不明だが、残存する部分は長さ約2.6m，幅2.5mを計る。遺構の深さは約0.3mと浅く、12層に分かれる遺構内の埋土は焼土粒や炭化物を含み、製品を含んだ木片も検出されている。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第38図）

68は加工木片である。69は丸形をした木製の連歯下駄である。70は木製の箸である。

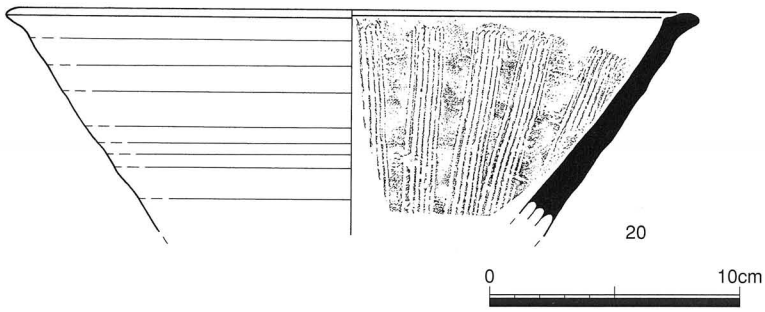


1	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	4	灰色	砂質土	7.5Y4/1
2	暗灰黄色	砂質土	2.5Y5/2	5	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
3	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	6	オリーブ灰色	砂質土	2.5Y5/1

第30図　SK4039実測図

土坑　52（SK4052）（第39図）

１区のJ－４グリッドから検出された東西2.6m，南北約2.8mの大きさの円形に近い形の土坑である。深さ約0.6mの遺構内に堆積した砂質土は16層に分かれるが、ほぼすべての層からは炭化物や焼土粒、貝殻片とともに、製品を含んだ多量の木片が混入している。廃棄土坑と考えられる。



第31図　SK4039出土遺物実測図

出土遺物（第40図）

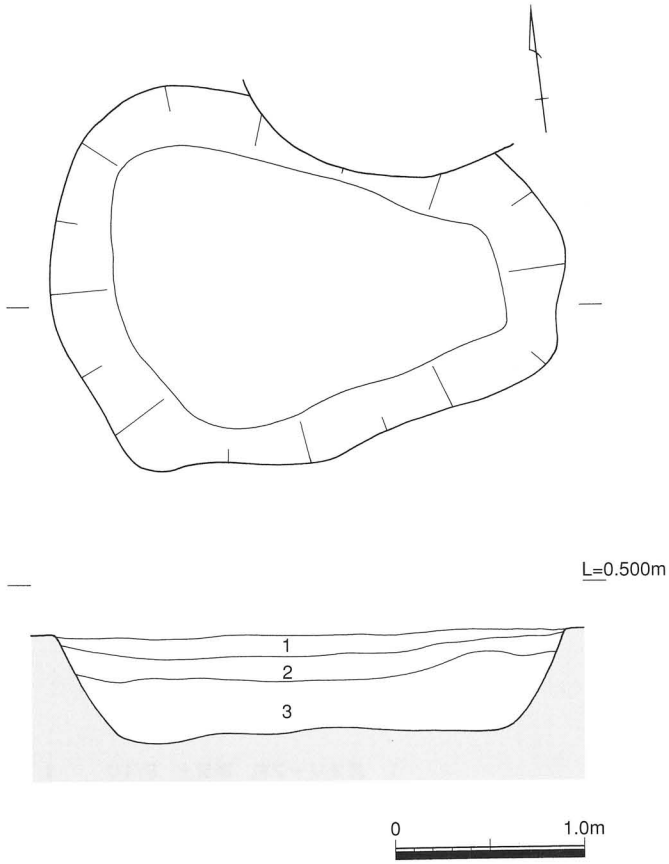
71は木製の漆椀又は鉢である。外面は黒漆、内面は赤漆で塗り分けられ、全面に布が付着している。高台内には「×」の刻印が施されている。72は加工木片である。内面と外面は赤、黒の漆で塗り分けられている。73は木製の蓋又は容器の底である。74～77は木製の箸である。78・79は用途不明の加工木片である。79は穿孔が数カ所に見える。80は木製の篦と思われる。81は木製の連歯下駄である。82～85は木簡である。82～84は両面に文字が見える。

土坑　55（SK4055）（第41図）

１区のＪ－５・６グリッドにまたがって検出された、長さ約4.4m，幅2.0m，深さ0.2mの大きさの東西に長い不整楕円形をした土坑である。

出土遺物（第42図）

86は木製品で曲物の蓋である。長径146㎜を測る。87～93は木製品の箸である。87・88は長さ244㎜を測る。89は長さ173㎜を測る。90は長さ256㎜を測る。91は長さ257㎜を測る。92は長さ250㎜を測る。93は長さ245㎜を測る。94は木製品の篦又は杓子である。長さ330㎜を測る。95は木製品の櫛である。完形の櫛目９本で、長さ222㎜を測る。96は木製品で漆製品の部材である。黒漆が塗られている。97は木製品の木簡である。長さ143㎜を測る。98は木製品の木簡である。両面には墨書が見られる。



1　黒褐色　砂質土　2.5Y3/2
2　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/1
3　黒色　砂質土　5Y2/1

第32図　SK4043実測図

土坑　63（SK4063）（第43図）

１区のＫ・Ｌ－７グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.5m，幅1.3mの大きさの楕円形の土坑である。断面がＵ字状に掘り込まれた遺構内の埋土には炭化物と焼土粒のほか木片などの腐食土と考えられる有機質土混じりの砂質土が堆積している。

出土遺物（第44図）

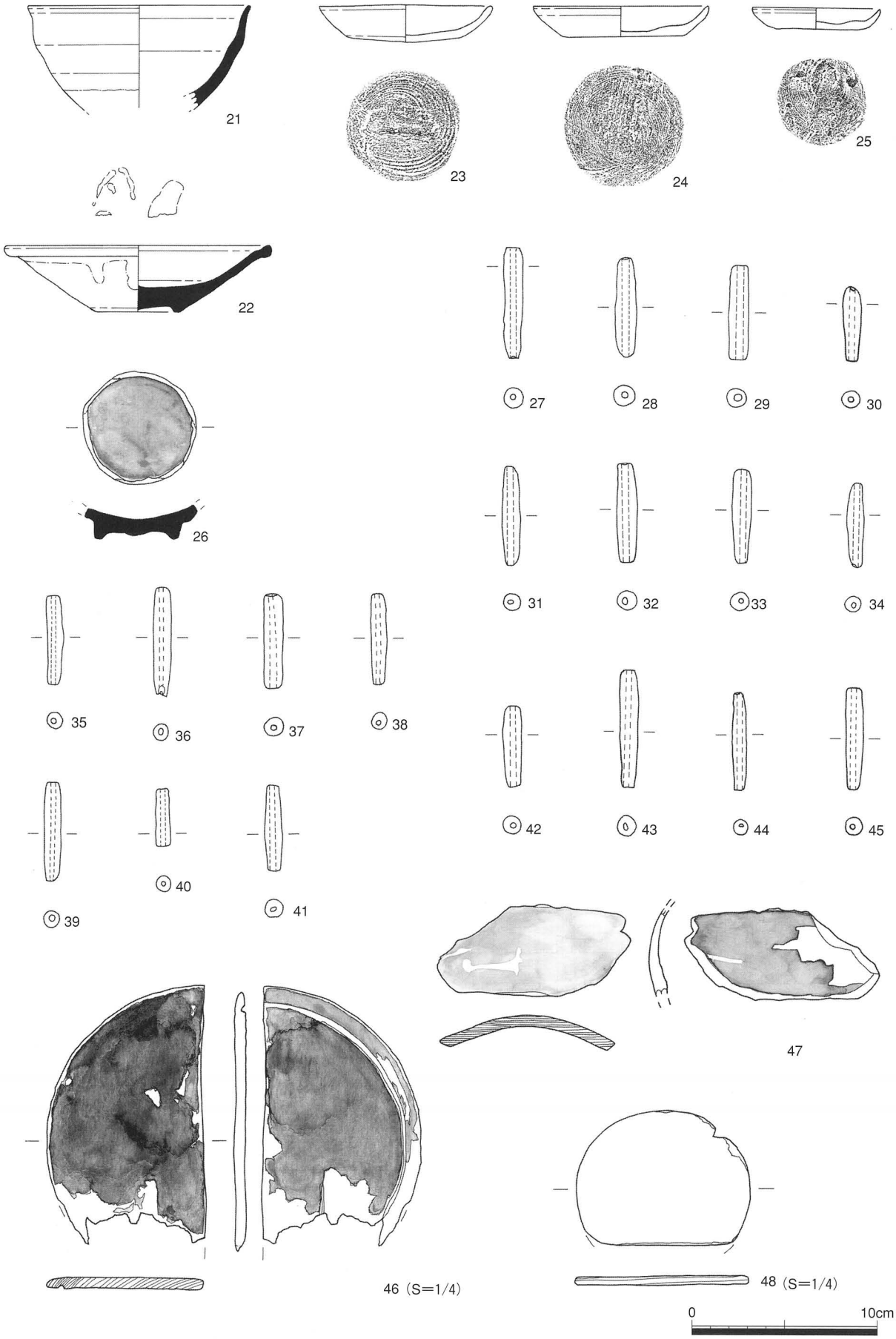
99は瀬戸美濃系の陶器碗である。高台部分を除き全体に灰釉がかけられている。100は肥前系の陶器碗である。厚い安定感のある作りで全面に緑釉がかけられ、高台畳付部分には重ね焼きの痕跡が認められる。口縁部は残っていないが、割れ口周辺には敲打痕が多数認められる。二次利用として灰落とし等に使用された可能性が高い。101は肥前唐津の溝縁皿である。高台部分を除き全体に灰釉がかけられ、内面見込部と高台には砂目痕が認められる。102はおもりの型枠である。瓦を加工している。

土坑　77（SK4077）（第45図）

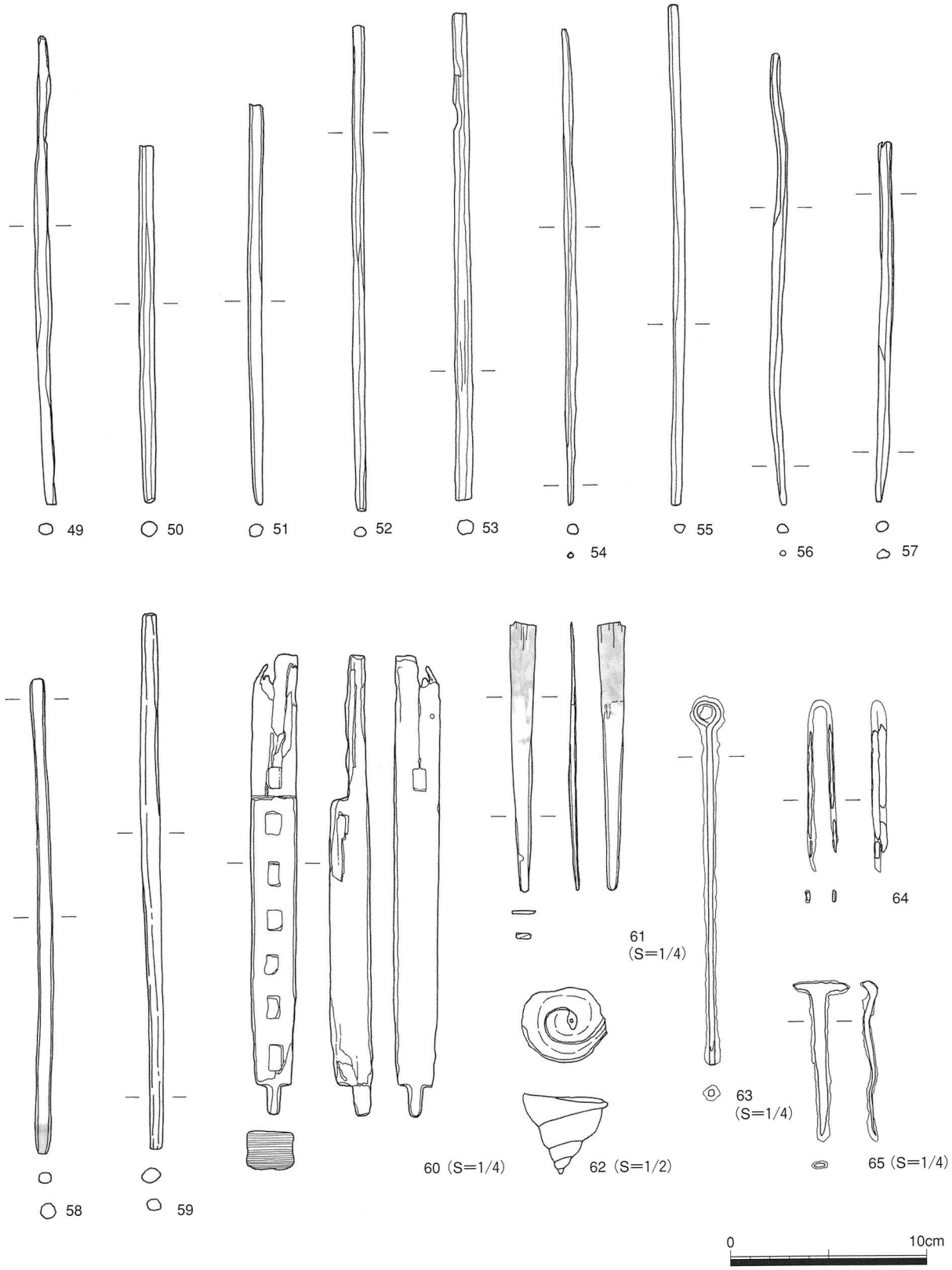
１区のＭ－４グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.9m，幅1.6mの大きさの楕円形の土坑である。皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内には焼土粒と炭化物を少量ずつ含む粘性を帯びた砂質土が堆積している。

出土遺物（第46図）

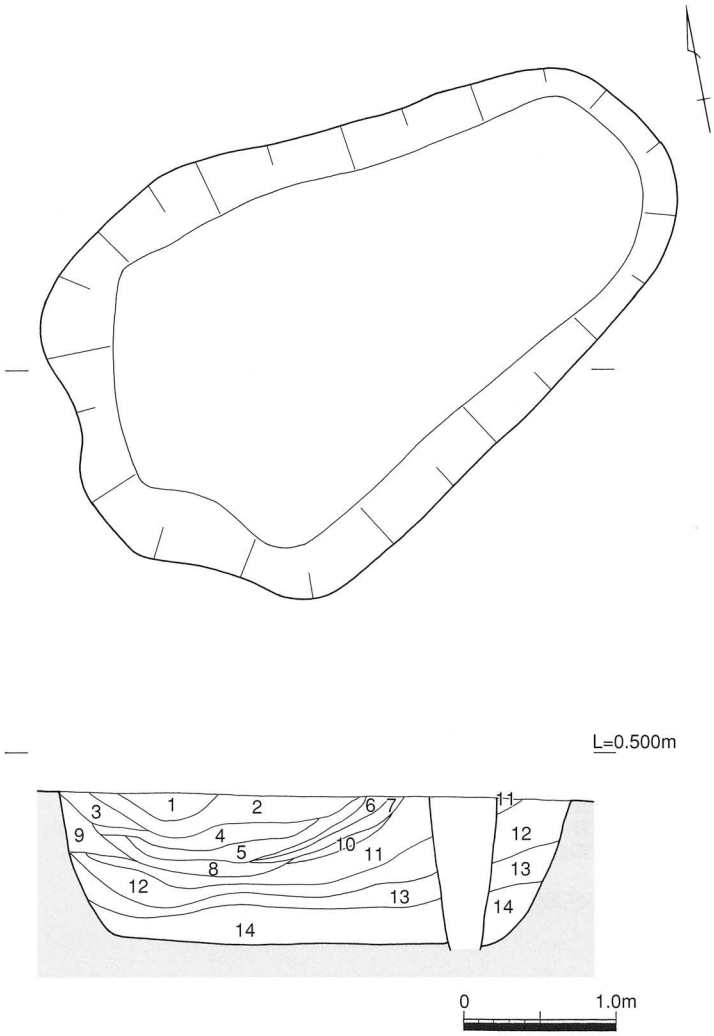
103は土師質の椀である。底部は回転ヘラ切りで、内外面とも煤が付着している。104は土師質の身の



第33図　SK4043出土遺物実測図（1）

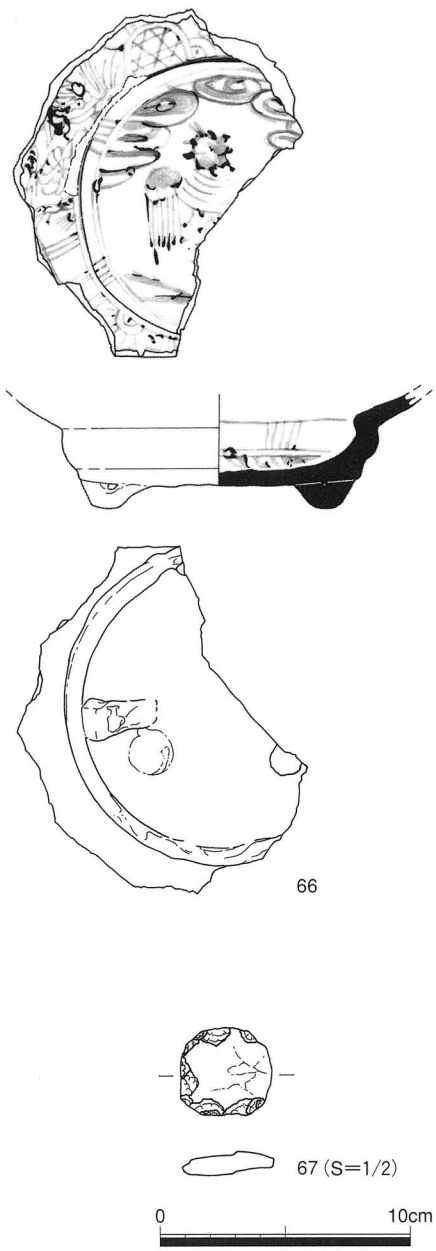


第34図　SK4043出土遺物実測図（2）



1	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2	8	黄灰色	砂質土	2.5Y4/1
2	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2	9	黄灰色	砂質土	2.5Y5/1
3	黄灰色	砂質土	2.5Y4/1	10	暗褐色	砂質土	10YR3/4
4	黒褐色	砂質土	2.5Y3/2	11	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
5	黒褐色	砂質土	2.5Y3/1	12	黄灰色	砂質土	2.5Y4/1
6	黄灰色	砂質土	2.5Y4/1	13	灰色	シルト質土	5Y4/1
7	黄灰色	砂質土	2.5Y4/1	14	灰色	シルト質土	5Y5/1

第35図　SK4044実測図



第36図　SK4044出土遺物実測図

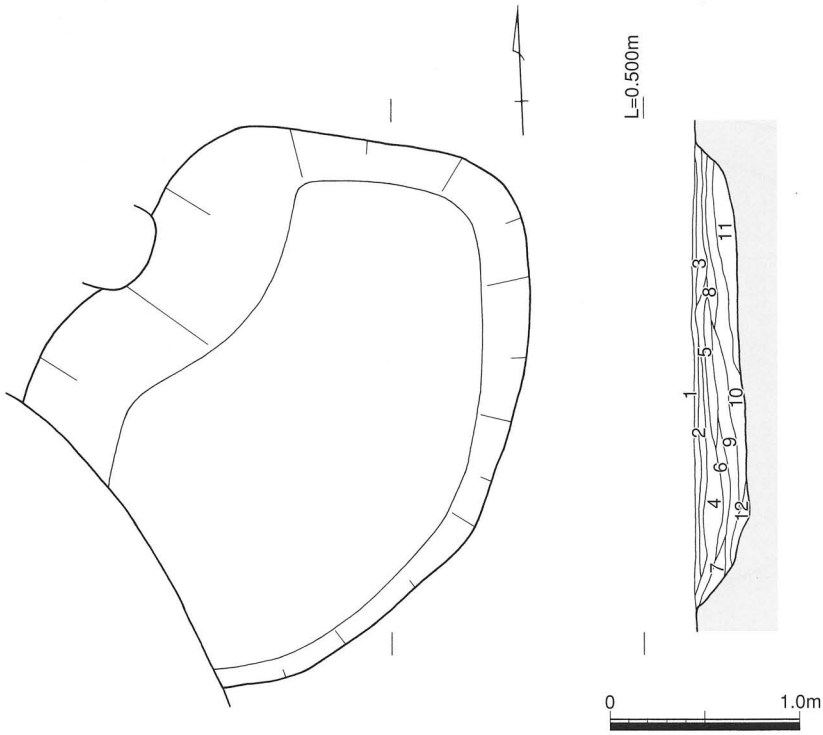
やや深い灯明皿である。底部は回転ヘラ切りで、内面には煤が付着している。105は底部の切り離しに回転ヘラ切り技法が使用されたやや身の深い土師質の灯明皿である。内外面とも煤が付着しているが特に内面はタール状になっている部分もある。106は長さ約240㎜を測る木製の箸である。

土坑　82（SK4082）（第47図）

１区のＭ－６・７グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.6m，幅1.0mの大きさの不整楕円形の遺構である。皿状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内には炭化物と焼土粒を含んだ灰オリーブ色の砂質土が堆積している。

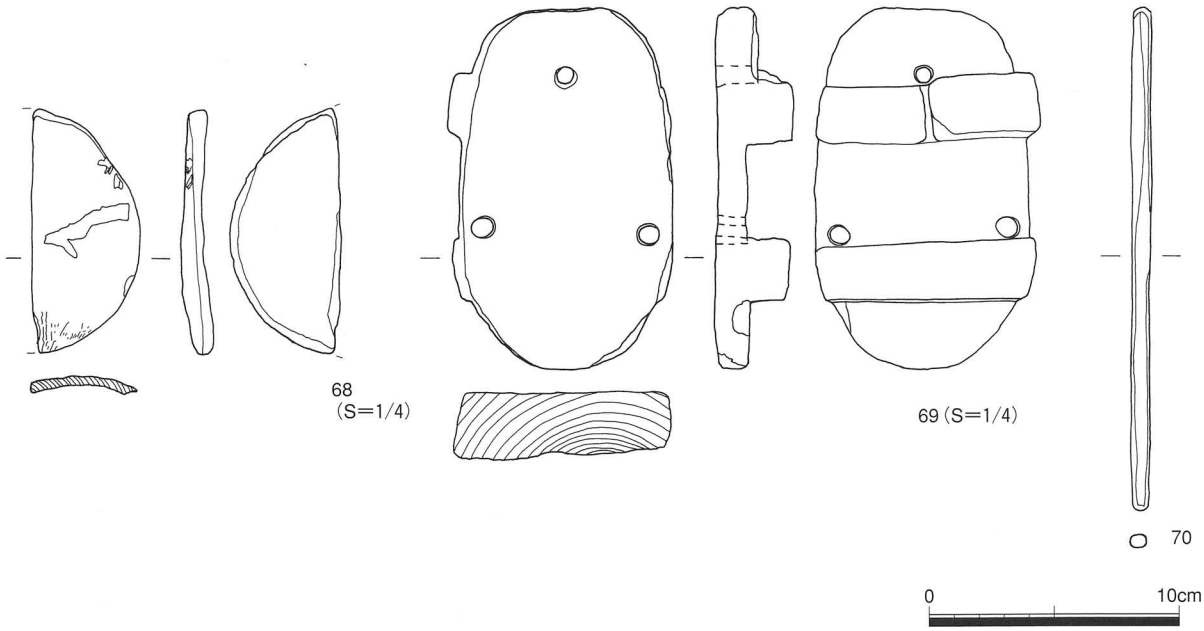
出土遺物（第48図）

107は鬼瓦である。



1	黒色	砂質土	5Y2/1	5	灰色	砂質土	10Y4/1	9	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1
2	オリーブ灰色	砂質土	2.5GY5/1	6	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1	10	灰色	砂質土	7.5Y4/1
3	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1	7	灰色	砂質土	10Y4/1	11	黒色	砂質土	5Y2/1
4	黒色	砂質土	2.5Y2/1	8	黒色	砂質土	5Y2/1	12	灰色	砂質土	10Y5/1

第37図　SK4045実測図



第38図　SK4045出土遺物実測図

土坑　83（SK4083）（第49図）

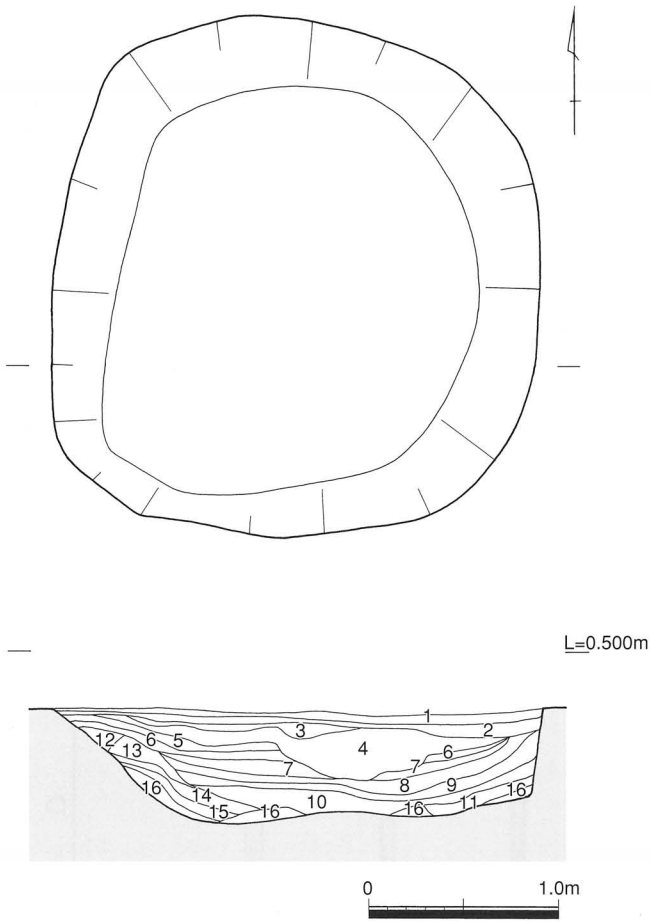
１区のＭ－７グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約2.2m，幅1.5mの大きさの不整楕円または隅丸方形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.4mの遺構の底面には不規則な凹凸が残されている。10層に分かれる遺構内の埋土は、少量の炭化物と焼土粒を含む多量の灰混じりの砂質土が堆積している。

出土遺物（第50図）

108は轆轤成形で製作された陶器製の水滴である。肩部に注口を付け、糸切りされた底部を残して全面に鉄釉がかけられている。

土坑　93（SK4093）（第51図）

１区のＭ・Ｎ－６・７グリッドにまたがって検出された長軸を東西方向にとる土坑である。遺構の南東側を他の遺構に切られているが、残された長さ約1.6m，幅1.1mの隅丸方形の土坑と考えられる。深さ約0.3mを測る遺構内には炭化物と焼土粒を含んだ灰オリーブと暗灰黄色の砂質土が堆積している。



1	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/1	9	灰色	砂質土	10Y4/1
2	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1	10	黒褐色	砂質土	10YR２/３
3	灰色	砂質土	7.5Y4/1	11	オリーブ黒色	砂質土	5Y2/2
4	黒色	砂質土	5Y2/1	12	灰オリーブ色	砂質土	7.5Y5/2
5	灰色	砂質土	7.5Y4/1	13	暗オリーブ色	砂質土	2.5GY4/1
6	黒色	砂質土	7.5Y2/1	14	黒色	砂質土	7.5Y2/1
7	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1	15	灰色	砂質土	10Y4/1
8	黒色	砂質土	7.5Y2/1	16	黒色	砂質土	5Y2/1

第39図　SK4052実測図

出土遺物（第52図）

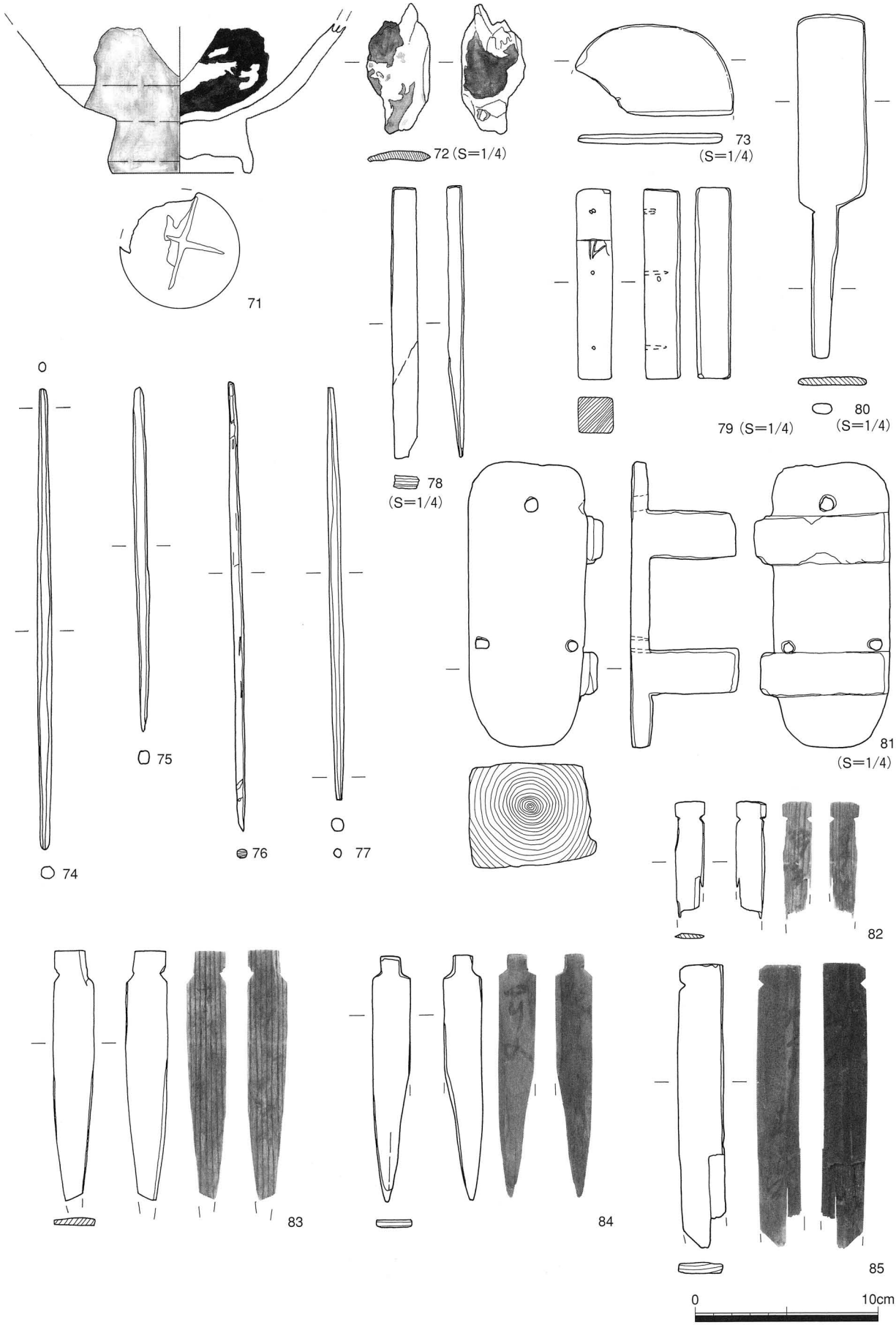
109は肥前系の陶器皿である。高台部分を除き全体に灰釉がかけられ、内面見込みには胎土目痕が４カ所認められる。

土抗100（SK4100）（第53図）

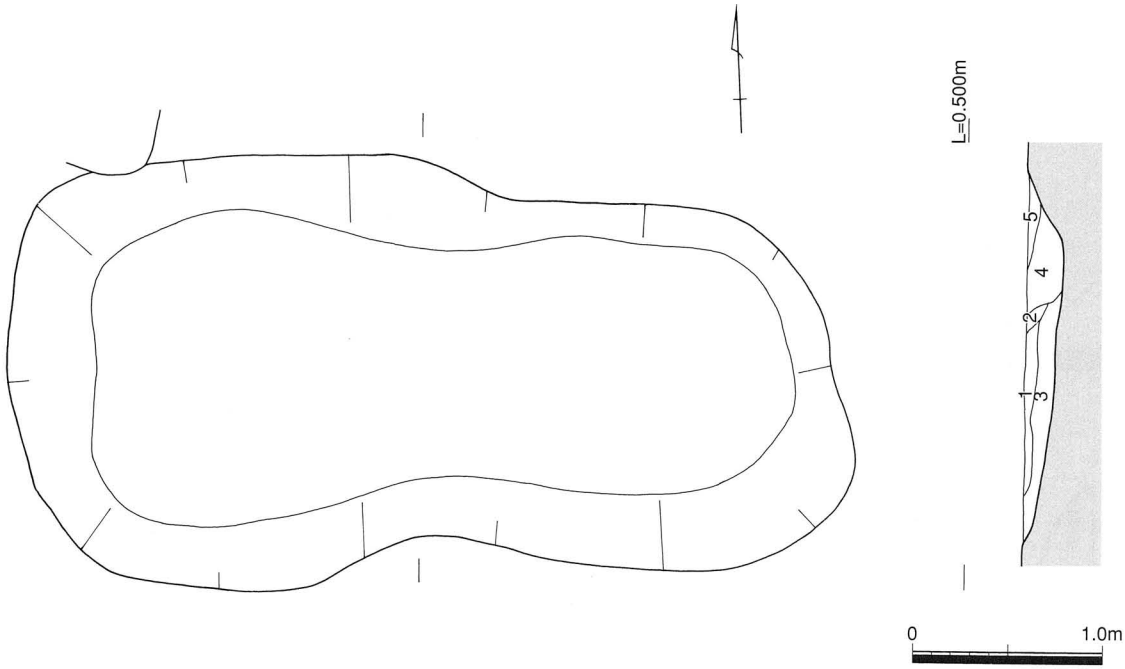
１区Ｎ－６グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ1.1m，幅0.8mの大きさの不整楕円形の土坑である。逆台形状に掘り込まれた深さ約0.6mの遺構内に堆積した灰色、または灰オリーブ色を中心とする砂質土には、何れも炭化物と焼土粒が多く含まれている。

出土遺物（第54図）

110は全体に灰釉がかけられた肥前系の陶器皿である。内面見込部半面には重ね焼きの痕跡が認められ、胎土目痕が残されている。



第40図　SK4052出土遺物実測図



1　暗オリーブ色　砂質土　5Y4/4
2　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/2
3　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/3
4　灰オリーブ色　砂質土　5Y4/2
5　灰オリーブ色　シルト質土　5Y5/3

第41図　SK4055実測図

土坑110（SK4110）（第55図）

２区のＢ・Ｃ－11グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.1m，幅0.6mの大きさの不整楕円形の土坑である。遺構の平面の大きさに対して深さは約0.3mと浅いが、遺構の掘り込みは明瞭である。２層に分かれる遺構内の埋土は下層から瓦片が多量に出土していることから、瓦の廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第56図）

111は肥前系の陶器製大鉢である。内面には鉄釉と白泥により刷毛目文様が描かれている。

土坑111（SK4111）（第57図）

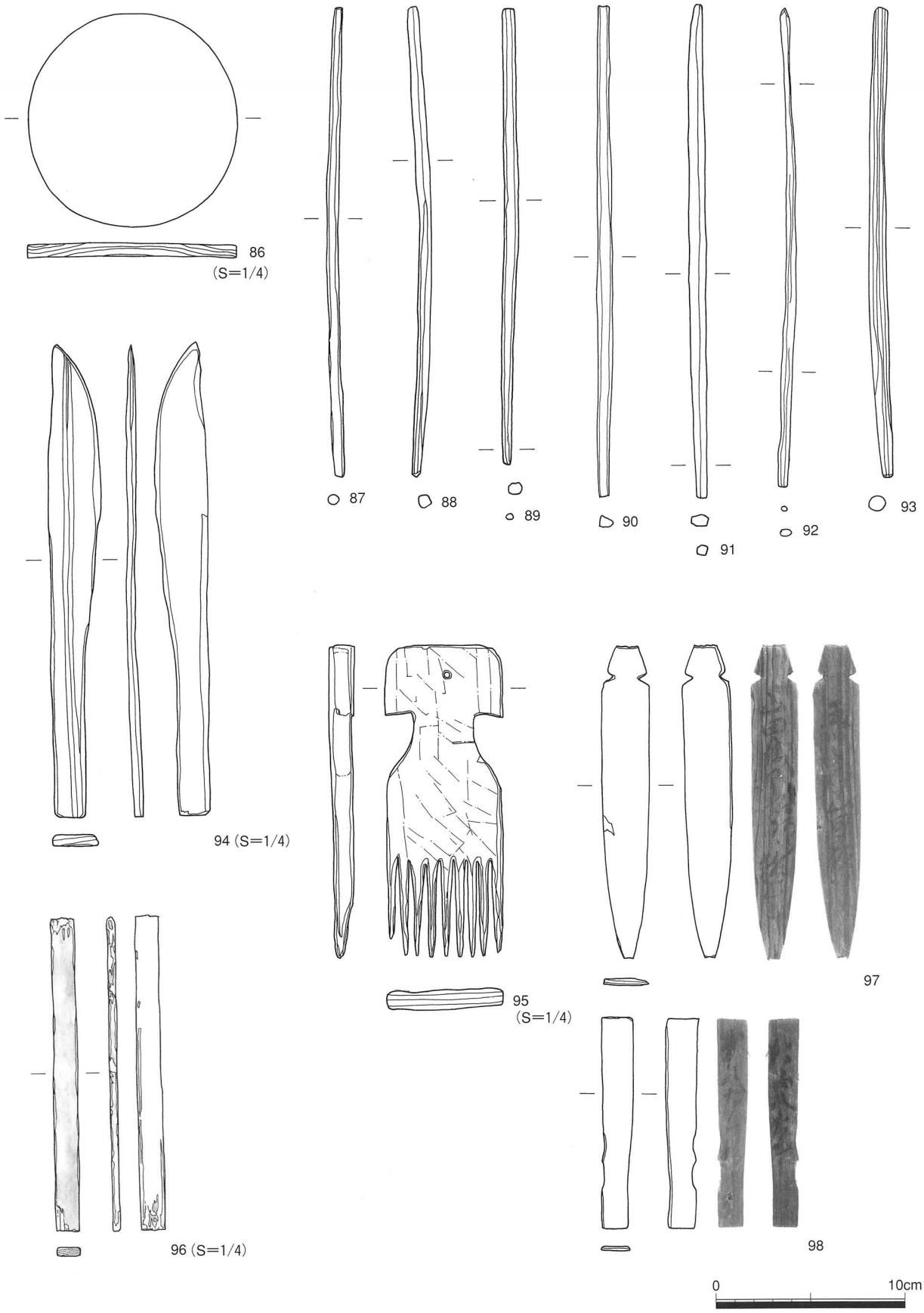
２区のＢ・Ｃ－11グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約1.8m，幅0.9mの大きさの不整楕円形の土坑である。断面が逆台形状に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内に堆積した第３層には炭化物の他に礫や陶磁器片、瓦片が多く含まれている。

出土遺物（第58図）

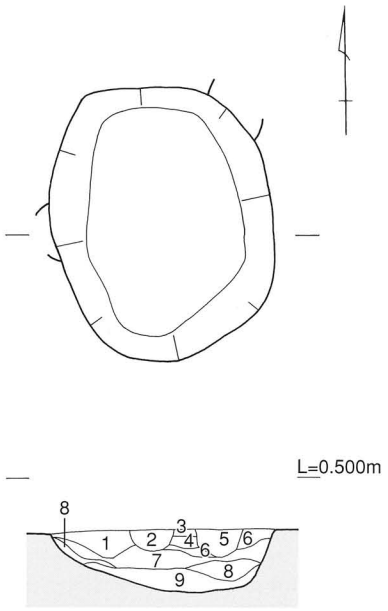
112は体部外面に鉄釉がかけられた関西系の陶器壺である。

土坑113（SK4113）（第59図）

２区のＣ－11グリッドから検出された長軸を東西方向にとる長さ約1.6m，幅0.9mの大きさの不整形な形の遺構である。皿状に掘り込まれた深さ約0.3mの遺構の埋土中には焼土塊や瓦片、礫などが混入している。

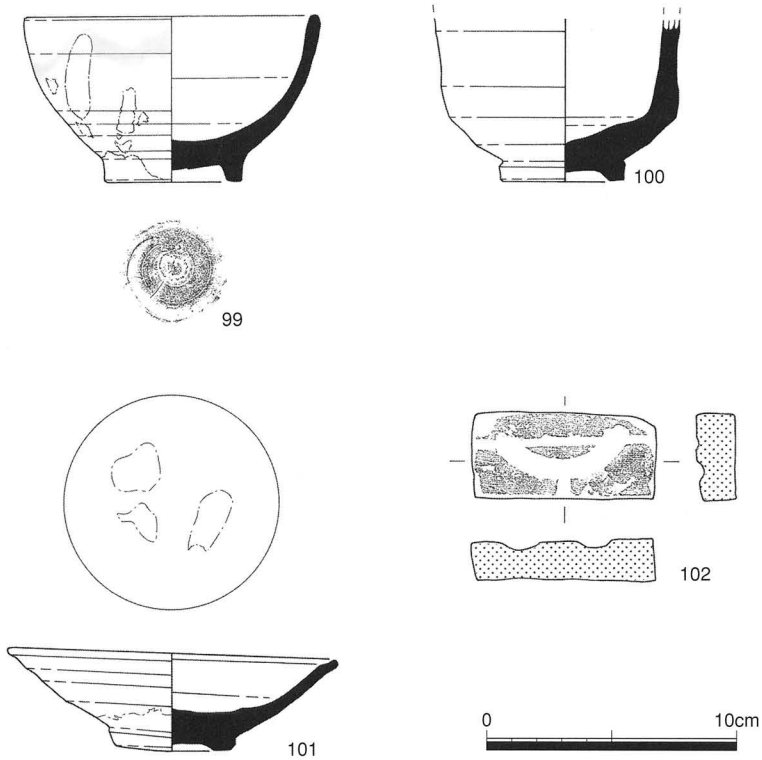


第42図　SK4055出土遺物実測図

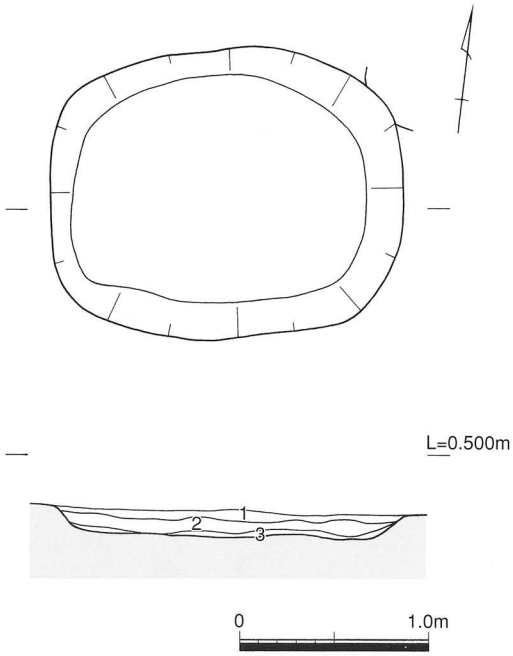


1　暗オリーブ色　砂質土　5Y4/4
2　暗オリーブ色　砂質土　5Y4/3
3　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/3
4　黄褐色　砂質土　2.5Y5/4
5　暗灰黄色　砂質土　2.5Y4/2
6　オリーブ褐色　砂質土　2.5Y4/3
7　灰オリーブ色　砂質土　5Y4/2
8　暗灰黄色　砂質土　2.5Y4/2
9　暗オリーブ褐色　砂質土　2.5Y3/3

第43図　SK4063実測図

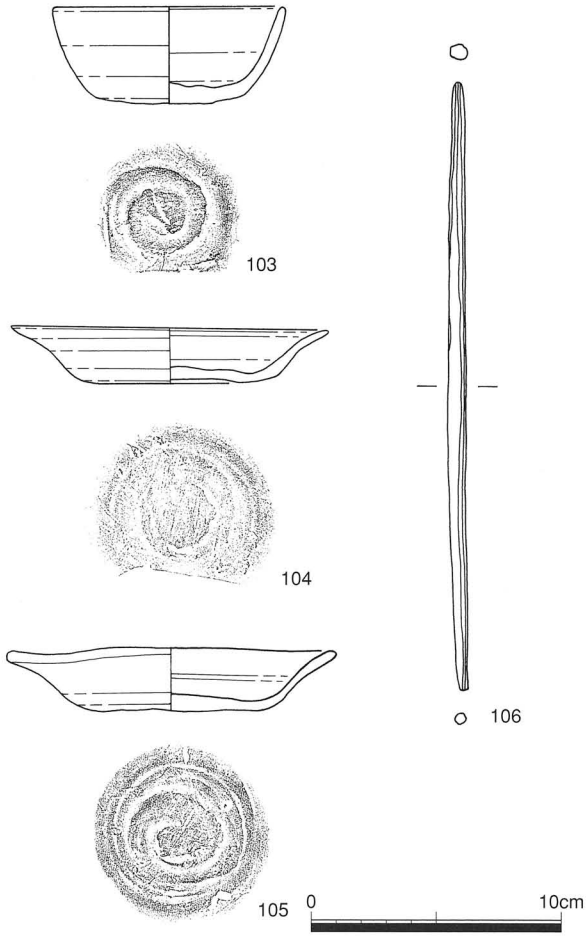


第44図　SK4063出土遺物実測図

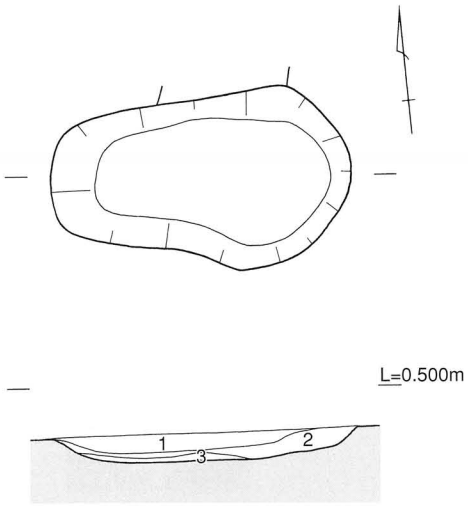


1　灰オリーブ色　砂質土　SY4/2
2　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/2
3　灰色　砂質土　7.5Y5/1

第45図　SK4077実測図



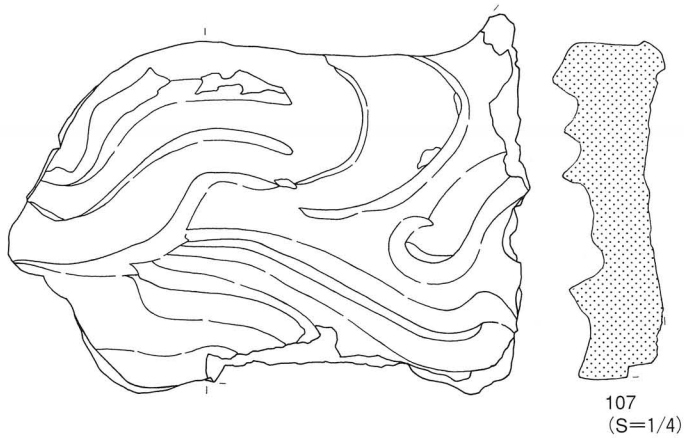
第46図　SK4077出土遺物実測図



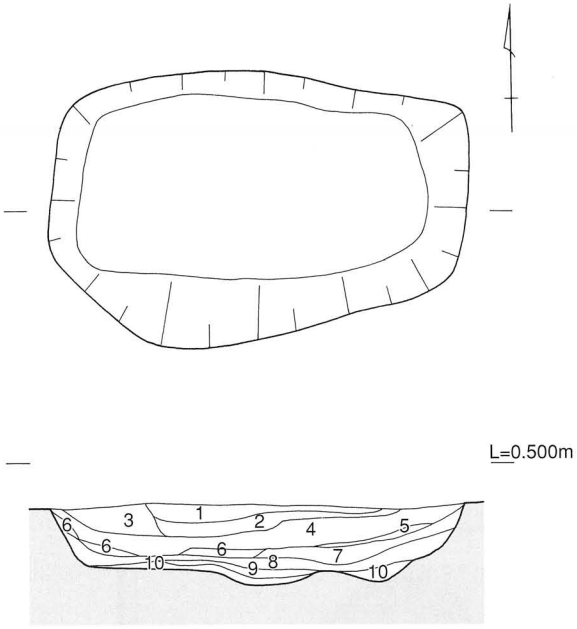
1　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/2
2　灰オリーブ色　砂質土　5Y4/2
3　灰色　砂質土　5Y4/1

0　0.5m

第47図　SK4082実測図



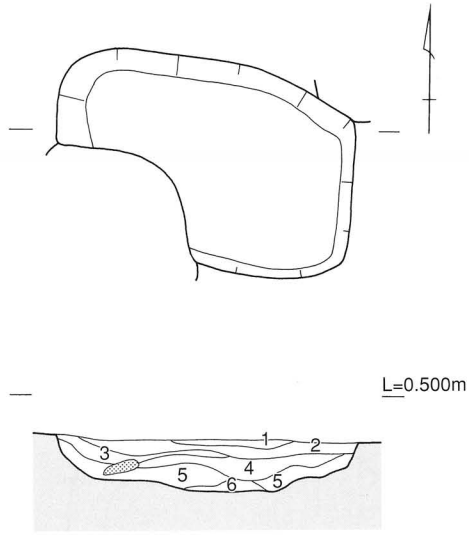
第48図　SK4082出土遺物実測図



0　1.0m

1　暗オリーブ色　砂質土　5Y4/3
2　黒色　砂質土　2.5Y2/1
3　灰オリーブ色　砂質土　5Y4/2
4　黒褐色　砂質土　2.5Y3/1
5　黒色　砂質土　2.5Y2/1
6　黄灰色　砂質土　2.5Y4/1
7　黒褐色　砂質土　10YR3/2
8　黒色　砂質土　2.5Y2/1
9　黒褐色　砂質土　2.5Y3/1
10　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/1

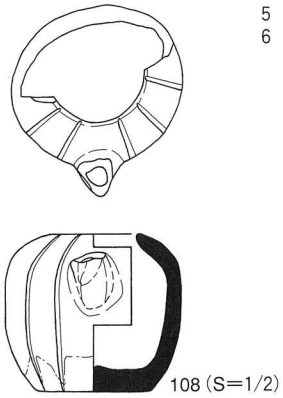
第49図　SK4083実測図



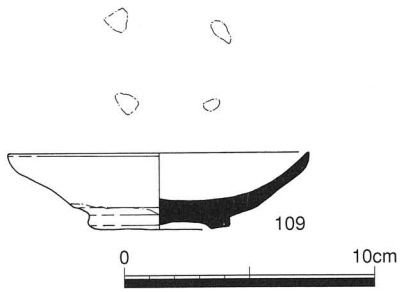
0　0.5m

1　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/2
2　灰オリーブ色　砂質土　5Y4/2
3　暗灰黄色　砂質土　2.5Y4/2
4　暗灰黄色　砂質土　2.5Y5/2
5　暗灰黄色　砂質土　2.5Y4/2
6　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/3

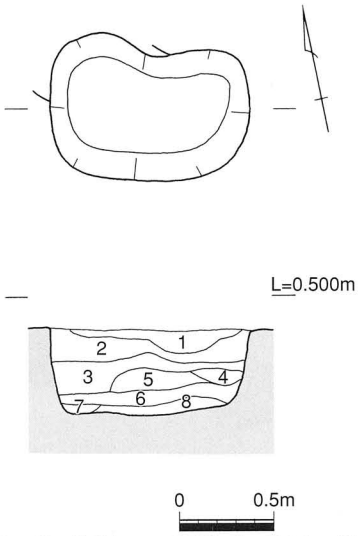
第51図　SK4093実測図



第50図　SK4083出土遺物実測図

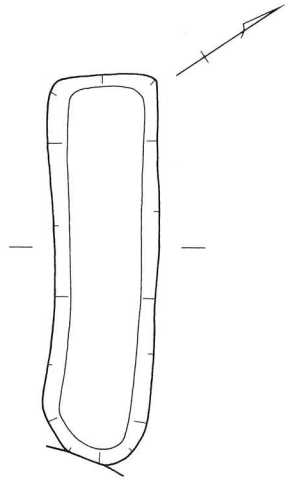


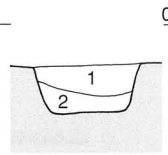
第52図　SK4093出土遺物実測図



1	暗オリーブ色	砂質土	5Y4/3	5	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
2	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3	6	灰色	シルト質土	5Y4/1
3	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2	7	灰色	シルト質土	5Y6/1
4	オリーブ色	シルト質土	5Y5/4	8	黄灰色	砂質土	2.5Y5/1

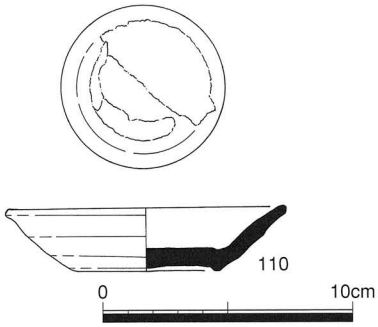
第53図　SK4100実測図



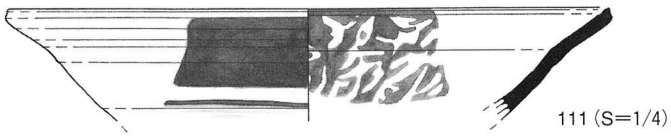


1	暗灰黄色	砂質土	2.5Y5/2
2	灰色	シルト質土	5Y5/1

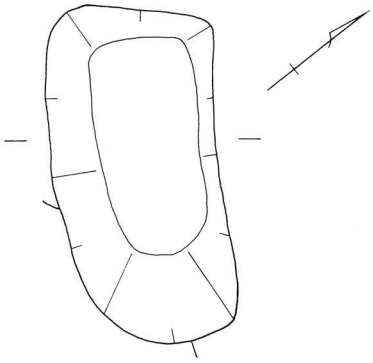
第55図　SK4110実測図

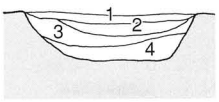


第54図　SK4100出土遺物実測図



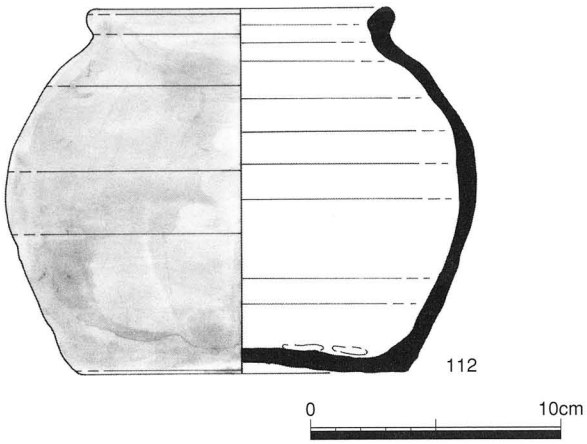
第56図　SK4110出土遺物実測図



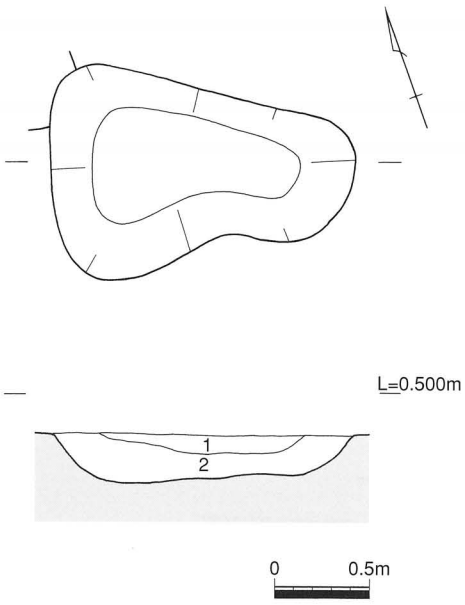


1	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
2	灰オリーブ色	シルト質土	5Y4/2
3	オリーブ黒色	シルト質土	5Y3/1
4	オリーブ黒色	シルト質土	5Y3/2

第57図　SK4111実測図

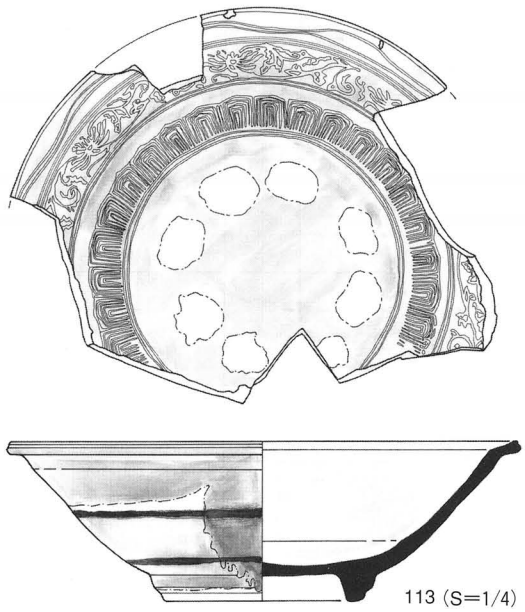


第58図　SK4111出土遺物実測図

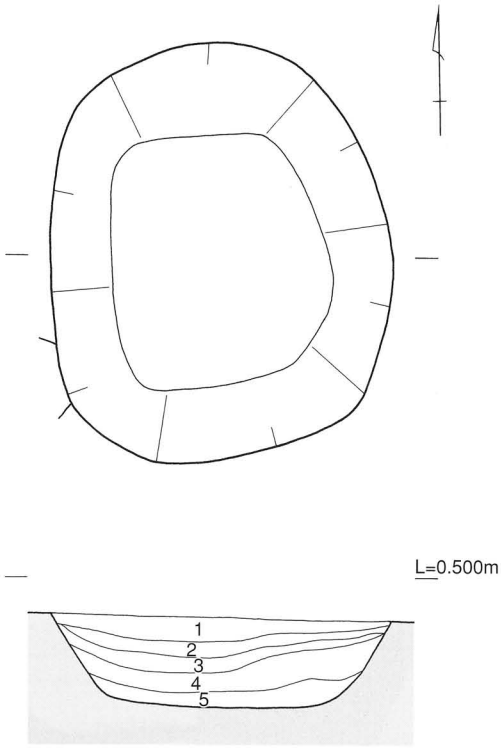


1　灰色　　砂質土　5Y4/1
2　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/2

第59図　SK4113実測図

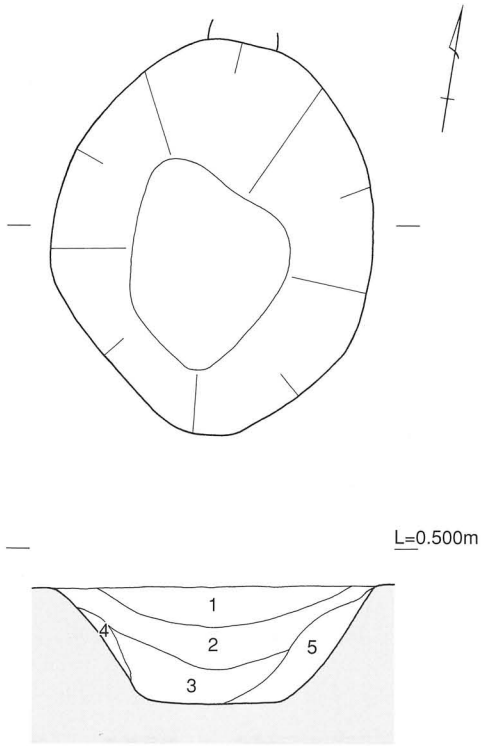


第60図　SK4113出土遺物実測図



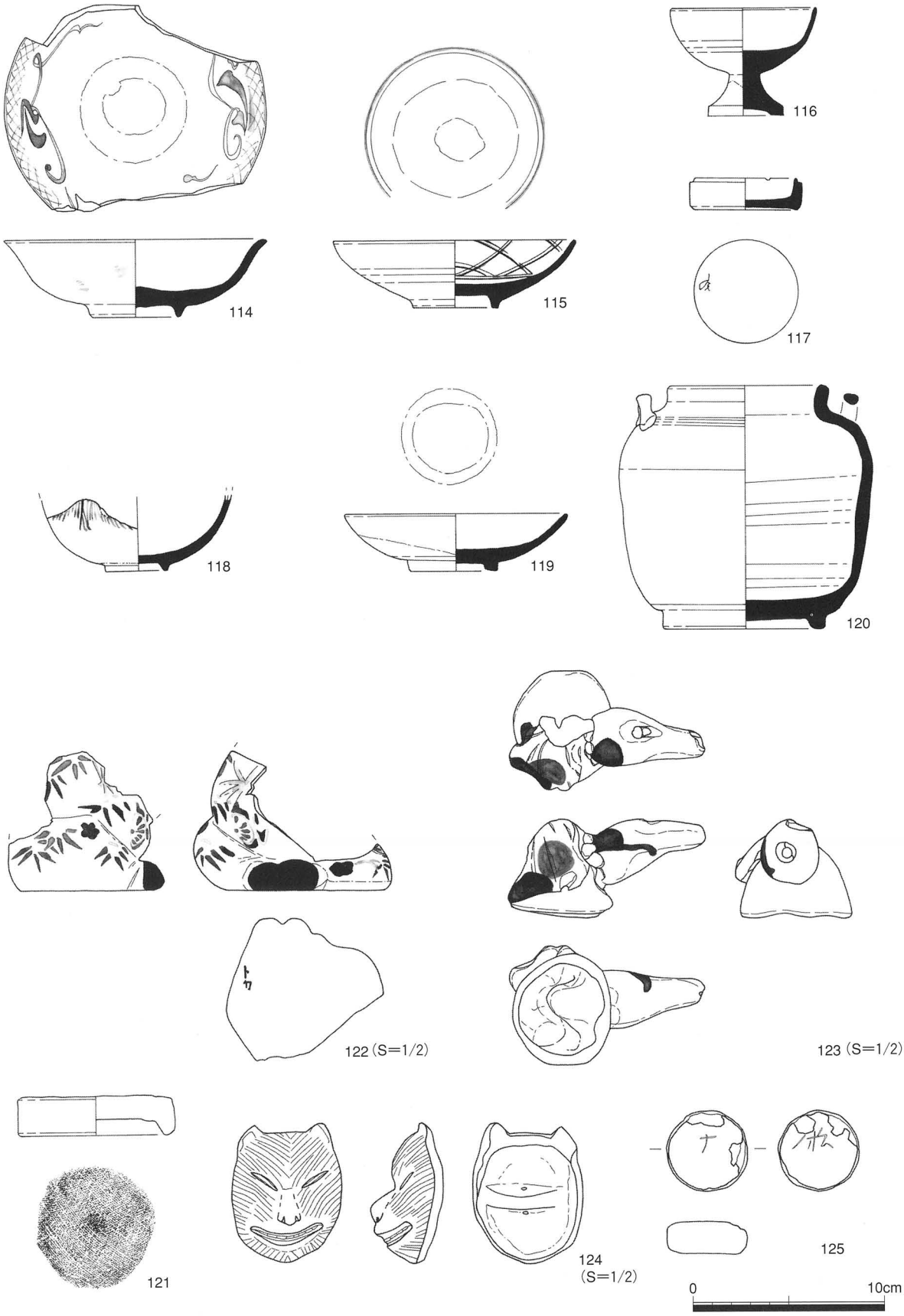
1　暗オリーブ褐色　砂質土　2.5Y3/3
2　黒褐色　　砂質土　2.5Y3/2
3　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/2
4　灰色　　砂質土　5Y4/1
5　オリーブ黒色　砂質土　7.5Y3/1

第61図　SK4116実測図

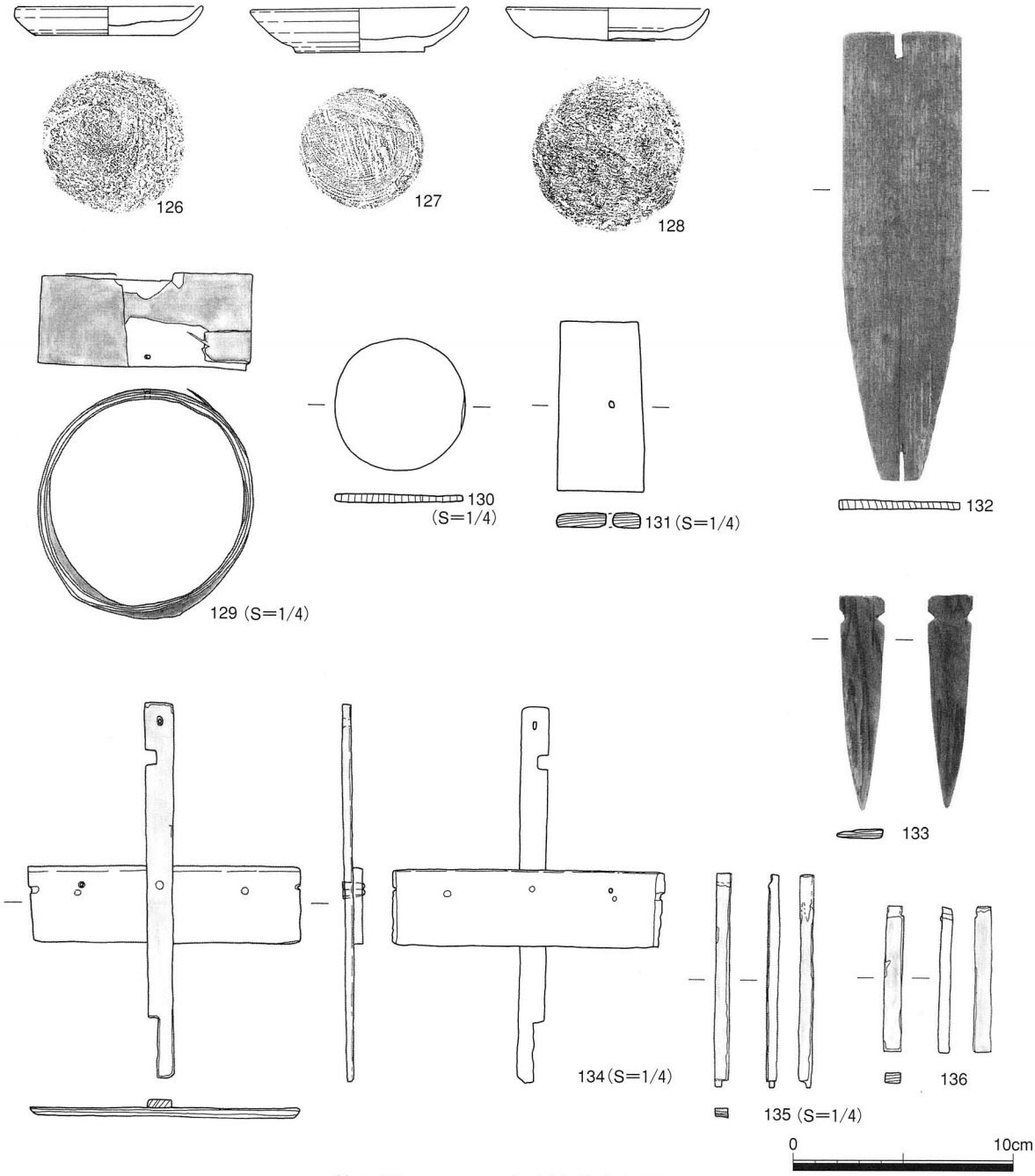


1　黒褐色　　砂質土　2.5Y3/2
2　黒褐色　　シルト質土　2.5Y3/1
3　黒褐色　　シルト質土　2.5Y3/1
4　灰色　　シルト質土　10Y5/1
5　オリーブ黄色　シルト質土　5Y6/3

第62図　SK4149実測図



第63図　SK4116出土遺物実測図



第64図　SK4149出土遺物実測図

出土遺物（第60図）

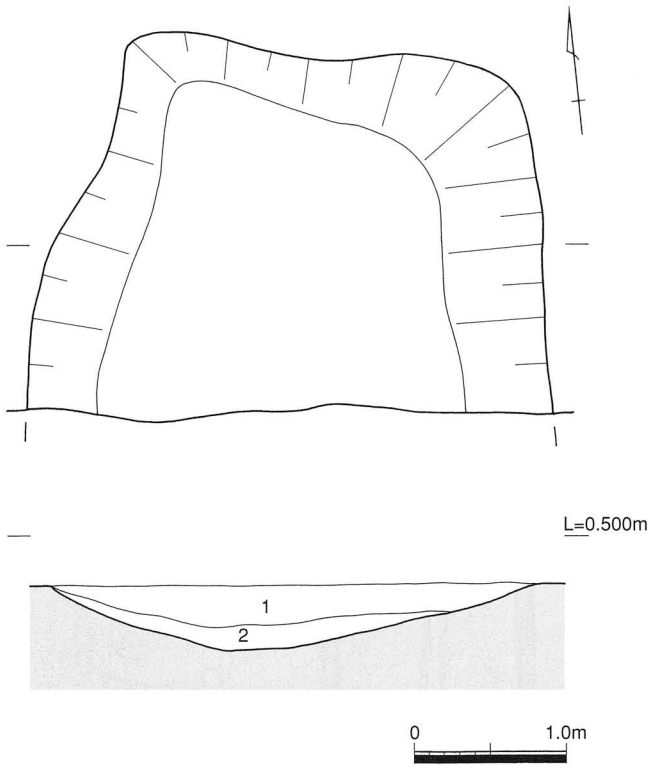
113はいわゆる「三島手」とよばれる象嵌装飾が施された唐津の鉢である。内面見込部には砂目痕が８カ所残されている。外面は部分的に露胎のところもあるが、口縁から高台付近までは鉄釉がかけられている。

土坑116（SK4116）（第61図）

２区のＢ・Ｃ－12・13グリッドにまたがって検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.2m，幅1.8m，深さ0.5mの大きさの楕円形の遺構である。５層に分かれる遺構内の埋土は、各層毎に焼土粒や炭化物、木片、礫、瓦片、貝殻などを含み、特に最下層の５層からの出土が著しい。廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第62図）

114は肥前系の磁器皿である。口縁部内面には襷文と蔓草が描かれている。内外面とも全面に釉がかけられているが、内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが行われ、高台畳付部分の釉も剥ぎ取られている。115は肥前系の磁器皿である。内外面とも全面に釉がかけられ、内面には緑釉で斜格子が描かれている。内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが行われている。116は肥前系の磁器製仏飯器である。全体に透明釉がかけられているが高台部分は露胎のまま残されている。117は京信楽系の陶器製の合子の身である。口縁部には煤が付着している。底部外面は露胎で墨書があるが判読できない。118は京信楽系の注連縄文陶器茶碗である。外面には僅かしか文様が見えないが、上絵による注連縄文が残されている。高台部分は露胎のままである。119は肥前系の陶器皿である。内面は青緑釉を施釉後透明釉がかけられ、見込部には蛇ノ目釉剥ぎが施されている。120は瀬戸美濃系の陶器製二耳壺である。外面は灰釉が高台付近までかけられている。121は土師質の焼塩壺の蓋で、内面には布目痕が鮮明に残っている。122は型作り貼合せ成形で制作され、金、赤、緑等の上絵付が施された肥前系の陶器人形である。底部には「トカ」の墨書がある。123は土師質の笛である。上部に人形が乗っていた痕跡が残され、部分的ではあるが緑釉、鉄釉、透明釉がそれぞれかけられている。124は型作り成形で製作された陶器製の狐の面である。ほぼ全面に灰釉がかけられているが、一部に緑釉の部分がある。裏が穿孔されている。125は瓦質の加工円盤である。両面に釘彫りによる文字があるが、判読は不明である。



1　オリーブ黒色　砂質土　5Y3/2
2　灰色　シルト質土　5Y5/1

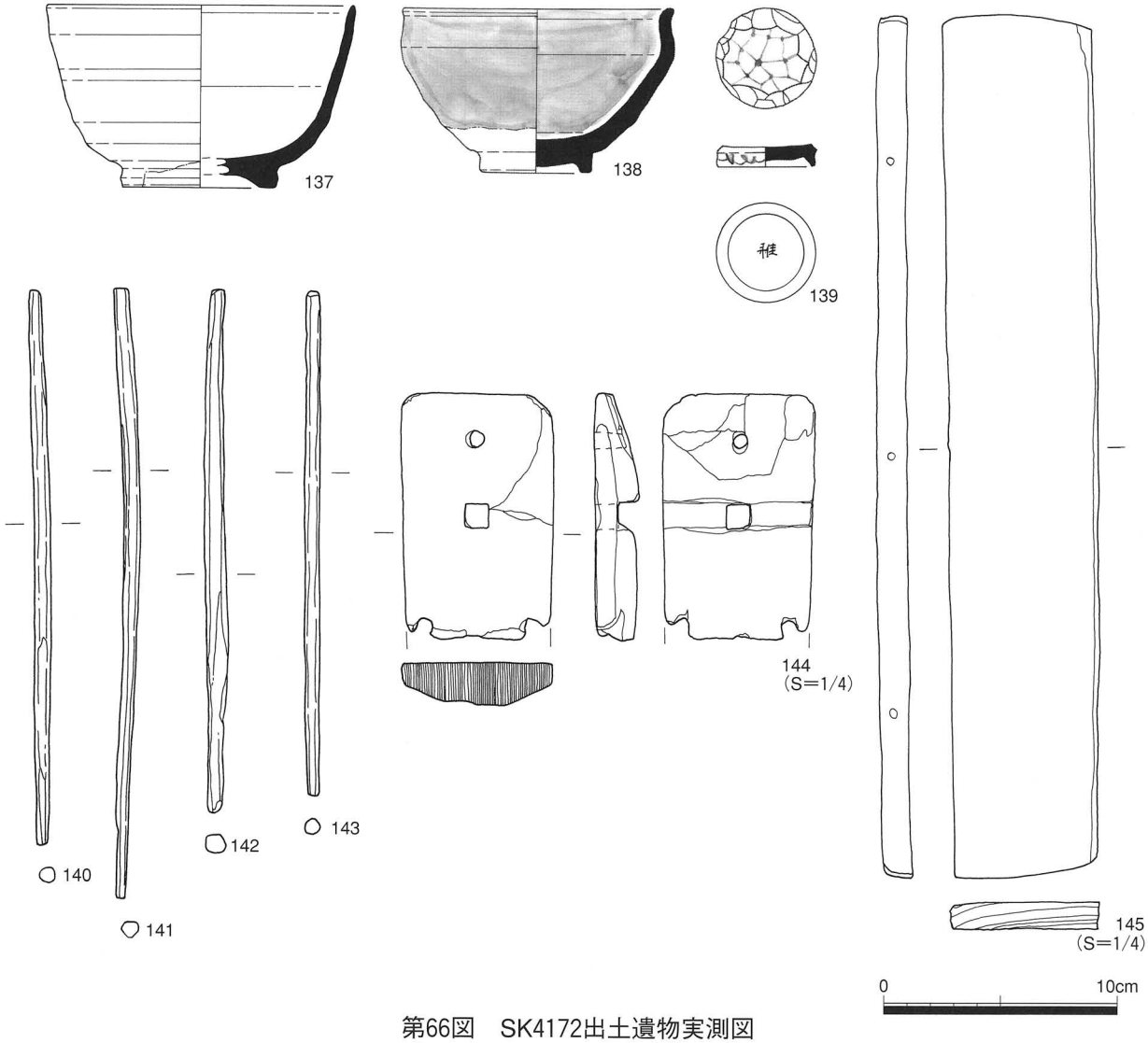
第65図　SK4172実測図

土坑149（SK4149）（第63図）

３区のJ－13グリッドから検出された長軸を南北方向にとる長さ約2.1m，幅1.2m，深さ0.6mの大きさの楕円形の土坑である。遺構内に堆積したシルト質土の中には炭化物や焼土粒とともに礫や木製品、木片などが多く含まれていることから廃棄土坑と考えられる。

出土遺物（第64図）

126は口径84㎜の土師質の皿である。127は土師質の灯明皿である。底部には高台が貼付けられ、回転糸切り痕が残されている。口縁にはタール状の煤が付着している。128は土師質の灯明皿である。底部外面には回転糸切り痕が残されている。口縁には煤が付着している。129は内外面に黒漆が塗られた木製の曲物である。130は木製の曲物の蓋である。131は用途不明の加工木片である。１カ所に穿孔がある。



第66図　SK4172出土遺物実測図

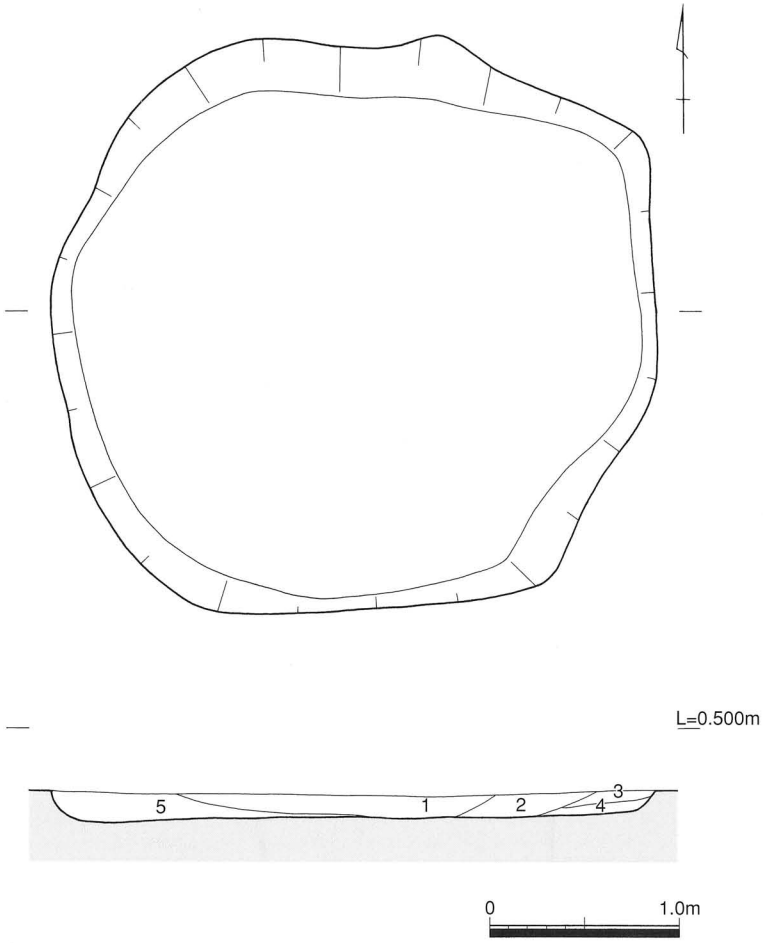
132は木簡である。（鑑札）文字は確認できない。133は木簡である。文字は見られない。134は黒漆が塗装された用途不明の加工木製品で、穿孔が数カ所に見える。135・136は同一個体である。どちらも黒漆が塗装された用途不明の加工木製品である。

土坑172（SK4172）（第65図）

３区のＬ－11グリッドで検出された長軸を南北方向にとる遺構である。遺構の南側を大きく削平されているため正確な形や大きさは不明だが、残された部分は東西約3.3m、南北2.3m 程の大きさで長方形に近い形をしている。浅い皿状に掘り込まれた深さ約0.4m の遺構の埋土中からは多量の塊状の炭化物や焼土とともに陶磁器や土師質土器、瓦の破片の他に木片などが多く出土していることから廃棄土坑と考えられる。

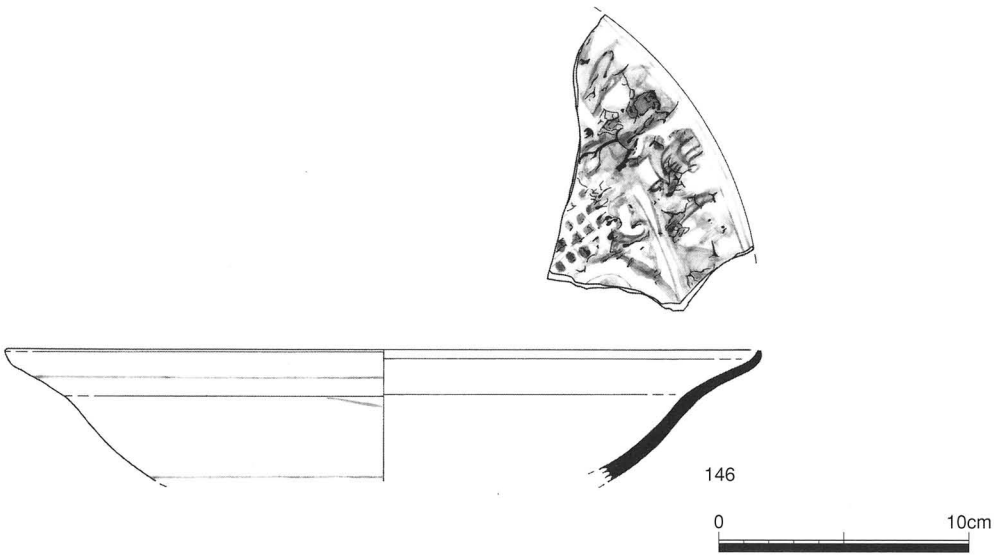
出土遺物（第66図）

137は瀬戸美濃系の陶器碗である。高台部分を残し灰釉がかけられている。138は瀬戸美濃系の陶器製天目茶碗である。胎土は灰色を呈し体部の外面下半部を除き全体に黒褐色の鉄釉がかけられている。削り出し高台である。139は磁器の高台部分の再加工品と思われる加工円盤である。径42㎜を測り、１面

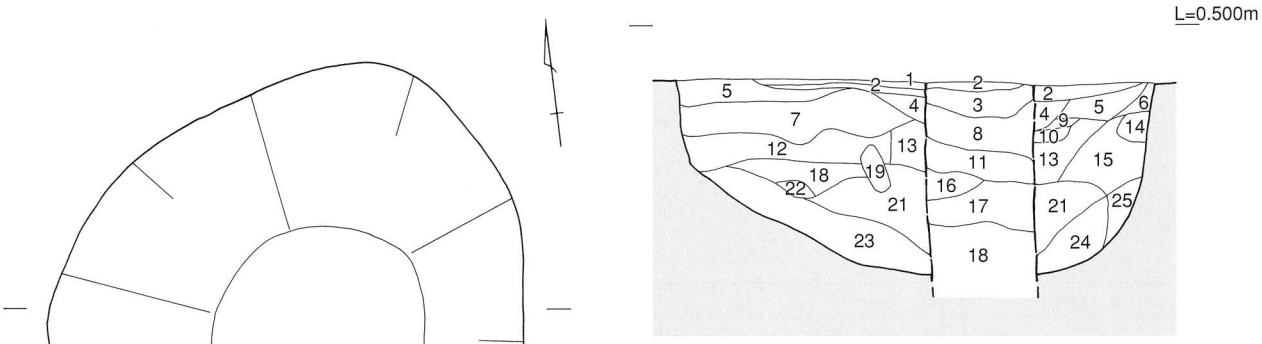


1　暗オリーブ色　砂質土　5Y4/3
2　灰オリーブ色　砂質土　5Y4/2
3　灰オリーブ色　砂質土　5Y5/3
4　灰オリーブ色　砂質土　5Y6/2
5　灰色　　砂質土　5Y6/1

第67図　SK4186実測図

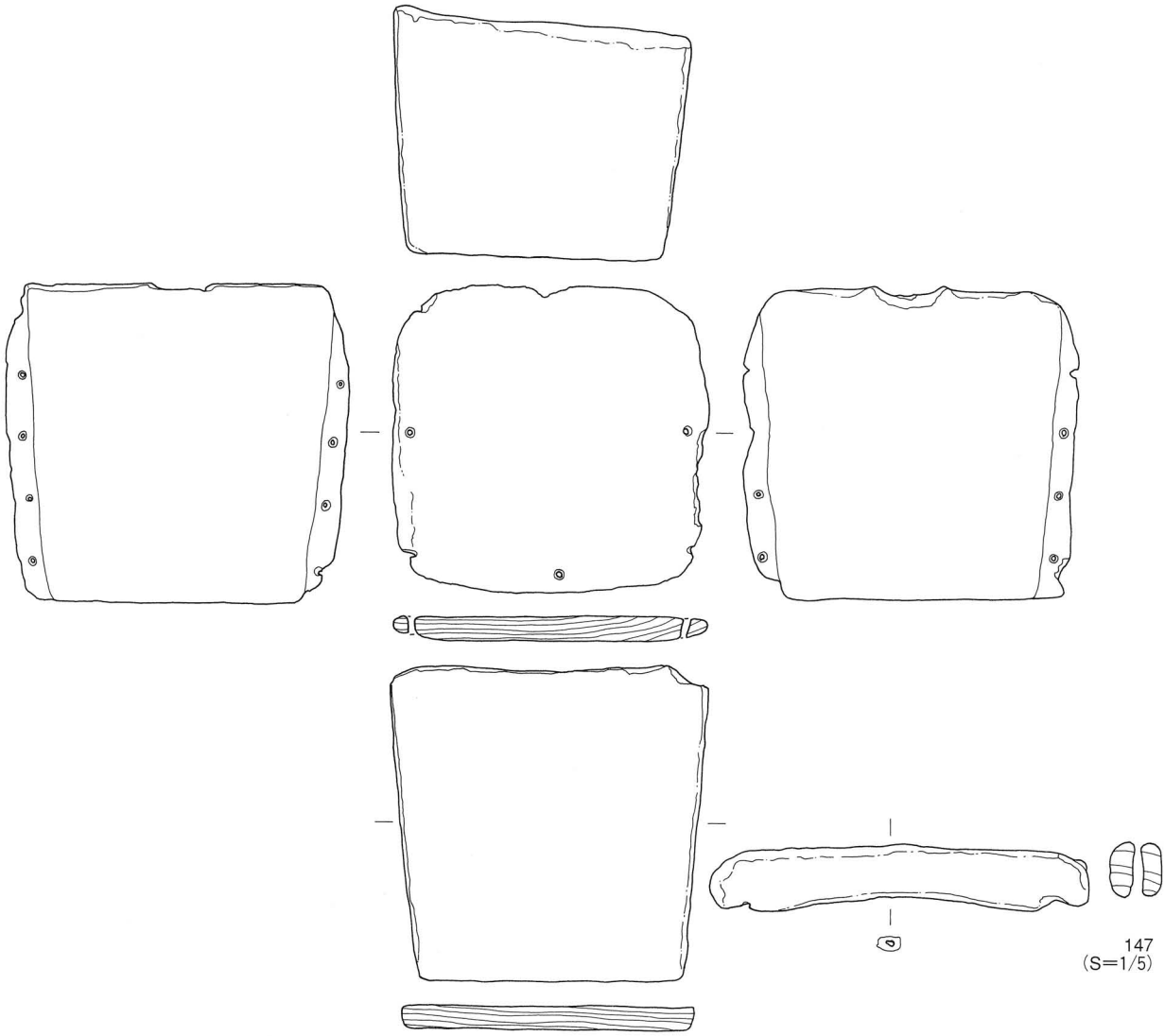


第68図　SK4186出土遺物実測図

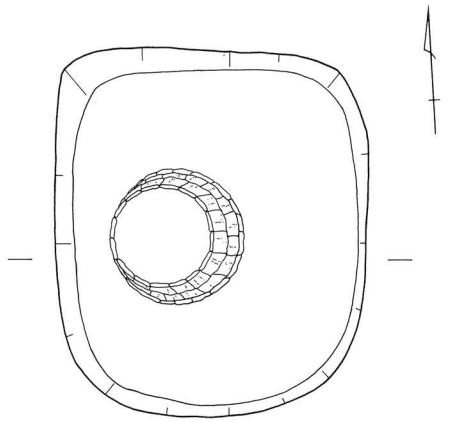


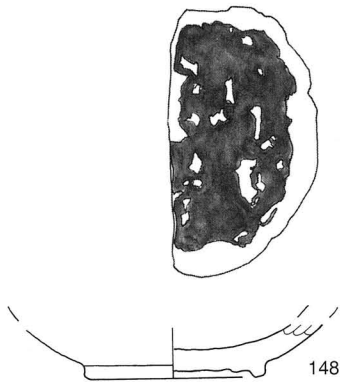
1	にぶい黄色	シルト質土	2.5Y6/4				
2	にぶい黄色	砂質土	2.5Y6/3				
3	にぶい黄色	砂質土	2.5Y6/4				
4	にぶい黄色	砂質土	2.5Y6/4	15	黄褐色	砂質土	2.5Y5/6
5	オリーブ黄色	シルト質土	5Y6/3	16	灰オリーブ色	砂質土	7.5Y4/2
6	にぶい黄色	砂質土	2.5Y6/4	17	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3
7	にぶい黄色	砂質土	2.5Y6/3	18	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
8	暗オリーブ色	砂質土	5Y4/4	19	灰オリーブ色	砂質土	7.5Y5/2
9	灰オリーブ色	砂質土	5Y6/2	20	オリーブ黄色	シルト質土	7.5Y6/3
10	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3	21	灰オリーブ色	砂質土	7.5Y4/2
11	灰黄褐色	シルト質土	10YR4/2	22	灰色	砂質土	10Y4/1
12	オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/6	23	暗オリーブ色	砂質土	5Y4/3
13	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2	24	灰色	砂質土	10Y4/1
14	にぶい黄色	砂質土	2.5Y6/3	25	暗オリーブ色	砂質土	5Y4/3

第69図　SE4001実測図

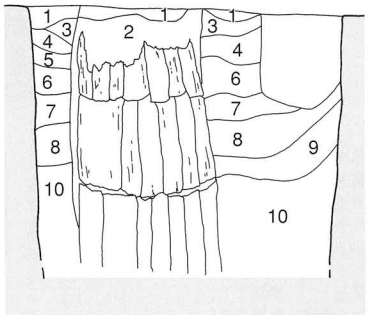


第70図　SE4001出土遺物実測図





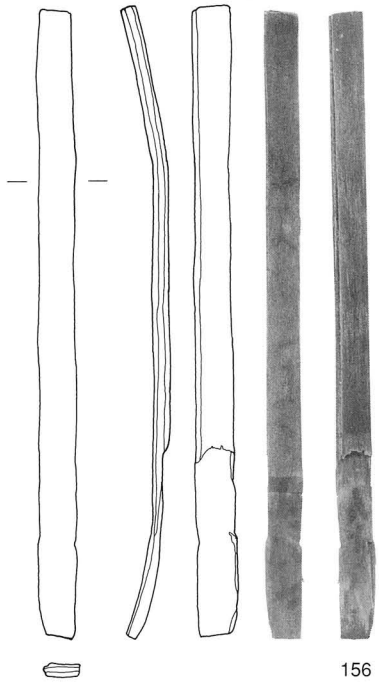
L=0.500m

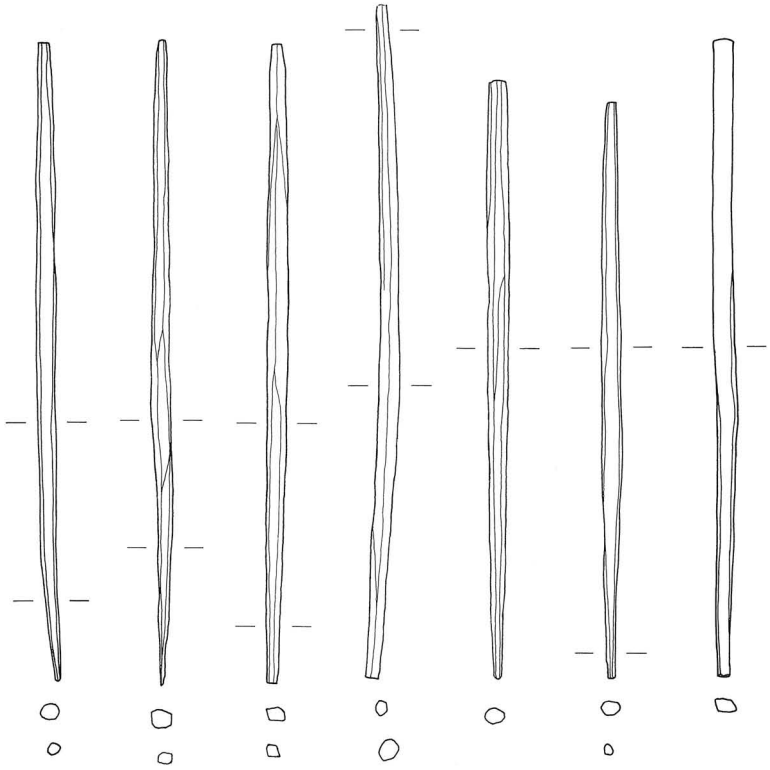


1	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3
2	灰オリーブ色	砂質土	5Y6/2
3	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
4	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3
5	灰色	砂質土	7.5Y5/1
6	オリーブ灰色	シルト質土	10Y6/2
7	灰色	シルト質土	10Y5/1
8	オリーブ灰色	砂質土	5GY5/1
9	オリーブ灰色	シルト質土	10Y5/2
10	灰色	シルト質土	7.5Y4/1

第71図　SE4003実測図

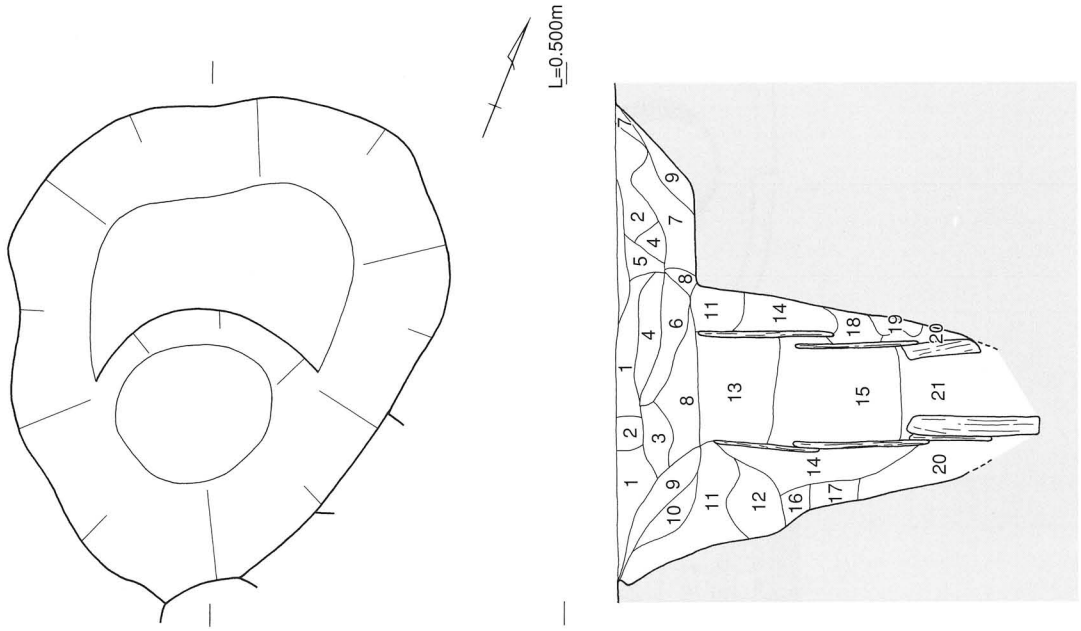
0　1.0m





0　10cm

第72図　SE4003出土遺物実測図



1	灰色	砂質土	5Y6/1	9	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/3	17	灰色	シルト質土	10Y4/1
2	灰オリーブ色	シルト質土	5Y6/2	10	灰色	砂質土	5Y4/1	18	灰色	シルト質土	10Y5/1
3	黄褐色	砂質土	2.5Y5/4	11	黄灰色	砂質土	2.5Y5/1	19	灰色	シルト質土	5Y4/1
4	灰オリーブ色	砂質土	5Y6/2	12	オリーブ黒色	シルト質土	10Y5/1	20	灰色	シルト質土	10Y5/1
5	灰色	砂質土	5Y4/1	13	黄褐色	シルト質土	2.5Y5/3	21	黒色	砂質土	5Y2/1
6	灰色	砂質土	5Y5/1	14	灰色	シルト質土	10Y4/1				
7	灰オリーブ色	砂質土	5Y6/2	15	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1				
8	灰色	砂質土	5Y5/1	16	灰色	シルト質土	7.5Y5/1				

第73図　SE4004実測図

には組目文、もう１面には高台連弧が描かれ、高台外底面には「雅」の銘がある。140～143は木製の箸である。144は木製の差し歯下駄である。145は曲物の底板である。側面３カ所に接ぎ合せのための埋め釘穴があけられている。

土坑186（SK4186）（第67図）

４区のC・D－18グリッドにまたがって検出された長さ約3.2mの大きさの不整形な形の土坑である。底面が平坦に掘り込まれた深さ約0.2mの遺構内にはオリーブ色がかった砂質土が堆積している。

出土遺物（第68図）

146は中国製の染付磁器皿である。内面の文様は制作過程で呉須が流れてしまい、不明である。外面には２本の圏線がある。漳州窯製で1590年から1630年のものである。

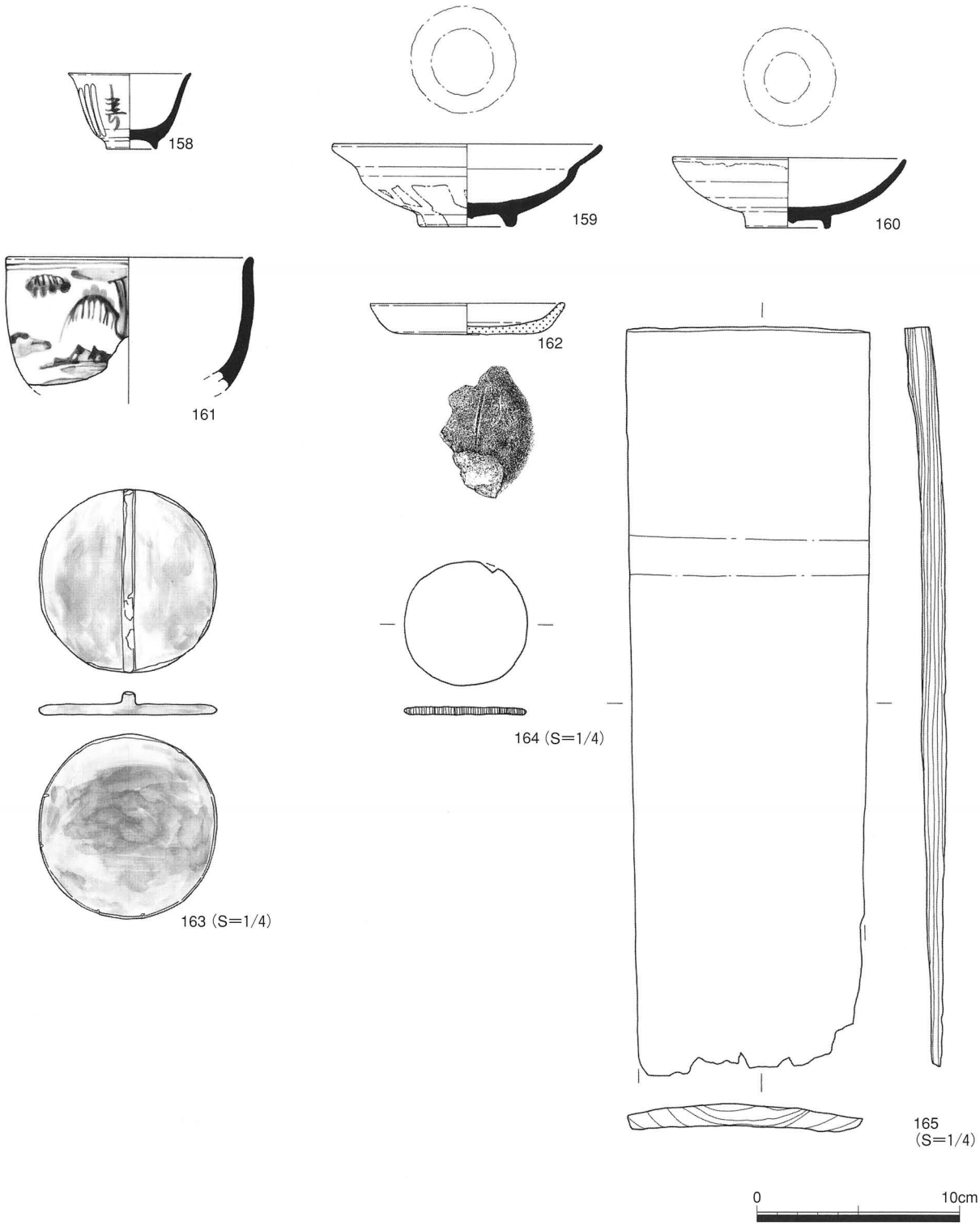
井戸

井戸　1（SE4001）（第69図）

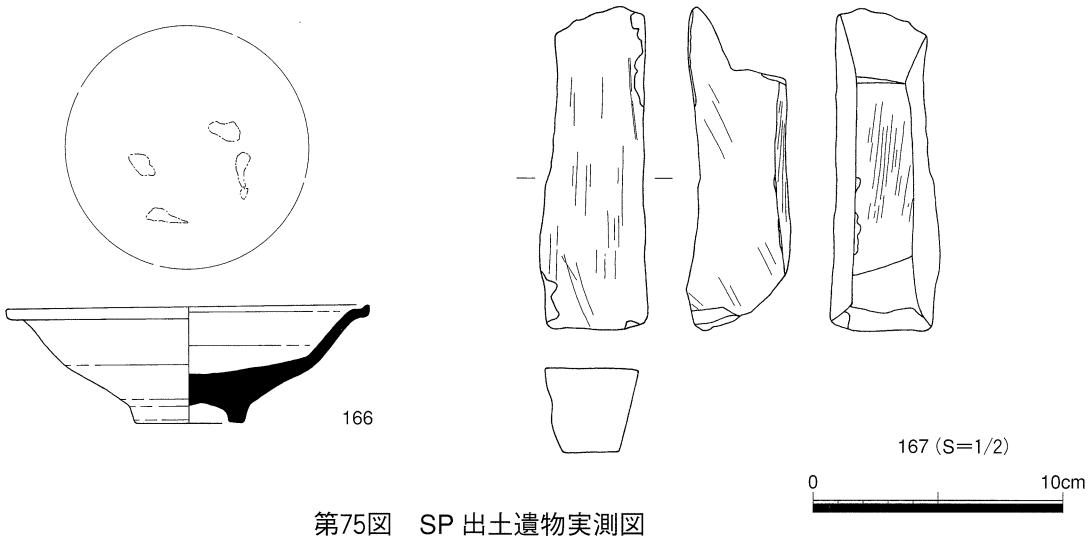
１区のI－６・７グリッドにまたがって検出された直径約2.5m，深さ約１mの大きさの不整円形の掘り込みの中に、直径約60cmの木桶を埋め込んで井戸枠とした円形桶側式の構造を持つ井戸である。木の遺存状況が悪いため木桶が何個使用されていたかは不明である。

出土遺物（第70図）

147は木製の釣瓶である。６枚の部材が組み合わされている。釘穴が８カ所に見える。



第74図　SE4004出土遺物実測図



第75図　SP 出土遺物実測図

井戸３（SE4003）（第71図）

１区のＭ－５グリッドから検出された長さ約1.9m，幅1.6m，深さ1.4m 以上の不整楕円形の掘り込みの中央西よりの部分に、直径約70㎝の木桶を３段重ねて井戸枠にした円形桶側式の構造を持つ井戸である。調査を途中で断念したため、底の状況は不明であるが、井戸の内部からは多量の木片に混じって箸などの木製品が出土している。

出土遺物（第72図）

148は木製の漆椀である。内面は赤漆が塗られているが外面は漆が剥離した痕が残されている。149～155は木製の箸である。156は木簡である。両面に文字が見える。157は用途不明の加工木片である。

井戸　４（SE4004）（第73図）

２区のＤ－14グリッドから検出された長さ約2.5m，幅2.3m，深さ0.5m の不整楕円形の掘り込みの中を、直径約1.2m の大きさで深さ1.6m 以上掘り下げ、底に木杭を打ち込んだ上に直径約60㎝の木桶を二段に重ねて井戸枠とした円形桶側式の構造を持つ井戸である。井戸枠内部の堆積物の中には礫や陶磁器片の他、木片や貝殻片が多く含まれている。

出土遺物（第74図）

158は肥前の磁器盃である。外面には寿文が染付で描かれ、ヘラ彫りが施されている。159は肥前系の陶器皿である。ほぼ全面に灰釉がかけられているが、内面見込部には蛇ノ目釉剥ぎが行われ、高台部分は露胎のまま残されている。160は肥前系の陶器皿である。内面は青緑釉、外面は透明釉がそれぞれ施されるが、内面見込部は蛇ノ目釉剥ぎが行われ、高台部分は露胎のまま残されている。161は山水が描かれた肥前の陶胎染付碗である。162は瓦質土器の皿である。163は木製の蓋である。表面には一文字の取手が貼付けられ、全面に黒漆が塗られている。164は曲物の蓋又は底板と考えられる木製品である。165は木製の井戸枠の上段である。外面には枠痕が認められる。

柱穴

柱穴　43（SP4043）

１区のＤ－３グリッドから検出された長さ約0.3m，幅0.2mの楕円形の遺構である。深さ約0.3mの遺構の埋土中には炭化物と焼土粒を含む砂質土が堆積している。

出土遺物（第75図）

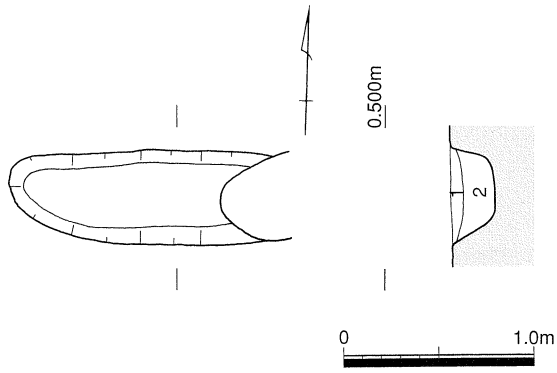
166は肥前系陶器の溝縁皿である。口径143㎜を測り、見込み部には砂目痕が４カ所ある。灰釉がかかるが、内面に露体の部分が２カ所ある。

柱穴　280（SP4280）

１区のＪ－４グリッドから検出された長さ0.5m，幅0.45mを測る不整楕円形の遺構である。深さ0.2mの遺構の埋土中には炭化物と焼土粒を少量含んだ灰色の砂質土が堆積している。

出土遺物（第76図）

167は石製の砥石である。石材は暗緑灰色の細粒砂岩である。



1　灰オリーブ色砂質土　5Y4.2
2　灰オリーブ色砂質土　5Y4/2

第76図　SX4030実測図

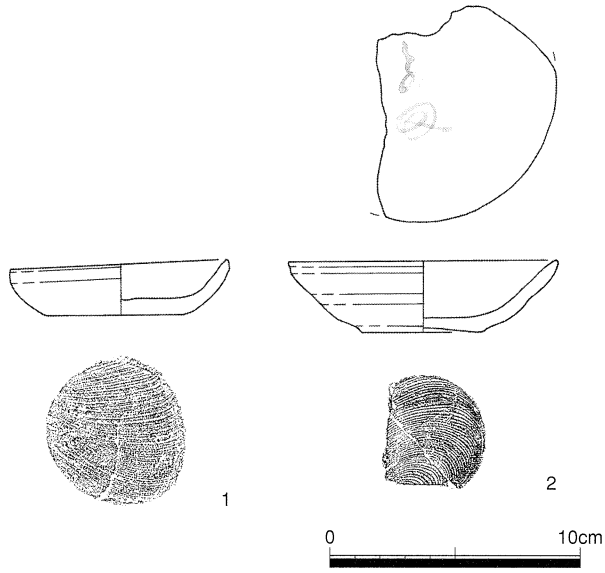
不明遺構

不明遺構30（SX4030）（第77図）

４区のＬ－17グリッドから検出された長軸を東西方向にとる遺構である。遺構の西側が削平されているため正確な大きさは不明であるが、残存する部分は長さ約1.1m，幅0.5mを計る。深さ0.2mの遺構の掘り込みはなだらかで、埋土中には炭化物や焼土粒のほか礫や木片が含まれている。

出土遺物（第78図）

１は土師質の灯明皿である。底部の切り離しには静止糸切り技法が使用され、口縁部には煤が付着している。２は土師質の皿である。底部には回転糸切り痕が残され、内面見込み部には墨書が認められるが文字は不明である。



第77図　SX4030出土遺物実測図

(2) 第３遺構面

掘立柱建物跡

掘立柱建物跡　1（SA3001）（第78図）

１区の北側で検出された梁間４間、桁行５間の東西棟の側柱建物跡である。柱間の間隔は梁間側が1.2～1.6m、桁行側が1.2～1.7mといずれも不揃いで、柱の通りも悪い。柱穴は直径約0.2m，深さ0.2mの円形のものから長さ約0.8mの不整楕円形のものまで、大きさや形がまちまちである。

掘立柱建物跡　2（SA3002）（第79図）

１区北側で検出された梁間１間、桁行２間の南北棟の掘立柱建物跡である。柱間の間隔は梁間間で2.6m、桁行間で1.6～2.4mを測る。柱穴は直径約0.4m～0.7m、円形または不整円形で形、大きさとも不揃いである。

掘立柱建物跡　3（SA3003）（第80図）

３区で検出された梁間２間、桁行３間の掘立柱建物跡である。柱間の間隔は梁間間で3.0～4.0m、桁行間で2.8～4.4mと不揃いで梁行側は柱の通りも悪い。柱穴は直径0.2mから1.0mまでの円形または不整円形のもと、１辺約0.3mの方形のものが検出されている。１基の柱穴は底に礎盤石がすえられている。

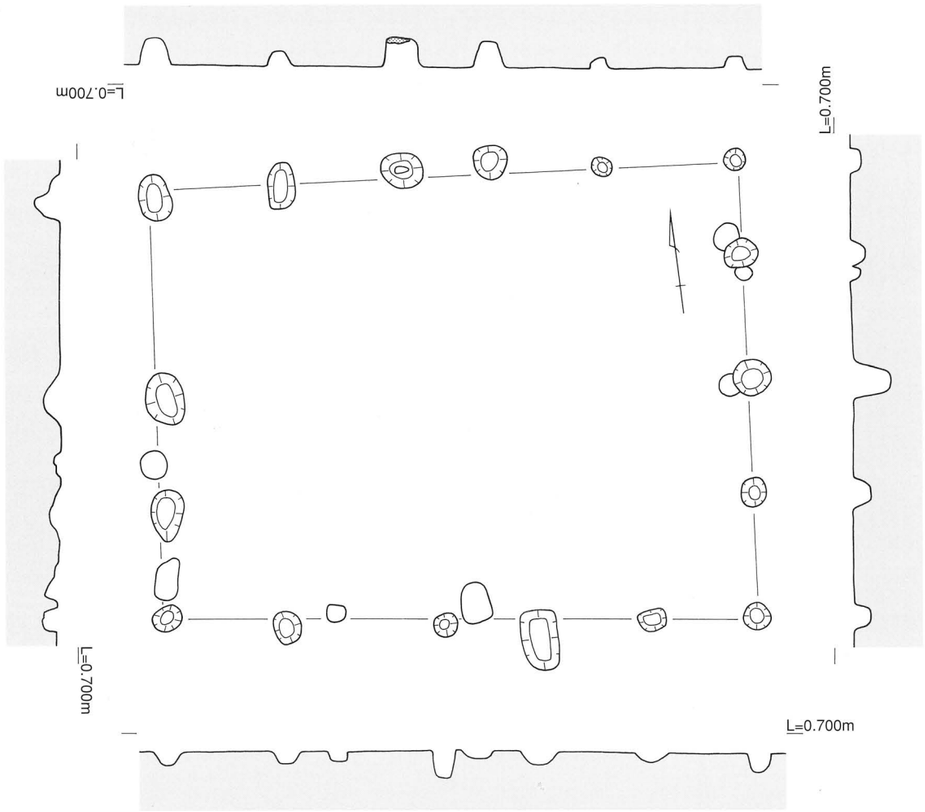
溝

溝　2（SD3002）（第81図）

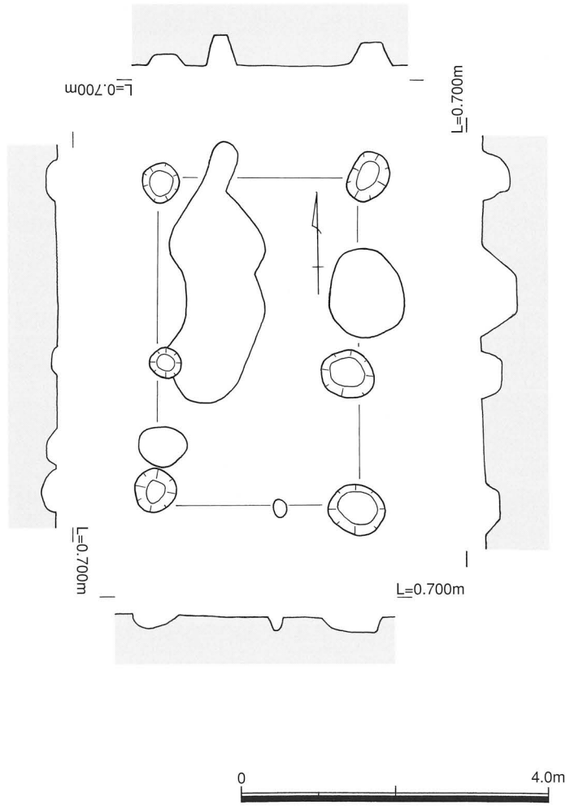
調査区内を北から南に向かって延びる溝SD3005に隣接して検出された、長さ約７m，幅２mの南北方向の溝である。遺構の南側は大きく攪乱を受けているため不明だが、北に向かうほど浅くなり調査区の途中で途切れている。溝SD3003から分岐した可能性がある。溝の底面は、西壁沿いが断面U字型に深く掘り込まれているのに対して、東壁側は一段高く、テラス状に平坦になっている。土層の堆積状況から、もともとは幅１メートル前後の溝であったものを上部を掘削して拡張したか、先行する西側の溝が埋没する過程で東側に別の新しい溝が掘り込まれた２つの溝の切り合いの可能性が考えられる。西側の一段深い部分からは17世紀後半の三島の象嵌唐津が出土している。

出土遺物（第83図）

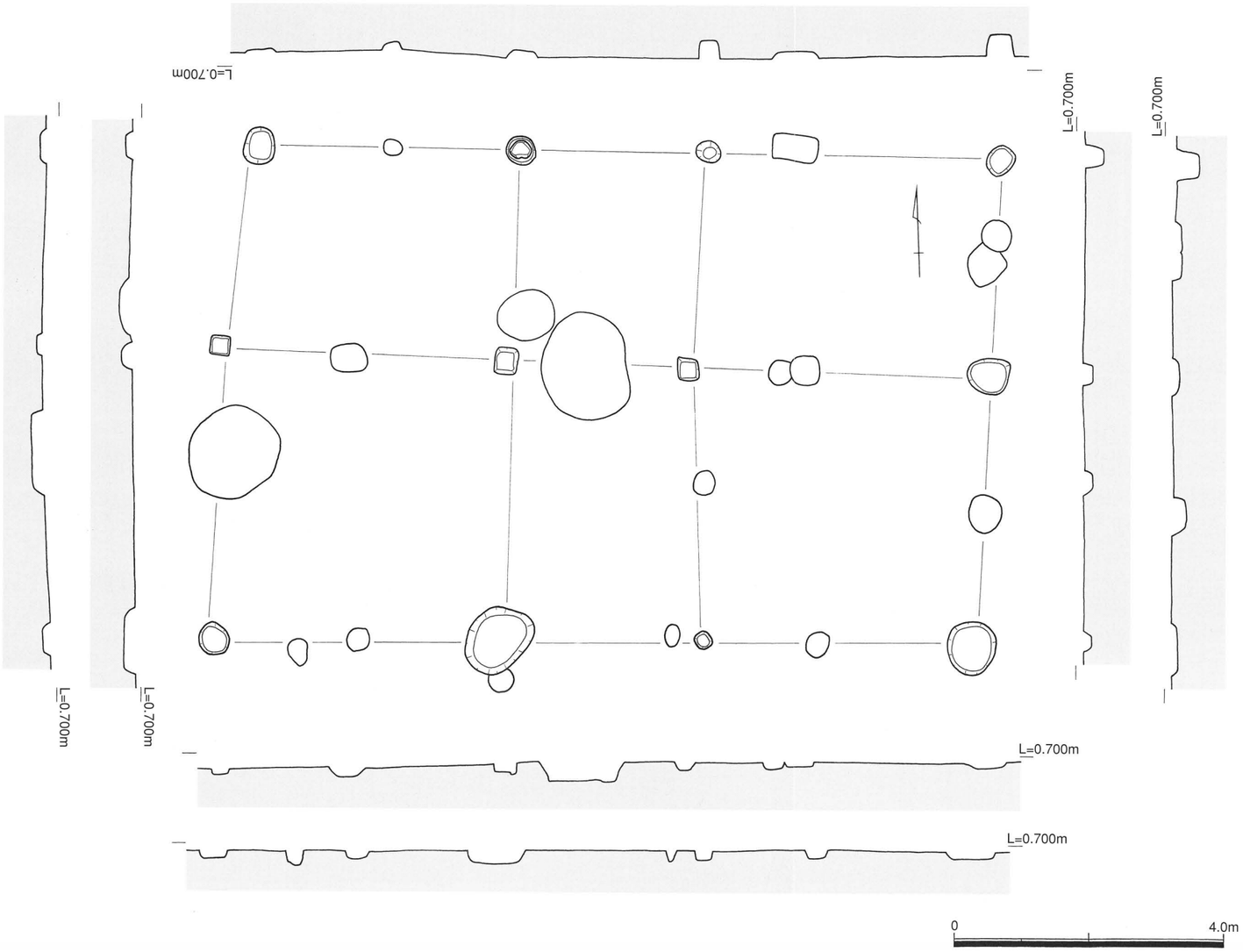
168は肥前系の芙蓉手の染付磁器皿である。型打併用成形で製作されている。169は17C後半の肥前系の三島唐津の陶器大鉢である。陰刻と白泥による象嵌手法を使用して文様が描かれている。高台付近の露胎部分には鉄漿が塗られている。内面見込部には４カ所の砂目痕がある。170は土師質の焙烙である。型作併用成形で製作され、口縁には耳と穿孔がある。171は皿形の鍋類かと思われる銅製品で、口縁部が穿孔されている。



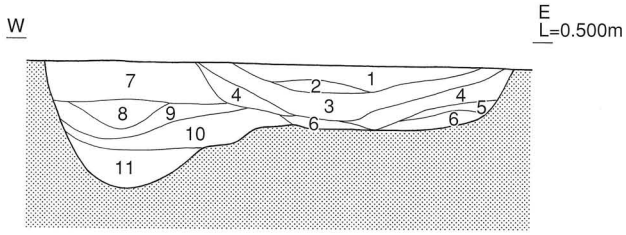
第78図　SA3001実測図



第79図　SA3002実測図

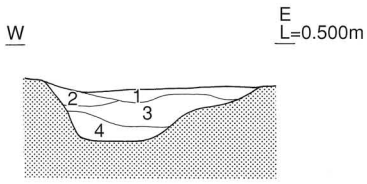


第80図　SA3003実測図



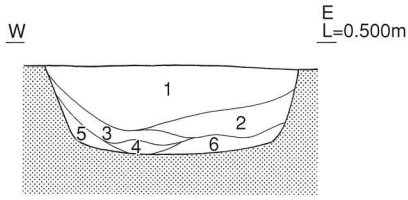
SD3002土層断面図

1	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
2	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
3	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/ 2
4	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
5	灰黄褐色	砂質土	10YR4/2
6	暗オリーブ褐色	砂質土	2.5Y3/3
7	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
8	黒褐色	砂質土	5Y3/2
9	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
10	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2



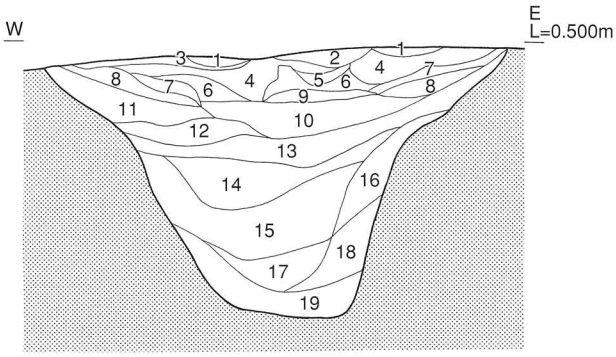
SD3003土層断面図①

1	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
2	灰色	砂質土	5Y4/1
3	灰色	砂質土	7.5Y4/1
4	オリーブ黒色	砂質土	7.5Y3/1



SD3003土層断面図②

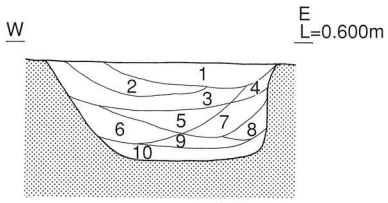
1	黄灰色	砂質土	2.5Y4/2
2	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/2
3	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1
4	暗オリーブ灰色	砂質土	2.5GY4/1
5	オリーブ灰色	砂質土	2.5GY5/1
6	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2



SD3003土層断面図③

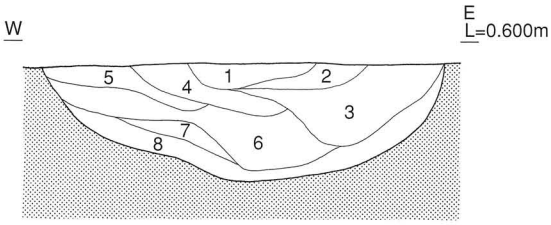
1	褐色	砂礫土	10YR4/4
2	オリーブ褐色	砂質土	2.5Y4/3
3	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
4	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
5	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
6	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/2
7	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
8	灰色	砂質土	5Y4/1
9	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
10	灰色	砂質土	7.5Y4/1
11	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
12	灰色	砂質土	5Y4/1
13	黒褐色	砂質土	2.5Y3/1
14	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1
15	オリーブ黒色	砂質土	7.5Y3/1
16	暗オリーブ灰色	砂質土	2.5GY4/1
17	オリーブ黒色	砂質土	7.5Y3/2
18	灰色	砂質土	10Y4/1
19	オリーブ黒色	砂質土	10Y3/1

第81図　第３遺構面溝断面実測図（1）



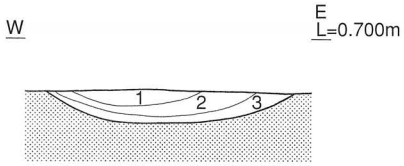
SD3005土層断面図①

1	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
2	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
3	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
4	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
5	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
6	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
7	灰色	砂質土	5Y5/1
8	黒褐色	砂質土	2.5Y3/2
9	黄灰色	砂質土	2.5Y4/1
10	灰色	粘質土	5Y5/1



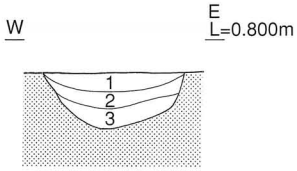
SD3005土層断面図②

1	灰黄褐色	砂質土	10YR4/2
2	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2
3	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
4	灰色	砂質土	5Y4/1
5	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
6	灰黄褐色	砂質土	10YR4/2
7	にぶい黄褐色	砂質土	10YR4/3
8	灰オリーブ色	砂質土	5Y4/2



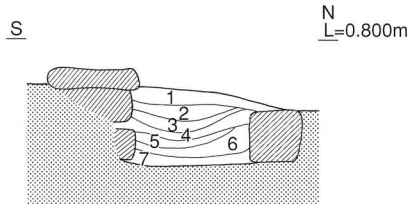
SD3006土層断面図

1	灰オリーブ色	砂質土	5Y5/2
2	暗オリーブ色	砂質土	5Y4/3
3	灰オリーブ色	シルト質土	5Y5/3



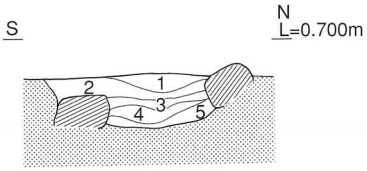
SD3008土層断面図

1	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/1
2	オリーブ黒色	砂質土	5Y3/2
3	灰オリーブ色	シルト質土	7.5Y4/2



SD3009土層断面図

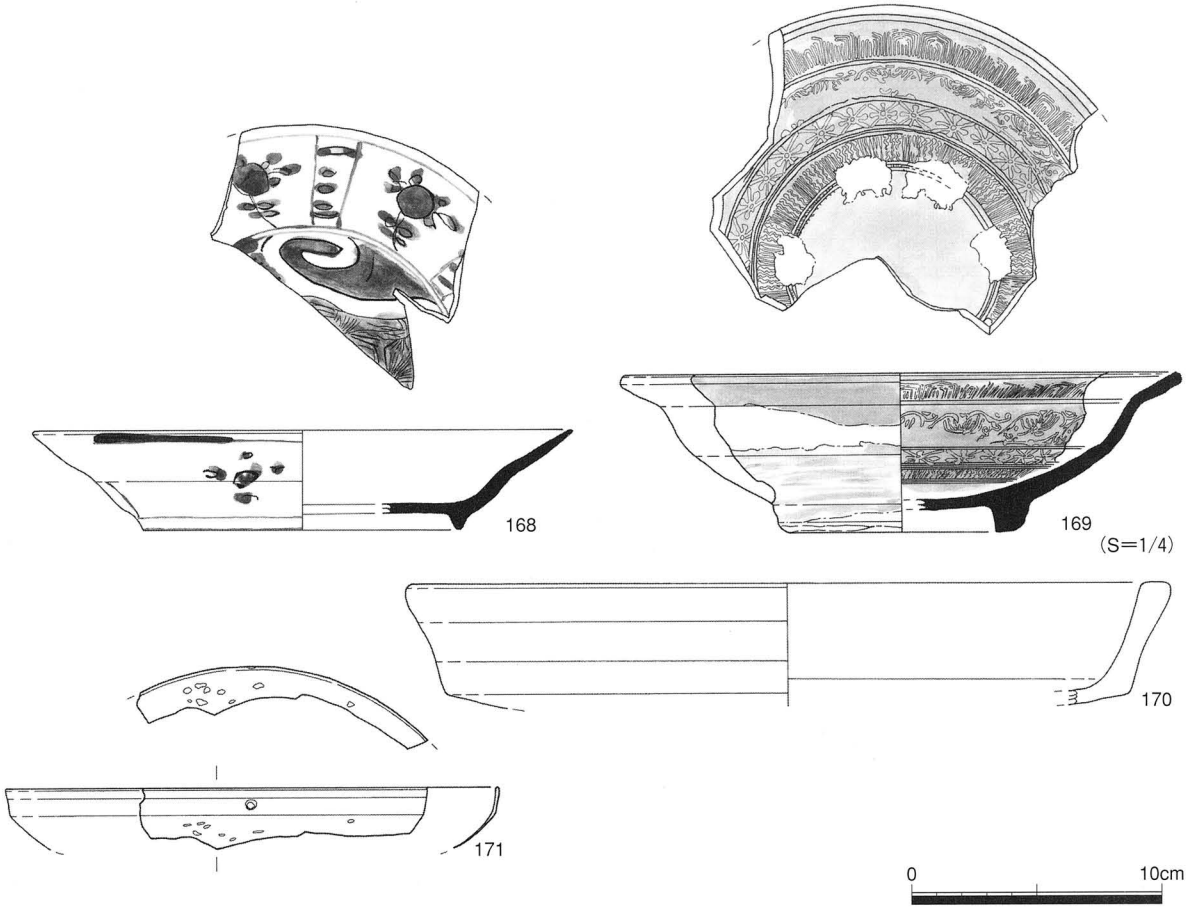
1	灰黄色	砂質土	2.5Y6/2
2	黄褐色	砂質土	2.5Y5/4
3	黄褐色	砂質土	2.5Y5/3
4	黄灰色	粘質土	2.5Y4/1
5	オリーブ褐色	粘質土	2.5Y4/4
6	灰オリーブ色	シルト質土	5Y5/2
7	暗オリーブ色	砂質土	5Y4/4



SD3010土層断面図

1	黄灰色	砂質土	2.5Y5/1
2	暗灰黄色	砂質土	2.5Y4/2
3	黒褐色	砂質土	2.5Y3/2
4	暗オリーブ褐色	砂質土	2.5Y3/3
5	暗灰黄色	粘質土	2.5Y5/2

第82図　第３遺構面溝断面実測図（2）



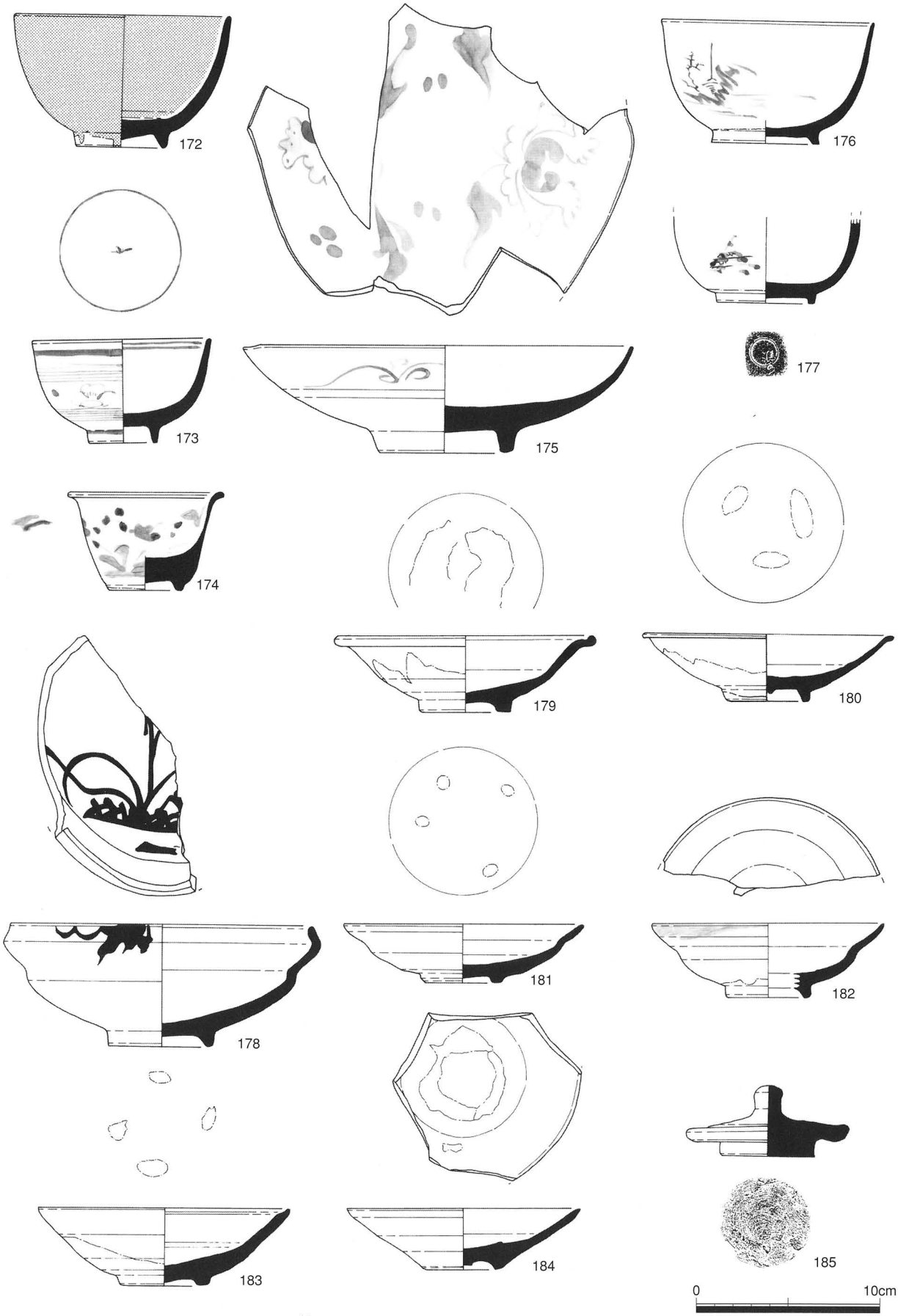
第83図　SD3002出土遺物実測図

溝　3（SD3003）（第81図）

1区の西側を北から南に向かって延びる長さ約46mの溝である。北側は直線的で、調査区の途中で途切れているが、南側は蛇行しながら調査区外に延びている。溝の幅は両端部分では1mほどだが中央付近では2mに達するところがある。第4遺構面では、このSD3003の東壁にあたる位置で30mにわたって連続する木杭列が検出されている。検出された遺構面は一段階古い時期のものだが、状況からすると、もともとはこのSD3003に伴って設置された柵または杭列の可能性が高い。その場合、溝はさらに10m近く北に向かって延びていたものと思われる。

出土遺物（第84・85図）

172は肥前系の青磁碗である。高台部分は露胎のまま残されている。173は肥前系の染付磁器碗である。体部外面には帯線・圏線と椿が、内面見込部の圏線内には草が描かれている。174は外面に染付による草花が描かれた肥前系の磁器端反碗である。高台畳付部分の釉が剥ぎ取られ砂が付着している。175は肥前系の染付磁器皿である。外面には蔓草、内面には花卉文がそれぞれ描かれている。176は京・信楽系の陶器碗である。外面には染付により文様が描かれ、高台外底面には刻印があるが内容は不明である。177は肥前系の京焼風陶器碗である。体部は外面に土坡と岩が染付により描かれ、高台外底面には円刻が刻まれ周辺には「清水」の刻印が捺されている。178は肥前系の陶器皿である。口縁部は内傾しながら丸みを持って立ち上がっている。内面には鉄絵で草花文が描かれ灰釉がかけられている。179は肥前系の陶器皿である。底部外面以外、全面に釉がかけられ、内面見込部には砂目がみられる。17C前半のものである。180は肥前系の陶器皿である。内面全体から外面上半にかけては灰釉がかけられ、内面見込部には3カ所の砂目痕が見られる。181は16C後期の肥前系の陶器皿である。露胎のまま残された底



第84図　SD3003出土遺物実測図（1）